



TITLE:

## 元史刑法志譯注稿(三)

AUTHOR(S):

「中國近世の法制と社會」研究班

---

CITATION:

「中國近世の法制と社會」研究班. 元史刑法志譯注稿(三). 東方學報  
1997, 69: 511-601

ISSUE DATE:

1997-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66779>

RIGHT:

## 元史刑法志譯注稿（三）

### 「中國近世の法制と社會」研究班

#### 詐 偽

七三三 諸て、符寶<sup>①</sup>を偽造するを主謀する、および財を受けて鑄造する者は、皆な死に處す。情を同じくして工匠<sup>②</sup>を轉募する、及び募を受けて字を刻する者は、杖一百七。制敕<sup>③</sup>を偽造する者は、符寶と同じくす。

（1）符は、金虎符・金符・銀符等の牌符、寶は、天子の印璽、寶璽のこと。

（2）『吏學指南』の「知情」の條に「本不同謀、唯知所犯、謂之知情。但、曾預謀、謂之同情」とある。犯罪の謀議に加わることが同情である。四八七條注（1）参照。

（3）制書（詔書）と敕書、即ち詔敕を指す。

【解説】 以下八七三條まで、各種の偽造・詐稱に関する條文が続く。

本條については、『唐律』卷二五・詐僞一・偽造御寶及び詐僞六・詐爲制書及增減、『明律』卷二四・詐僞六・詐爲制書（三七八）、それに兩律の「十惡」中の「大不敬」の條が關連條文である。なお、「詐は、たくらみをもって他人をあざむき、これを錯誤におちいらせて利益を得ること。僞は、僞物をつくりそれを眞物によそおつて利益を得ること。」（『譯注中國歷代刑法志』一〇一頁注②）である。

七三四 諸て、妄りに制書を增減する者は、死に處す。

（1）『元典章』卷五三、詐僞、斷例の表には、「詐傳制書」の「犯人」は「流遠」と見えるのみで、本條に對應する條文はない。『唐律』では卷二五・詐僞六・詐爲制書及增減が關連條文である。

七三五 諸て、近侍の官、輒りに上旨を詐傳<sup>①</sup>する者は、杖一百七、

除名して叙せず。

(1) 『明律國字解』に「制書と云は敕書にてかきものあり、詔旨と云は言語にてかきものなし。詐傳詔旨と云は、詔旨にてもなきを詔旨なりと云ことなり。傳と云は近臣の役なり」とある。皇帝の近侍の官が、皇帝の言葉でないものを皇帝の言葉と偽って擔當官(廳)に報告すること考えられる。

【解説】『唐律』卷二五・詐偽六・詐爲制書及增減では量刑は「絞」——注に「口詐傳及口增減、亦是」とある——、『元典章』卷五二・詐偽の斷例の表には該當條文はなく——「詐傳制書」の「犯人」は「流遠」とある——、『明律』卷二四・刑律七・詐傳詔旨(三七九)の量刑は「斬」であり、本條と異なる。「近侍の官」という限定があるためか。

七三六 諸て、省府の印信・文字を偽造するに、但て制敕を犯す者は、死に處す。若し省府の符符を偽造する者は、杖一百七、再犯は流遠す。情を知るも首せざる者は、八十七。その文理訛謬にして行用に堪えざる者は、九十七。若し司縣の印信・文字を偽造して、平民を追呼し、財物を勒取する者は、初犯は杖七十七。累犯して慢めざる者は、一百七。

(1) 『元典章』には對應する條文がなく、又、卷五二、詐偽、斷例の表の「偽造印信」に見える量刑も本條とは異なる。新集刊

部、詐偽、偽造、偽造省印符付詐關官錢が本條の一部と關連しているように思われる。

(2) 中書省、行中書省の略稱。時期によつては、尙書省を指す場合もある。四六條參照。

(3) 偽造した省府の符符の文章に誤りがあり、とても公式の文書としては通用しない場合は、の意。

(4) 錄事司や縣の印信・文書を偽造して、無實の民を出頭させて拘束し、金品を強要した場合、の意。

七三七 諸て、宣慰司の印信・契本及び商稅務の青由を偽造し、商賈を欺冒する者は、杖一百七。

(1) 『元史』卷九一、百官七、宣慰司に「掌軍民之務、分道以總郡縣、行省有政令則布于下、郡縣有請則爲達于省。有邊陲郡旅之事、則兼都元帥府、其次則止爲元帥府。……宣慰使司、秩從二品。每司宣慰使三員、從二品、同知一員、從三品、副使一員、正四品、……」とある。一三八條注(3) 參照。

(2) 元代においても宋代と同様、土地・家屋・奴隸・家畜を賣買する場合には、賣買の後に官司に届け出て、所定の税金(契稅)を納めて、かわりに官印を押した印契を交付してもらう規定であったと思われる。この時、契稅手續きには官製の用紙を買う必要があり、この官製の用紙を契本と言う。仁井田陞『唐宋法

律文書の研究』九四〇九五頁、同『補訂中國法制史研究<sup>土地法</sup>』  
三四六〜三四七頁參照。

(3) 明代には、縣が農戶に發給する「青由」という納稅通知書があった(森正夫『明代江南土地制度の研究』、同朋舍、一九八八、三三八頁參照)が、元代の商稅務の「青由」については未詳。『研究譯注』は「青紙の書付。由は由單・由狀で文書のこと」とする。

七三八 諸て、赦前に省印を偽造して、赦後に曾て銷毀せざるは、杖七十七。官ある者は、受くる所の宣・敕<sup>(1)</sup>を奪い、除名して絞せず。

(1) この宣・敕はいずれも官員に對する辭令で、告身を指す。一

〇〇條注(1) 參照。

七三九 諸て、掾<sup>(1)</sup>、輒りに省官の押字を造り、省印を盜用し、官職を賣放<sup>(2)</sup>する者は、赦に會うと雖も、流遠す。

(1) 額設の胥吏のうち、中書省所屬の高級胥吏を指すと思われる。『元史』卷三五、百官一、中書の條に「中書省掾屬」として擧げられているのは、監印、知印、怯里馬赤、蒙古必闡赤、漢人省掾、回回省掾、宣使、省醫、玉典赤である。他の官廳の額設胥吏は「吏屬」として總稱されることが多い。

(2) 賣放とは、金品・賄賂を受け受り、罪人や役に充てられるべき人を免れさせることを意味するが、この賣放はこれとは異なるようである。『研究譯注』は「官吏が自己の官職を利用して、勝手に官吏任用のにせものをつくって賣ることを指す」とする。

七四〇 諸て、稅物の雜印を偽造し、顏色を私熬し、偽りて物貨に稅する者は、杖八十七。告捕して實を得る者は、中統鈔一百貫を徵して賞に充つ。物主、情を知るは、犯人の罪より一等を減ず。その匿稅の物は、一半は官に沒し、沒官の物の内において、一半は告人に付して賞に充つ。情を知らざる者は、坐せずして、物は元主に給す。その捕獲の人擅自に脫放する者は、犯人の罪より二等を減じ、財を受くる者は、犯人と同罪。

(1) 『元典章』卷五二、偽、偽造稅印に同内容の文があり、同卷冒頭の斷例の表はこれを簡略化したものである。

(2) 「偽造稅物雜印、私熬顏色、偽稅物貨」は別々のものではなく、一連の犯罪行為を意味している。商稅等課程徵收に際し用いられる官印を偽造し、同時にこの官印の印肉として使用する顏料を私造し、兩者を用いて商品に課稅すること、である。

(3) 商品の持ち主が偽造された稅印であることを知りながら、課稅を受けた場合、の意。

- (4) 偽造の税印で課税された商品は、課程（商税等）の未支拂い物件、即ち「匿税之物」として扱われる。四七一條及び同條の注(1)(2)参照。

【解説】『元典章』によれば、本條は至大年間に江西行省で発生した事件がきっかけになり、皇慶二年に制定されたものである。故に内容は具體的なケースを想定したものとなっている。なお、『唐律』及び『明律』には該當する條文は無い。

七四一 諸て、省部の小史<sup>(1)</sup>、人に誤りて行移・檢扎を毀たれ、輒りに自ら印信を刻し、署押を偽補して、本罪を蓋はんことを求め、他の情弊なき者は、杖七十七、元籍に發す。

(1) 「小史」は「小吏」の誤りであり、中書省・行中書省や六部の中下級の胥吏を指すのであろう。八六條注(2)参照。

(2) 行移は、當官廳から他官廳へ送る文書、あるいは他官廳から當官廳へ送られてくる文書である指揮、牒、呈、申等の各種の上行・平行・下行文書を指す（『元典章』卷一四、行移の條参照）。檢扎は、行移以外の調査・照會文書の類か。未詳。『研究譯註』は「扎は牌のことで、通行證明のふだを指す」とする。

(3) 署押は、官員のサイン、押字のことであり、『研究譯註』が「官印をおすこと」とするのは不適切。

【解説】中書省・行省・六部等の官廳の中下級の胥吏が、誤って官

文書を他の者に毀損され、自分で勝手にその文書を作成し直した場合についての規定であり、本條文のもとになった具體的事件の存在が想定される。

七四二 諸て、僧・道、諸王の印信及び令旨の抄題を偽造する者は、死に處す。

(1) 皇太子・親王が出す命令文書の表題のことか。『研究譯註』は「書付の文書の意」とする。

【解説】『元典章』卷五二、詐、詐寫大王令旨では、量刑は杖七十七——冒頭の表では杖八十七——となっており、本條より數等以上軽い刑となっている。本條では偽造の主体が「僧・道」であり、印信の偽造が構成要件として挙げられていることから異なっているであろう。特權・庇護を求める僧人・道士や寺院・道觀の元朝治下における有様がうかがわれる。

七四三 諸て、印信を偽造するの人を盤獲する者は、強盜を獲うと同じく賞を給す。

(1) 『明律國字解』に「盤獲とは、盤詰してからめとるなり」とある。盤詰捉獲、盤問捉獲の略であろう。詳細に訊問調査の上捕獲すること。

(2) 『元典章』卷四九、強竊盜、強竊盜賊通例の第十條及び同じ

く卷五一、獲盜、獲強竊盜給賞を参照。捕盜官・應捕人以外の者が強盜一名を捕獲することに、鈔五十貫が與えられる規定であった。

【解説】『明律』卷二四・詐僞・偽造印信曆日等(三八一)に、官廳の印信等を偽造した者を「告・捕」した場合の給賞に關する規定が見える。

七四四 諸て、曆日<sup>(1)</sup>を私造するを告獲する者は、銀一百兩を賞す。如し太史院<sup>(2)</sup>の曆日の印信なければ、便ち私曆に同じ。造る者は、違制<sup>(3)</sup>を以て論ず。

(1) 『元典章』卷五二、詐僞、斷例の表の偽造曆日に關連條文あり。

(2) 『明律國字解』は「曆日は、官府の日記なり」とするが、これは『唐律』卷九・職制二〇・私有玄象器物に「七曜曆、謂日・月・五星之曆」とあるような、個人での私有が許されない、國家制定の曆——元朝では授時曆——を指すと考えた方がよいであろう。

(3) 『元史』卷八八、百官四、太史院には次のようにある。太史院、秩正二品。掌天文曆數之事。至元十五年、始立院、置太史令等官七員。至大元年、陞正二品、設官十員。延祐三年、陞正二品、設官十五員。後定置院使五員、正二品、同知二員、正三

品、……

(4) 違制とは、制書に違反したり、主旨を取り違えて施行すること。一二二條注(3) 参照。

【解説】『唐律』には關連條文は見い出せない。『明律』卷二四・詐僞・偽造印信曆日等(三八一)が本條を受け繼いだものと考えてよいであろう。

七四五 諸て、財を受けて他人に敕牒<sup>(1)</sup>を賣る、及び收買して轉賣する者は、杖一百七、刺面して元籍に發す。買う者は、杖八十七、元籍に發す。

(1) 『元典章』卷五二、詐僞、斷例の表に、「偽造印敕牒」の「爲首」は「處死」であり、「餘人杖斷」とある。この「餘人」が本條に該當すると考えられる。

(2) ここで言う敕牒とは、宣命・敕牒、即ち告身である宣・敕のうちの後者、敕牒・敕を指すと考えられる。『通制條格』卷六、選舉、除授身故に「至元八年二月、中書省議得、今後奏准除授官員、宣命・敕牒、未經祇受、遇有身故者、擬依舊例、聽親屬告請、給付其家。奏奉聖旨、准」とあるのが参考となる。

【解説】官員で自分の告身である敕牒を他人に賣つた者、及びこれを買取りさらに他へ賣却した者は、杖一百七の上、顔に刺<sup>す</sup>して、原籍に發還させるといふ、官員に對する處罰としては嚴しい内容で

ある。『唐律』『明律』ともに関連条文は見えない。

七四六 諸て、職官、差を被りて、疾を以て、輒りに人をして代りて驛傳に乗りて往かしむる者は、杖六十。代る者は、笞五十七。

(1) 『元典章』卷一四、差委、被差不得稽留の第三條に「被差之後、忽有疾病、委妨起發、仰呈司照詳。若有病而不呈者、亦從罰例」とあるのが関連条文である。

【解説】『元典章』からもわかるように、差出の命を受けて、病氣を理由として、代りの者を驛傳を使って行かせるのが問題とされているのではなく、「呈司照詳」することなく、「輒令人代乘驛傳而往」が違法行為とされているのである。

七四七 諸て、公差、官船において從人を來帶し、分例を冒支する者は、笞二十七、過を記す。支過せる分例米は、追徴して官に還す。

(1) 『元典章』卷二二、追徴、格前追徴錢糧稟例、同じく卷五四、違例、禁差使多取分例の條が關係する。

(2) 使臣として差出した官員に對して、行程の途中の驛站等で供給される食料・燃料・馬等の規定額のこと。『元典章』卷一六、分例の冒頭部分、及び同じく使臣、定下使臣分例に詳細に項目・數量が擧げられている。

(3) 『吏學指南』には「謂假人姓名、代給其物者」とあり、『明律

國字解』には「冒支とは、人の名をなかりて人のぶんを手前へとるなり」と見え、いずれも同様の意味に解している。

(4) 記過とは、官員が在任中に犯した罪名を解由に書き込むこと。六二條注(2) 參照。

七四八 諸て、使臣と詐稱し、給驛の文字を偽寫して、馬匹・舟船を起す者は、杖一百七。有司、覺察に失し、輒に印信なきの關牒に憑りて倒給する者は、判署官は笞三十七、首領官・吏四十七。

(1) 『元典章』卷五二、詐、詐騎鋪馬斷例に本條文制定のきつかけとなった事件が見えるが、「有司」以下の文はない。

(2) 驛站の使用を許可する證明書。『元典章』卷三六、給驛の各條參照。

(3) 『明律國字解』に「倒給は、換てわたすことなり」とある。「給驛文字」關牒に從つて、分例(馬匹・舟船)を供給すること。

(4) 路の官員では、管民長官の總管と、正官である同知、治中、判官、推官を判署官と總稱する。宮崎市定「宋元時代の法制と裁判機構——元典章成立の時代的・社會的背景——」(『東方學報京都』二四、一九五四) 一五九—一六〇頁。

(5) 首領官は經歷、知事、照磨、提控案牘、都目、吏目、典史を言う。四八條注(1) 參照。

七四九 諸て、職官、上司の言語を詐傳し、擅に驛馬を起す者は、杖六十七。脱脫禾孫<sup>(1)</sup>、依隨して擅に驛馬を給する者は、答五十七。並に職を解きて別敍し、過を記す。驛官<sup>(2)</sup>は、二十七、職に還す。

(1) 二五四條注 (3) 参照。

(2) 站官を指し、各驛站到置かれた提領と副使のこと。『元典章』卷九、站官、選取站官事理の條を参照。

【解説】 以上四條(七四六、七四九)は、官員の驛傳使用の際の詐偽に關わる條文である。前二條は、差出の命を受けた官員の不正、後二條は、使臣ではない官員が驛傳を使用した場合についての規定である。本七四九條は、文書の偽造ではなく、口頭で上級官廳の命と詐つて驛傳を使用した官員に對しての處罰であり、七四八條よりも量刑が輕くなつており、脱脫禾孫・驛官にまで處分が及んでいるのが特徴である。

七五〇 諸て、按部官と詐稱して、官・吏を恐嚇する者は、杖六十七。

【解説】 杖六十七という量刑からすると、『元典章』卷五二、詐、無官詐稱有官、又例が當てはまるが、不明な點が依然として残る。「按部官」は、『元典章』では、「監察(御史?)」となつてゐるが、『研究譯註』では「官吏の監察を任とする按察司(肅政廉訪司)の官のこと」とする。

七五一 諸て、監臨長官<sup>(1)</sup>の署置・差遣と詐稱して、錢物を欺取する者は、杖八十七、錢物は官に沒す。

(1) 當該官廳の「監臨」官のうちの長官。「監臨」する對象が何であるかにより、官廳あるいは部局も變つてくるが、「監臨長官」は當該官廳・當該部局の最高位の官員と見なしてよいであらう。『研究譯註』は「地方長官たる達魯花赤を監臨長官とも稱す」と解する。

(2) 臨時代理の官あるいは差出派遣官であると詐ること。

七五二 諸て、奉使<sup>(1)</sup>の委する所の官と詐稱して、民訟を聽理する者は、杖九十七。隨行の令史と詐稱する者は、答五十七。

(1) 奉使宣撫のこと。『元史』卷九二、百官八、奉使宣撫に次のようにある。至正五年十月、遣官分道奉使宣撫、布宣德意、詢民疾苦、疏濬冤滯、蠲除煩苛、體察官吏賢否、明加黜陟。有罪者、四品以上停職申請、五品以下就使處決、民間一切興利除害之事、悉聽舉行。其餘必合上聞者、條具入告。

(2) 民間の訴訟を取り上げ裁くこと。

【解説】 裁判・民政・財政等地方行政全般にわたる巡察を行い、官・吏の監察を行う目的で地方別に派遣された臨時特別職の官員である奉使宣撫により委任された官であると詐つて、訴訟を受理して裁いた者や、その者の隨行の胥吏と詐稱した者に對する處罰規定であ



る。なお、奉使宣撫が始めて各地に派遣されたのは百官志の記述よりも早く、大徳七年に溯る。『通制條格の研究譯註』第三冊三八頁注①参照。

七五三 諸て、寶鈔<sup>(2)</sup>を偽造するに、首謀・起意する、並びに雕板する、抄紙する、顔料を收買する、字號を書填する、窩藏する、印造する、但て情を同じくする者は、皆な死に處す。仍おその家産を沒す。兩隣、知りて首せざる者は、杖七十七。坊「里」正・主首・社長<sup>(4)</sup>、覺察に失す、並びに巡捕の軍兵は、各々笞四十七。捕盜官及び鎮守・巡捕の軍官は、各々三十七。いまだ賊徒を獲されば、強盜の立限に依りて緝捕す。偽鈔を買使する<sup>(5)</sup>は者、初犯は杖一百七、再犯は徒一年を加え、三犯は科斷して流遠す。

(1) 『元典章』卷二〇、鈔法、住罷銀鈔銅錢使中統鈔の第四〇七條、及び同じく偽鈔、造偽鈔不分首從處死、また禁治偽鈔に同内容の文が見え、同卷冒頭の鈔法の表の偽造寶鈔にこれらが整理された形で載せられており、本條文とはほぼ一致する。

(2) 元朝治下で發行された紙幣を指す。

(3) 金朝時代に沿源する、城郭・鄉村地域の徵稅・勸農・巡警等の任に當る職役。坊正は路府州縣の城内を擔當し、鄉村で郷毎に置かれたのが里正で、主首はこの里正を輔佐する役であった（松本善海『中國村落制度の史的研究』岩波書店、一九七七、

八六〇八七頁）。刑法志本文には「里」の字はないが、『元典章』より補なった（中華書局『元史』卷五三の校勘記「一」参照）。

(4) 鄉村地域の五十家を單位として社が組織され、この社の責任者を社長と言う。社長は、「一社内において、高年にして農事に通曉し、かつ一家内に別丁を有する者一人を社衆をして推舉せしめ」（松本前掲書九四頁）られた者であり、主たる任務は勸農であった。五〇〇條注（一）参照。

(5) 『元典章』卷五一、捕盜、斷例の表参照。

(6) 『元典章』卷二〇、偽鈔、禁治偽鈔では「知情分買行使之人」とある。偽造紙幣であることを知りながら購入し、更に紙幣として使用する者、の意。

【解説】紙幣を偽造した場合は、首謀者・同情の者（謀議に加わった者）を問わず、全て死刑という重い量刑になっており、元朝政府にとり如何に紙幣發行制度が重要であつたかが看取される。紙幣偽造の各工程を細かく一つ一つ擧げているのも特徴である。『唐律』では、卷二六・雜律三・私鑄錢が關連條文であるが、量刑も軽く、又當然紙幣を念頭に置いたものではない。『明律』卷二四・刑律・偽造寶鈔（三八二）は、本條をほぼそのまま受け継いでいる。以下七六四條まで紙幣に關しての條文が續く。

七五四 諸て、偽鈔を捕獲するは、銀五錠<sup>(2)</sup>を賞す。銀を給して鈔を

給さず。

(1) 『元典章』卷二〇、鈔法、住罷銀鈔銅錢使中統鈔の第八條、及び同じく偽鈔、應捕人捉獲偽鈔理實に同内容の文あり。

(2) 一錠は五〇兩。銀五錠は、重量二五〇兩(九・三二五kg)の銀塊に當る。

【解説】 前條の量刑の面と同様、紙幣を偽造した者を捕獲した場合の賞與額の多さが際立っている。『元典章』では「賞銀五定」に續けて「仍給犯人家産。應捕減半」とあることから、本條は、「應捕人」以外の一般の者が犯人を捕えた時の規定である。『明律』卷二四・刑律・偽造寶鈔(三八二)でも「告捕者、官給賞銀二百五十兩、仍給犯人財産」とあり、元代と全く同じである。なお、強盜犯一名を捕えた場合の賞金は紙幣五〇貫であった(『元典章』卷五一、獲盜、獲強竊盜給賞)。

七五五 諸て、父・子共に偽鈔を造る者は、皆な死に處す。

七五六 諸て、父偽鈔を造り、子給使に聽したがつうは、父と同には坐せず。子偽鈔を造り、父同には造らざるは、子と同には坐せず。

七五七 諸て、夫寶鈔を偽造する者は、妻は坐せず。

【解説】 以上三條は、家族成員としての父・子・夫が紙幣偽造の罪

を犯した場合の、子・父・妻への刑の適用に關するものである。七五五條では、いずれが首犯であるか從犯であるかは問題とされず、ともかく紙幣偽造の行爲に關わった時は、父・子いずれも七五三條の規定通りに死刑となっている。七五六條は、父もしくは子の一方のみが紙幣偽造を行った場合である。偽造行爲そのものには關わらなかったものの、偽造者である父の命により使役された子も、死刑(Ⅱ父)から何等か減じて刑を科され、逆に子が紙幣偽造を行った時も、同様に死刑(Ⅱ子)から何等か減じて刑を科されるという規定である。ただしここでは、「不與父同坐」「不與子同坐」とあるのみで、具體的な量刑はわからない。七五七條は、夫が紙幣偽造を行つても、妻は——偽造行爲に關わらない限り?——罪に問われないというものであり、七五三條で兩隣・坊正・里正・主首・社長が處罰の對象となっているのと對照的である。

七五八<sup>(1)</sup> 諸て、寶鈔を偽造して、印板全からざる<sup>(2)</sup>者は、杖一百七。

(1) 『元典章』卷二〇、偽鈔、印造偽鈔未完、同じく新集戸部、鈔法、偽鈔、偽鈔板未成遇革釋放に同内容の文あり。

(2) 『元典章』によれば、「印板不全」とは、紙幣の表側に印刷すべき「有偽造者處死」の文字を印板に彫り終えていないようなケースが想定されている。

七五九 諸て、寶鈔を偽造するは、その家産を没するも、その妻子に及ばず。

【解説】 紙幣を偽造した場合、犯人は死刑に處した上で、犯人の家の財産は没官とされるが、犯人の妻・子は没官とはならない意。

七六〇 諸て、赦前に偽鈔を收藏し、赦後に行使する者は、杖二百

七。曾て行使せざるも首せざる者は、一等を減ず。

【解説】 赦が發せられる以前に偽造紙幣を手に入れ、赦が發せられて以後にこの偽造紙幣を使用した者は、杖一百七の刑に處すという本條は、七五三條の「買使偽鈔者、初犯杖一百七」という規定と同じである。紙幣偽造に關しては、會赦の有無は考慮されないということが特徴である。

七六一 諸て、鈔を偽造して、罪死に應る者は、親老い兼丁なしと雖も、上請するを聽さず。

【解説】 紙幣を偽造した場合は、死刑に該當する犯人の家に、年老いた親の面倒を見るべき成丁が他に居ない場合でも、上奏して天子の裁可を仰ぎ、罪一等を減ぜられる措置はとつてはならない、との意。兼丁とは、一家の中に複数の成丁が存在することを意味し、「無兼丁」とは、一家の中に成丁が一人のみの場合を言う（六四八條注（2）、一〇九九條參照）。

七六二 諸て、寶鈔を偽造するの人を捕獲すれば、已に身故すると雖も、その應に得べき賞錢は、仍おその親屬に給す。

【解説】 紙幣偽造の犯人を捕えたその人が死亡しても、賞與の銀五錠はその家族に支給するという條文であり、ここにも元朝政府が紙幣の偽造に神経をとがらせていたことの一端を見ることができ。

七六三 諸て、奴婢、偽鈔を買使し、その主、陳首する者は、理賞の例にあらず。

【解説】 奴婢が偽造紙幣を購入・使用し、この奴婢の主人が官に告發しても、賞金を支給されない、という規定。

七六四 諸て、寶鈔を挑剗・裨褻する者は、首・從を分かつず、

杖一百七、徒一年。再犯は流遠。年七十以上の者は、呈稟して定奪し、輒に贖を聽すなかれ。<sup>(3)</sup> 買使する者は、一等を減ず。

（1）『元典章』卷二〇、挑鈔、買使挑鈔斷例、同じく挑補鈔犯人罪名、同じく侏儒挑鈔斷例に同内容の文あり。

（2）『明律國字解』に「挑剗描湊と云は、挑はかかけ、剗はえぐるなり、鈔の文をけづりとりたるなり。描湊は、描はえかく、湊はたすなり。鈔の文をかきたしたるなり」「挑剗補褻描改とは、挑剗はふるき印文をけづりをとしえぐりとなるなり、補褻はつくるふなり、描改はかきなをすなり。これはたとえば、百文

の寶鈔を一貫文にせんとて、百文の形のある處をけづりをとしえぐり取りて、其あとを外の紙にてつくろひて、上に一貫文の形をかきなほすときは、百文のまことの鈔を一貫文のにせ鈔にするゆへ、以眞作偽と云なり」(傍點筆者)と詳しく説明している。

(3) 年七十以上の老人は、本來贖罪が認められていた(三一條、及び同條注(1)参照)が、紙幣偽造の場合は、上級官廳に指示を仰いであら、贖罪を許すという意である。現場の官司の判斷で贖罪規定の適用をしてはならないという點が特徴的である。

『元典章』の侏儒挑鈔斷例が關連條文であり、贖罪の金額も見えている。

【解説】『明律』卷二四・刑律七・偽造寶鈔(三八二)には「若將寶鈔、挑刺補換描改、以眞作偽者、杖一百、流三千里。爲從及知情行使者、杖一百、徒三年」とあり、量刑はやや重くなっているが、本條とは異なり、首犯・從犯で量刑が違っている。

七六五 諸て、偽銀を燒造する者は、徒。

七六六 諸て、偽銀を造賣し、買主情を知らざれば、價錢は主に給す。偽銀内より眞銀を銷提して官に沒し、本犯に依りて科罪す。

【解説】 以上二條は、純度の低い銀を製造・販賣した場合の處罰規

定である。七六六條は、偽銀と知らずに買った者には、偽銀の代價が返され、偽銀は溶解して不純物を取り去った上で沒官處分とされ、偽造犯人は徒刑を科される、という内容である。

七六七 諸て、各倉支發の糧<sup>(1)</sup>を偽造する者は、笞五十七。已に官

糧を支出する者は、係官の錢物を盜むに準じて科罪す。倉官人等、犯ある者は、監主自盜の法に依り、贓重き者は重に従りて論す<sup>(4)</sup>。

(1) 未詳。『研究譯註』は「糧米を支出するための書付」とする。

(2) 『元典章』卷四九、諸盜一、冒頭の表の「盜庫藏錢物」の部分がこれに該當すると思われる。ただし、延祐四年以後は「入官庫去偷錢物的賊根底敲了」となる(同じく強竊盜、入官倉庫偷錢物底敲了の條参照)。

(3) 『元典章』卷四七、侵盜、侵盜錢糧罪例の第一條、及び同じく諸贓二、冒頭の表を参照。「監主自盜法」とは、『唐律』卷一九・賊盜律三六・監臨主守自盜に「諸、監臨主守自盜及盜所監臨財物者(……)、加凡盜二等」を指す。「監主」は「監臨・主守」をちぢめた語。『唐律』の監臨・主守の定義については、『譯註日本律令六』三五三頁註1を参照。

(4) 複数の盜罪を犯している場合は、最も重い罪で裁く意。

七六八 諸て、官錢を冒<sup>(1)</sup>支するは、贓を計り、枉法を以て論じ、並

びに除名して敘せず。<sup>(2)</sup>

(1) 『明律國字解』に「冒支とは、人の名をなのりて人のぶんを手前へとるなり」とあり、『吏學指南』には「謂假人姓名、代給其物者」とある。

(2) 『元典章』卷四六、諸贓一の冒頭の表、及び取受、贓罪條例(十二章) 参照。

七六九 諸て、冒名して入仕する者<sup>(1)</sup>は、杖六十七、受くる所の命を奪い、追俸して元籍に發す。<sup>(2)</sup>赦に會うも首せざるは、笞四十七、仍おこれを追奪す。

(1) 『明律國字解』に「冒支と云は、別人の姓名をなのることなり」とある。他人の姓名を名乗って官員となる者の意。

(2) 與えられた告身を取り上げ、受領した分の俸給を返還させ、庶人とした上で、戸籍に登録されている州縣へ送還する意。

(3) 告身を取り上げ、俸給を返還させる意。『明律國字解』は「追奪とは、誥命を追奪するなり」「誥敕をとり上らるるなり」とするが、ここでは支給分の俸給も含まれていると解すべきである。

七七〇 諸て、奴、主の命を受けて職官に冒充する者は、杖九十七。その主、及び同僚<sup>(1)</sup>の相い容隠する者は、八十七。

(1) 同僚とは、當該官廳の官員全てを指す。『明律國字解』にくり返し説明がある。

【解説】 本條のようなケースを想定した上での處罰規定を設けていることが、まさに元朝時代の特徴と言えるであろう。本條の「其主」は官員であり、奴が「冒充」した「官職」は、「其主」のそれと考えられる。

七七一 諸て、子、父の官を冒して職に居り事に任ずる者は、杖七十七。犯、革前<sup>(1)</sup>に在り、革後<sup>(2)</sup>出首せざる者は、笞四十七。並びに受くる所の宣・敕、及び支過せる俸祿を追回して官に還す。

(1) (2) 『明律國字解』に「革前革後とは、赦前赦後と云ことなり」とある。「革」は「革撥」の意。四五四條注(1) 参照。

【解説】 子供が勝手に父親の官職に就き職務を行った場合の規定。これも前條と同じく、通常の中華王朝では考えられない事態である。

七七二 諸て、邊臣、輒りに子婿を以て、招徠の蠻獠と詐稱して、土官<sup>(1)</sup>に保充<sup>(2)</sup>する者は、除名して敘せず、授くる所の官を拘奪す。

(1) 三四四〜三四六條参照。

(2) 保勘差充の意。

七七三 諸て、軍官、承襲に、偽りて年を増す者は、監察御史・廉訪司これを糾察す。濫保の官吏は、並びに罪に坐す。

【解説】『元典章』卷八、承襲、軍官承襲例、同じく軍官年二十歲承襲、『通制條格』卷六、軍官襲替に關連史料がある。軍官が身故、年老（七十歲）、患病等の事情で職務を遂行し得ない場合には、その軍官の子孫弟姪がその官を繼承することになっていた。なお、軍官を繼ぐべき子孫弟姪は、他の官員により武藝・事務能力・年令等の適正審査を受けて保證（保勘）してもらう必要があった。濫保とはこの審査をいいかげんにして保證をすることである。

七七四 諸て、職官、出身・履歷を妄報する者は、除名して敘せず。

【解説】官員が任期滿了等で別の官職に遷る場合に、その上官が保證人となり作成發給する解由内に記すべき出身・履歷を偽って書き、吏部に提出した時には、當該の官員は除名して職を解き、再びは任用しない、という意であろう。出身は、『元典章』卷一一、給由、解由體式の第三條に「一、本官根脚、原係は何出身」とあり、その割注に「謂承襲・承繼・廕敘・吏員・儒業・軍功等」とあるのが参考となる。解由に記すべき當該官員の任期中の罪過を書かなかつた場合（一〇九條）と本條とは異なる。

七七五 諸て、譯史・令史<sup>(1)</sup>、過ありて敘せられざるに、作闕と詐稱

して、別處に補用せらるる者は、答五十七、役を罷めて敘せず。

(1) 譯史は翻譯係の胥吏、令史は中央官廳や行省に置かれた上級胥吏。

(2) 作闕とは、あるポストに任じられた官員が丁憂・病氣その他の事情で赴任できなくなった場合、そのポストは缺（あき）として扱われること。『元典章』新集吏部、職制、作闕、官員事故申官作闕、『通制條格』卷六、令譯史通事知印の大徳七年二月の條參照。

(3) 『研究譯註』が「詐稱して闕を別處に作り補用する者」と訓讀するのは誤り。

【解説】譯史・令史をはじめとする胥吏は、一定の年限を勤め上げること（考滿）により、品官に任用される規定であつた。胥吏としての職務において犯罪行為があつたため、品官への任用が許されない譯史・令史が、ポストが空いていると詐稱して、他官廳で品官ポストに就くこと（別處補用）に對する處罰規定が本條である。この場合、譯史・令史はその胥吏ポストを追われ、以後は任用されないこととなる。

七七六 諸て、官物を輸納するに、輒りに朱鈔を増改する者は、杖六十七、これを罷む。

(1) 朱鈔は、民戸が所定の官倉に租税を納入した際に、官から民

戸に發給される受領證で、納税證明書としての機能もあった。宋代では、戸鈔、赤鈔とも言った。『元典章』卷二四、納税、小戸帶納者聽、同じく徵納稅糧の第二條參照。『研究譯註』が「役所の窓口の手數料をいう」とするのは誤り。

【解説】 稅物を民戸が輪納する際に、倉庫官や攢典・庫子等の胥吏が、納稅領收書内の數値を勝手に納稅分の數量よりも多く記した場合の處罰規定で、擔當の官員・胥吏は解職處分となる。

七七七 諸て、有司の長官、輒りに追到せる盜賊を以て支使し、却て主に給する文案を虛立する者は、赦に會うと雖も、職を解き、先職より二等を降して敘す。承吏は除名して敘せず。

(1) 路府州縣の管民長官である總管、知府、縣尹等を指す。

(2) 強盜・竊盜犯が取得した財物のことであり、本來の所有者に返還されることになる。『吏學指南』には「盜賊。不以強竊、但係官物者還官、私物還主、若無主仍沒官」とある。

(3) 承吏は、承發吏人——文書（文案）の受領・發給擔當の胥吏の意。

【解説】 路總管等の管民長官が、犯人から沒收・追徴した贓物を、本來の所有者に返還せず、勝手に支出・使用し、それを蔽い隠すために、所有者に返還したという文書を偽造した場合、恩赦が出てても現職を解き、二等品階を下げて別職に就け、偽造文書の發給に携わ

った胥吏は解任して今後一切任用しない、という内容である。

七七八 諸て、帥府の功を上す文字、功あるの軍人の名數を詐添するは、主謀する者は、杖八十七、除名して敘せず。隨從して書寫する者は、答五十七。

(1) 都元帥府、元帥府を指す。一三二條注(2)參照。

七七九 諸て、詐りて軍功を以て擧を受けて入仕する者は、これを罷めしむ。仍お、受くる所の命を奪う。

(1) 新たに軍官の職を得て入仕する際には、他の軍官により推擧してもらふ必要があり、これを保擧と言う。「受擧」とは、保擧をしてもらうこと。『明律國字解』に「保擧は、推擧することなり、保はうけに立ことなり。推擧人がうけの意なるゆへ、推擧することを保擧と云」とある。

【解説】 以上二條は、軍人・軍官の軍功・入仕に關しての規定である。『元典章』卷九、軍官、軍功合指實跡、同じく軍官依例保擧、『通制條格』卷六、軍官襲替に、これらに關する規定が見える。

七八〇 諸て、擅に已に奏する官員の選目・姓名を改むる者は、赦に會うと雖も、除名して元籍に發す。

(1) 除名とは、最初の任官・受爵以來全ての官職・爵位を剝奪し

て庶人とすること。六四條注(4) 参照。

【解説】 本條に關しては不明な部分が多い。「已奏官員選目姓名」とは、どのような場合に「奏」される「選目」と「姓名」なのか、本條のみからは推定し難く、また「選目」に關しても未詳である。あるいは、官員の遷轉の際に、本人が蒙古・色目・漢人・南人のいずれであるかを、姓名と併せて吏部へ報告することかも知れない。

七八一 諸て、曹吏<sup>(1)</sup>、輒に公牘において、年月を改易して、罪責を遁れんことを圖る者は、答五十七、役を罷めて別敘し、過を記す。

(1) 首領官である經歷・知事が直接統轄する六案の胥吏を言う。

四八條注(2) 参照。

【解説】 胥吏が公文書の年・月を改竄して、自らの罪責を避けようとするとは、赦文の發下と關係するのであろうか。未詳。

七八二 諸て、誹強の人<sup>(1)</sup>、輒りに人のために籍<sup>(2)</sup>面を偽増する者は、杖八十七、紅泥粉壁して過をその門に識す<sup>(3)</sup>。

(1) 誹徒、訟師のような裁判を喰い物としている連中。あるいは勢力家、富強の家を指しているのか。

(2) 戸籍の文面を言う。

(3) 犯人の家の門に白壁を設置し、赤い泥で本人の姓名と罪名を記すこと。四〇二條注(1) 参照。

七八三 諸て、蒙古譯史、能く詐偽の文字を辨出すること二起<sup>(1)</sup>以上の者は、一資を減じて陞轉す<sup>(2)</sup>。

(1) 犯罪の件數を「起」と言い、二起以上とは、二件以上の意。

(2) 官員・胥吏が次の位階やポストに遷轉するには、一定の勤務期間とそれに伴う考課が必要であった。「減一資」は、『元典章』では「減一資歷」とも記され、遷轉の優遇措置として「資(歷)」が一つ免除されることを意味し、逆に、懲罰措置の場合は「添一資(歷)」で表され、「資(歷)」が一つ追加されることを意味する。資は、遷轉において必要な資格・經歷を指すのであろう。一五七條注(1) 参照。

## 訴訟

七八四 諸て、人の罪を告する者は、須らく年月を明注し、實事を指陳すべくして、疑と稱するを得ず。誣告する者は、罪を反坐に抵す<sup>(1)</sup>。越訴する者は、答五十七。本屬の官司の、過ある、及び冤抑ある、屢々告するも理めざる、或いは理斷偏屈なる、並びに應<sup>(2)</sup>合に迴避すべき者は、上司に赴きてこれを陳ぶるを許す。

(1) 『元典章』卷五三、告事、告罪不得稱疑が同内容である。

(2) 誣告とは、人を罪におとしめようとして、ありもしない罪で告訴すること(『譯注中國歷代刑法志』四九頁注⑤)。人を誣



告した當人には、誣告した罪の輕重に應じて、同じ罪名の刑が科せられ、これを反坐と言う（同書一三九頁注⑥）。

(3) 訴訟を起す場合や、判決に不服で上級官司に訴えを持ち込む場合には、程序が定められており、下級行政官司から順次上級の官司へ至ることになっていた。この順序を無視し、飛び越えて官司に訴え出ることを越訴と言う。

(4) 「本屬官司」以下は、「有過」、「有冤抑」、「屢告不理」、「理斷偏屈」、「應合迴避」の、五つのカテゴリーに分けられると考えた。

「本屬官司」とは、訴えを起した當人が所屬する路、府、州、縣を指す。「有過」とは、『明律國字解』に「有過とは、前方に杖罪に逢たることなり」「有過官吏と云は、文武の官人の私罪の杖一百以上を犯たる、……」とあることあることよりすれば、本屬官司の官員で以前に杖罪——あるいは杖一百七——以上に斷ぜられた者がいる場合であろう。「有冤抑」とは、本屬官司の裁きにより、無實の罪を受けること——『明律國字解』に「冤とは罪なきに罪を受たるなり、抑とは官人に抑られて罪なきこと明らかならぬなり」とある——。「屢告不理」とは、本屬官司が何度告訴しても受理しないこと。「理斷偏屈」とは、理斷不當即ち裁判の判決が不當で誤ったものであることであろう。

「應合迴避」とは、原告・被告の中に、本屬官司の官員の有服の親類や姻族の者、あるいは互いに怨恨がある者が居り、裁判

に携わることを避けるべき場合をいう——。『明律』卷二二・刑律・聽訟迴避（三五八）參照——。一七二條參照。

【解説】 以下、犯罪の告訴の手續きや資格に關する規定が續く。本條は、『唐律』『明律』では複数の條に分かれているものが、一つにまとめられている。『唐律』卷二三・鬪訟四一・誣告反坐、同じく五四・告人罪須明注年月、同じく五八・越訴、『明律』卷二二・刑律・越訴（三五五）、同じく告狀不受理（三五七）、同じく聽訟迴避（三五八）、同じく誣告（三五九）が關連條文である。

七八五 諸て、訴訟、本争の事の外に、別に餘事を生ずる者は、禁ず。その本争の事畢りて別訴する者は、聽す。

(1) 『元典章』卷五三、告事、狀外不生餘事が同内容である。

(2) 本争事とは、原告が訴えた本來の案件の意。『明律國字解』に「本宗とは、もとの一まきと云ことなり」とある「本宗」と同じ意味と考えられる。

【解説】 ある事件で告訴が行なわれて裁判が始まった場合には、その事件の判決が下りるまでは、別の案件を訴え出ることが出来ないという規定。

七八六 諸て、軍・民・風憲官、罪あらば、各々その屬する所の上司従りこれを訴う。

【解説】 軍官・管民官及び監察官が罪を犯した場合は、各官の上司の官員が告訴を行う、という規定。『元典章』卷三九、刑名、不得擅決品官がやや關連する。『明律』卷一・名例律、職官有犯(五)、同じく軍官有犯(六)が關係條文である。

七八七 諸て、民間の雜犯<sup>(1)</sup>、有司<sup>(2)</sup>に赴きて陳首<sup>(3)</sup>する者は、聽す。

(1) 『元典章』卷三九、刑名、蒙古人員相犯重刑有司約會に、「蒙古軍人、自行相犯婚姻・良賤・債負・鬪毆詞訟・和奸雜犯」と見え、同じく卷四〇、獄具、有罪過人依體例問に「除重罪過的、依著已了的聖旨、立著札子、訊問也者。其餘雜犯……」と見え、同じく繫獄に「今後、除姦・盜・詐僞杖罪以上罪狀明白、依例監禁、其餘相爭田土・婚姻・家產・債負・毆詈自答以下雜犯罪名」と見えることから、雜犯とは答刑以下の罪に該當する、戸婚田土の案を中心にした比較的輕微な犯罪を指すと考えられる。所謂「雜犯死罪」の「雜犯」や、『明律』卷二九・刑律・雜犯の「雜犯」とは明らかに異なるカテゴリーである。一二九條に見える「雜犯」も本條と同じであるならば、同條注(4)は訂正の必要がある。

(2) 有司とは、親民官、牧民官、管民官の官司である路・府・州・縣を言う。

(3) 陳首とは、出首即ち自主すること。

【解説】 『唐律』卷二四・鬪訟五二・犯罪皆經所在官司首、『明律』卷一・名例律・犯罪自主(二四)が關連條文である。

七八八 諸て、告言、重事實にして、輕事虛なれば、坐するを免す。輕事實にして、重事虛なれば、反坐す。

(1) 『元典章』卷五三、告事、諸人言告虛實例が同内容である。

【解説】 告訴の内容に眞實の部分と虚構の部分とが併存している場合、犯罪の量刑上重い罪に當る部分が眞實であり、輕い罪の部分が嘘であるなら、告訴人は罪に問われず、逆であれば、告訴人は誣告反坐到處せられる、という規定。本條は、『唐律』卷二三・鬪訟四一・誣告反坐をそのまま簡略化した内容となっている。『明律』卷二二・刑律・誣告(三五九)も、本條よりは相當詳細な内容となっている。

七八九 諸て、中外の有司、人の家録・私書を發して、輒に獄訟を興する者は、これを禁<sup>(1)</sup>す。若し本宗の事<sup>(2)</sup>、須らく引用・證驗すべき者は、仍お追照するを聽<sup>(3)</sup>す。その構飾・傳會<sup>(4)</sup>して、以て人を罪に文致<sup>(5)</sup>する者は、これを審辨<sup>(6)</sup>す。本宗を除くの外、餘事は、並びに聽理<sup>(7)</sup>する勿れ。

(1) 家録とは、ある家の私事を記した記録の類、家譜・家乘等を指すのではなからうか——あるいは入官・遷轉の際に提出する

履歷書としての家狀の類を言うのかも知れない——。私書は、個人の私信、手紙を指す。いずれも極めて私的な性格の書類を意味しており、そのようなものに記されている内容を路府州縣——「中外」とは、京畿地區とそれ以外の意——の官司が發き立て、それで訴訟を引き與すことは許されない、との意。

(2) 「本宗事」とは「本宗公事」の意で、當該の案件、その事案を指す。

(3) ある案件（本宗事）に關して、家録や私書を證據資料として提出する必要がある場合は、家録・私書を官司が差し押え取り上げて、證據書類として扱うことが認められる事實。

(4) 事實に尾ヒレをつけ、言いがかりをつけてこじつけること。

(5) 「文致人罪」とは、法律を無理矢理當てはめて人を罪に陥し入れること。

(6) 虚實を詳細に審査辨別すること。

(7) 訴訟を受理し、裁判を始めることを、聽理と言う。

【解説】 個人的な性格の強い書類を證據に訴訟を惹起することを禁止し、現在審理中の裁判に特に關係する場合においてのみ、そのような書類を證據として取り上げることが許される、というのが本條の大筋。

七九〇 諸て、人を教令して總麻以上の親を告せしむ、及び奴婢を

して主を告せしむる者は、各々告する者の罪より一等を減ず。若し人を教令して子孫を告すれば、各々告する所の罪より二等を減ず。その人を教令して告せしむるに、事虚なれば、應に反坐すべし。或いは實を得て應に賞すべき者は、皆告する者を以て首と爲し、教令するものは從と爲す。

【解説】 本條は、『唐律』卷二四・鬪訟五六・教令人告事虚をそのまま下敷にしている。ただし、本條では、人に命令・指圖してその人の尊長・卑幼の親族を告訴している場合というのが、全體を貫く文脈であるが、『唐律』では、先ず「教令人告」についての一般規定があり、次に親族を告訴せしめた場合の規定がきており、兩者は區別して論じられている。

七九一 諸て、老・廢篤疾、事須らく爭訴すべくんば、止だ同居の親屬の本末を深知する者をして、これに代らしむ。若し謀反・大逆、子孫不孝、同居の侵侮する所と爲り、必ず須らく自陳すべき者ならば、聽す。

(1) 『元典章』卷五三、代訴、老疾合令代訴が同内容である。

(2) 『元典章』には、「年老・篤廢殘疾人等」とある。年老は、年令七十以上の者を言う（三一一條參照）。篤廢殘疾は、殘疾・廢疾・篤疾の三つの段階とカテゴリーを合わせて言ったもの。『明律國字解』に「篤疾は、狂癲・癰・兩目盲・二肢折・兩手無二

大指一のるいなり。殘疾は、一目瞎・暗啞・兩耳聾・手無二指・足無二大指・項瘤のるいなり。廢疾は、折二一手或一足一・腰脊折・侏儒・聾啞・痴呆のるいなり」とある。『吏學指南』『老幼疾病』の條、『譯註續中國歷代刑法志』六〇頁注⑤・一四六頁注⑬參照。

(3) 同居とは、家族成員の生産・消費全般が單一共同の家計の下にあること、即ち同居共財を指し、必ずしも同じ家屋に居住していることを意味しない(滋賀秀三『中國家族法の原理』六九・七四頁)。「同居親屬」とは、同居共財の親屬の意である。

(4) 『元典章』では、「令同居親屬通知所告事理的實之人代訴」と記す。

(5) 「老・廢篤疾」の者が、同居の人により侮られ、侮蔑的な行爲を受けること。老々尊長に對して卑幼子孫がこうした行爲をはたらいた場合は、十惡の不孝に該當することからすれば、この一文は、特に「廢篤疾」の者を念頭に置いたものと考えられる。

七九二 諸て、致仕して代を得るの官、已むを得ず齊民と訟すれば、その親屬・家人の代訴するを許す。所司は、これを侵撓する母れ。

(1) 『元典章』卷五三、代訴、閑居官與百姓爭訟子姪代訴が同内容である。

(2) 『元典章』では、「得替閑居官員」「致仕得代官員」とある。

退官し、後任官を當官司で待っている官員を言う。『明律國字解』に「得代とは、官職かはりて、あと役を待うけて、いまだかりたるさきの官府へゆかぬ内なり」とある。あるいは「致仕得代官」とは、致仕官と得代官の二つを言うのかも知れない。

(3) 『元典章』には「凡有追會公事、依例行移。事關侵欺・取受・私罪、自有應問官司。其爭訟婚姻田債等事、合令子孫弟姪或家人陳訴」とあり、親屬(子孫弟姪)や家人(家丁、使用人)が戸婚田土の案については、當の官員に代わって、陳訴することが許されていた。

(4) 『元典章』には「閑居官員、若恃賴曾任職官、其有違犯條格取受・侵欺・私罪、合從有司勾問。其餘干涉指例行移、本處見任官、却不得因而欺遏撓擾不安」とある。當官司の見任の官員が、本案件に介入して混亂させてはならない、との意であろう。【解説】本條は、『明律』卷二二・刑律・官吏詞訟家人訴(三六五)に受け繼がれている。

七九三 諸て、婦人、輒に男子に代りて告辨・爭訟する者は、これを禁ず。若果し寡居なる、及び子男ありと雖も、他故の妨ぐ所と爲り、事の須らく爭訟すべき者は、禁例に在らず。

(1) 『元典章』卷五三、代訴、不許婦人訴が同内容である。

(2) 裁判の當事者として、告發したり、申し開きを行つて争うこと。  
(3) 別の事情、別の理由。

七九四 諸て、子その父を證し、奴その主を許する、及び妻妾・弟姪相い容隠せずして、凡そ名を干し義を犯し、風化の玷と爲る者は、並びにこれを禁止す。

(1) 『元典章』卷五三、禁例、禁止干名犯義が同内容である。

(2) (3) 證も許もここではないずれも「告(うったえる)」の意。

(4) 『明律國字解』に「名は、名分なり。名分とは、君臣・父子・兄弟・夫婦のい。君と名づけ、父と名づけ、夫と名づけたる名に付て、上下尊卑のもちぶんあり。是を名分と云。この名分に付て、これはうやまふべき、これはあわれむべきと云ことあり。是を義と云。干も犯も、皆おかすとよみて、やぶることなり。この名分をやぶり義をやぶる類を、干名犯義と云なり」とある。

【解説】 家族・親族關係の上で尊長・目上に當る人物を、卑幼・目下の者が告訴することは、一部の重大犯罪を除けば、事の虚・實に拘わらず重い罪とされるのが、中國の律に特徴的な原則の一つであった。『唐律』卷二三・鬪訟四四・告祖父母父母、同じく卷四八・部曲奴婢告主、『明律』卷二二・刑律・干名犯義(三六〇)に詳細

に規定が見える。

七九五 諸て、親屬の相い告するは、並びに自首に同じ。

(1) 『元典章』卷五三、首告、壻告丈人造私酒が、本條と關係するであろう。

【解説】 『元典章』では、養老女壻がその義理の父の犯罪を訴えており、「理同父子恩義」「比同自首免罪」との刑部の判斷が示されている。『唐律』卷五・名例三七・犯罪未發自首、『明律』卷一・名例律・犯罪自首(二四)の中の規定の一つを取り出したのが本條である。

七九六 諸て、妻、夫の惡を許するは、自首に比同して原免す。

凡そ夫に罪あるも、惡逆重事にあらざるは、妻相い容隠するを得るに、輒にその夫を告許する者は、答四十七。

(1) 『元典章』卷五三、禁例、禁止干名犯義にやや關係する部分がある。

(2) (3) 『元典章』に「如主家有犯叛・謀逆・故殺人之事、許令首告」とあるのを參考にすれば、『唐律』で言う十惡中の謀反・謀大逆・謀叛や故殺等の重大犯罪を指すのであろう。

【解説】 一部の重大犯罪については、自分の夫がそれを犯していると妻が訴えても、妻は罪に問われない、というのが本條の主旨。『明

律』卷一・名例律・親屬相爲容隱(三一)では、「若犯謀叛以上者、不用此律」とある。

七九七 諸て、妻、曾て夫に背きて逃れ、斷ぜられて復たその夫を誣告するに重罪を以てする者は、反坐到抵罪し、その夫従り嫁賣す。

【解説】 舊中國では、「義絶」の場合を除き、妻の一方的な意思による離婚というものはありえなかった。それにもかかわらず、妻が勝手に夫のもとを去った場合は、罪に斷ぜられる規定であった(滋賀前掲書四七六～四七七頁、四九八頁注(88))。本條は、そのような妻が、さらにその上自分の夫を重罪に誣告したなら、反坐とし、夫が他の男へ妻を嫁として賣却することを許すというものである。やはり、本條制定のきっかけとなった個別の案件が想定される。

七九八 諸て、職官、同僚の相い言する者は、並びに職を解きて別敘し、過を記す。

(1) 『元典章』卷四四、品官相毆、毆傷同僚官が關係する内容を含む。

【解説】 同じ官司の官員が、互いに告言を行った場合、兩者ともに現職を解任し、別職に任じ、解由には罪過を記入する、という規定。

七九九 諸て、人の罪を告する者は、下よりして上し、越訴するを得ず。

(1) 『元典章』卷五三、越訴、告論官吏不得越訴、同じく越訴的人要罪過に同内容の文がある。

【解説】 本條は越訴についての一般規定であり、『唐律』卷二四・鬪訟五八・越訴、『明律』卷二二・刑律・越訴(三五五)と全く同趣旨である。

八〇〇 諸て、府・州・司縣、應に受理すべくして受理せざる、受理すると雖も、聽斷偏屈なる、或は遷延して決せざる者は、輕重に隨いてこれを罪罰す。

(1) 受理とは、「受而爲理」の意であり——『明律國字解』は「受而爲理とは、とり上げて訴人されたる人をせんぎすることなり」とする——犯罪を告發する訴狀を受けつけ、取調べを始めること。

【解説】 訴狀を受理すべき官司が受理しなかったり、裁きが偏っていて誤っている場合や、ことさらに裁判を引き延ばして決着をつけない場合、當該官司の官員は、訴えられている犯罪の輕重により差をつけて處罰する、という規定。『唐律』では卷二四・鬪訟五八・越訴の條に入れているが、『明律』では卷二二・刑律・告狀不受理(三五七)が本條に對應する。

八〇一 諸て、官吏賂を受けて不法なると訴え、徑ちに憲司<sup>(2)</sup>に赴く者は、越訴を以て論ぜず。

(1) 『元典章』卷五三、越訴、告論官吏不得越訴が同内容である。

(2) 肅政廉訪司を言う。

八〇二 諸て、陳訴して理あるに、路府州縣行わざれば、これを省部・臺院<sup>(3)</sup>に訴う。省部・臺院行わざれば、乘輿を経てこれを訴う<sup>(1)</sup>。いまだ省部・臺院に訴えずして、輒に乘輿を経て訴うる者は、これを罪す。

(1) 告訴すべき當然の理由があること。

(2) 不行とは、官司が訴状を受理しないこと。

(3) 省部は、中書都省及び六部を指し、臺院は御史臺及び樞密院を言う。

(4) 乘輿とは天子、皇帝を言う。『唐律』では「遼車駕」、「明律」では「迎車駕」と書く。天子の行幸を待ちうけて直訴すること、を、本條では「經乘輿訴之」と表現している。

【解説】『唐律』卷二四・鬪訟五七・遼車駕搥鼓訴事不實、『明律』卷二二・刑律・越訴(三五五)が關連條文である。

八〇三 諸て、職官、人を枉法贓に誣告する者は、その罪を以てこれを罪し、除名して敘せず。

(1) 『明律國字解』に「枉法贓と云は、注に謂受有事人財、而曲法科斷者と云へり。有事人とは、とが人のことなり。とが人より財物を受けて、さばきに依怙ひいきをしたるを云なり」とある。裁判擔當の官員が、裁判當事者から財貨をもらい請託を受け、判決を請託内容に沿ったものにゆがめること。

【解説】官員が、他の官員を枉法贓であると誣告した場合、誣告を行った官員は反坐とした上で、除名處分とし、今後一切官職にはつけない、という規定。

八〇四 諸て、奴婢、その主を(誣)<sup>(2)</sup>告する者は、死に處す。本主免を求むる者は、一等を減ずるを聽す。

(1) 『元典章』卷五三、誣告、奴誣告主斷例が同内容である。

(2) 原文は「告」一字であるが、『元典章』により「誣」を補うべきである。中華書局本『元史』卷一〇五、二六九一頁の校勘

記(二) 参照。

【解説】奴婢が自分の主人を誣告した場合は、奴婢は死刑。ただし、主人が奴婢の減刑を願ひ出た時は、死刑から一等を減ぜられるという規定。『元典章』では、本主が減刑を願ひ出た時、奴婢は杖一百七であり、本條とは量刑を異にする。『唐律』卷二四・鬪訟四八・部曲奴婢告主、『明律』卷二二・刑律・干名犯義(三六〇)が關連條文である。

八〇五 諸て、奴を以て、主の私事<sup>(2)</sup>を告すれば、主は自首に同じくし、奴は杖七十七。

(1) 『元典章』卷五三、首告、駭口首本使私鹽が同内容である。

(2) 『元典章』では、駭口が自分の主人(本使)を私鹽の罪で訴えている。また、『元典章』卷五三、禁例、禁止干名犯義には「如主家有犯反叛・謀逆・故殺人之事、許令首告。其餘雜、不許陳告」とある。ここで言う「私事を告す」とは、十惡の一部や故殺等の重大犯罪以外の「干名犯義」に當る告發を指しているであろう。

(長井千秋)

## 鬪 毆

【解説】唐律の鬪訟律にあたる條文がここに集められている。ただし律疏に、議曰、鬪訟律者、首論鬪毆之科、次言告訟之事。と言うとおりではなく、鬪毆に關係する部分のみ掲げているのは、唐律のそれが明律では鬪毆・罵詈・訴訟の各篇に分岐していく流れを物語るものといえよう。

八〇六 ①諸て、鬪毆<sup>(1)</sup>、手足を以て人を撃ち傷つけし者は、笞二十七。他物を以てせし者は、三十七<sup>(2)</sup>。傷つけ、及び髪を抜くこと方

寸以上は、四十七。若し血、耳目より出で、及び内損して血を吐く者は、一等を加う。②齒を折り、耳鼻を毀缺し、一目を眇<sup>(3)</sup>し、及び手足の指を折り、若しくは骨を破り、及び湯火もて人を傷つけし者は、杖六十七。二齒二指以上を折り、及び髪を髡<sup>(4)</sup>す、③並びに刃もて傷つけ、人の肋を折り、人の兩目を眇し、人の胎を墮せしむれば、七十七。④穢物を以て人の頭面を汚す者の罪も亦たかくの如し<sup>(5)</sup>。⑤人の肢體を折跌し、及びその目を瞎<sup>(6)</sup>にせし者は、九十七。辜内に平復せし者は、各おの二等を減す。⑥即し二事以上を損ない、及び舊患に因りて、篤疾に至らしめ、若しくは舌を斷ち、及び人の陰陽を毀敗せし者は、一百七。

(1) 『元典章』卷四四、刑部六、舊例鬪毆罪名。そして刀刃傷人、他物傷人、折跌肢體の各項も關連文書である。

(2) 唐律の鬪訟一の原注に、見血爲傷。非手足者、其餘皆爲他物、即兵不用刃亦是。とあるように、傷とは、外出血を必要條件とし、手足以外の「もの」で毆れば、すべて他物とされる。兵刃つまり武器を本來の機能で用いない場合もこの範疇に入る。

(3) 眇とは、視力を著しく損なうことで、完全に失明する意の瞎とは區別される。『元典章』も唐律に倣い、眇、爲虧損其明、尤能見物。と注記する。

(4) 前掲『元典章』には、禿髮鬢とのみ見えて、折二齒二指以上の一節はない。しかし鬪訟律の第二條によれば、いずれも徒一



年半にあたり、元の折杖法では杖六十七下となる。この點は『典章』も同じで、刑法志のこの部分は訂正を要する。

(5) ④の部分は、唐律にはなく、注(1)の舊例を初見とする。

要するに、金の泰和律から付け加えられた一節で、明律もこれを引き継いでいる。

(6) 折肢とは、四肢の骨を折る意で、跌體は、關節をはずすこと。唐律の鬪訟四では、⑤の量刑は徒三年であり、元の折杖法に照らすと、八十七下となる。このことは『元典章』や、陳元靚『事林廣記』別集卷三所引『大元通制』諸條格の毆冒でも同様であつて、九十七は八十七と改めるのがやはり適切であらう。

(7) 辜内つまり保辜の日數内に毆傷が治癒すれば、鬪毆より罪二等を減刑される。保辜については、八〇八條を參看。

(8) 損二事以上は、唐律の鬪訟四の疏義に、謂毆人一目瞎及折一支之類。と解のあるとおり、二箇所以上に傷害を負わせること。

(9) 唐律では、心身障害は殘疾(輕度)・廢疾(中度)・篤疾(重度)の三段階に分けられる。篤疾とは、惡疾(癩病)・癩狂(癩癩)・兩肢廢(手足のうち二支が用をなさぬ者)・兩目盲などをいうが(『譯註』五、一八〇頁)、『元典章』のなかでは、廢疾との間に必ずしも嚴密な使い分けはされていない。舊患云々については、『明律國字解』に「舊患とはふるき病なり、ふるき病ある上を打ちて篤疾になりたるなり」とあるのが簡にして

要を得ている。

(10) 陰は女性の陰門、陽は男性の陽物。鬪訟四の律疏にある、毆敗陰陽、謂孕嗣廢絕者。の要件を満たすか否かによって、處罰は大きく異なる。

【解説】 毆傷に對する處罰を加害の手段や被害の程度によって細かに定めたもので、唐律の鬪訟一から鬪訟四と同じ構成を取る。刑罰も元の折杖法で讀み替えこそすれ、唐律の規定と逐一照應する。明律三二五條の鬪毆では、これらは一つの條文にまとめられており、本條はいわばその祖型となっている。

八〇七 諸て、毆冒を訴うるに、闌告<sup>(1)</sup>する者あらば、聽<sup>き</sup>すなかれ。違<sup>ひ</sup>う者は、これを究めよ。<sup>(2)</sup>

(1) 闌告は、訴訟を取り下げること。擯告とも表記される。

(2) 『元典章』卷四四、刑部六、毆冒不准擯告。

【解説】 毆冒をいちど訴え出た以上、當事者間で勝手に休和つまり和解してはならないという趣旨である。

八〇八 諸て、①保辜なる者は、手足もて人を毆傷すれば、十日を限る。他物を以て人を毆傷せし者は、二十日。刃及び湯火を以て人を傷つくる者は、三十日。肢體を折跌し、及び骨を破る者は、五十日。②毆と傷と相い須<sup>たす</sup>らず、餘條の毆傷、及び殺傷せし者は、

此れに準ず。<sup>(2)</sup> ③限内に死する者は、各おの人を殺すに依りて論ず。その限外に在る、及び限内に在るといへども、他故を以て死する者は、各おの本毆傷法に依れ。<sup>(3)</sup> ④他故とは、別に餘患を増えて死する者を謂う。<sup>(4)</sup>

(1) 毆殺傷の種別によって、保辜つまり罪名を決定するのに必要な猶豫期間を規定しており、その内容は唐律の鬪訟六を踏襲している。『元典章』では卷四四冒頭の表に一部掲げられており、明律三二六條、鬪毆の保辜限期にもほぼ受け継がれる。

(2) ②は律文では注記にあたる部分。鬪訟六の律疏によれば、毆傷不相須とは、いわゆる毆傷ではなく、争鬪中に誤って第三者を殺傷した場合(鬪訟三五)や、人を畏怖・逼迫させる言動で追詰めた結果、被害者を死傷させた場合(賊盜一四)を想定した文言。

(3) 保辜の限内には、刑罰の判定が留保される。もしもこの期間中に被害者が死亡すれば、鬪毆殺人を適用するが、他の疾患が原因と認定されれば、あくまで毆傷の範囲で處断された。

(4) この④の箇所も鬪訟律の第六條に従い、注に改めるべきである。

八〇九 諸て、倡女、良人を鬪傷し、辜限の外に死する者は、杖七十七、<sup>(1)</sup> 單衣もて刑を受けしむ。<sup>(2)</sup>

(1) 『元典章』卷四二、刑部四、因鬪咬傷致死に實例がある。元代に限らず、この種の事件はごく日常的にありえたであろう。毆傷の主體こそ違うものの、八一〇條と全く同じ組立を取ることから分かるように、倡女が賤民身分であることは、ここでは度外に置かれている。

(2) 五三五條にも觸れたように、婦人の場合、單衣をまわす、男性と同じく臀部に直接笞杖を執行されるのは、ふつう姦罪に限られた。このことは明令九一條や明律の名例律一九條にも明文規定をもつ。

八一〇 諸て、人を毆傷し、辜限の外に死する者は、杖七十七。<sup>(1)</sup>

(1) 律の規定では、鬪毆殺傷の場合、保辜の期間を経なければ、罪名は確定しない代わり、以後はたとえ毆傷がもとで死亡しよう、鬪毆殺人には問われない。しかし前條と同様、限外に死ねば、一律に杖七十七と定める本條は、唐・明律はもちろん、八〇八條とも食い違う。途中で法改正をした可能性も含め、若干の條件を補って考える必要があろう。

八一 諸て、非理を以て妻妾を毆傷せし者は、罪、本毆傷を以て論じ、並びにこれを離す。<sup>(1)</sup> 若し妻が父母の悦ぶところと爲らず、以て非理に毆傷を致せし者は、罪、三等を減じ、仍おこれを離す。<sup>(2)</sup>

(1) 明律三三八條の妻妾毆夫では、夫が承知しなければ、離婚はできないことになっており、夫が妻に傷害を加えたことを以て、即ちに離婚を強制されるこの條文とは相當の懸隔がある。

(2) 唐律の鬪訟二四や明律の前掲條文では、妻と妾の違い、また被害の程度によって處分を異にするが、ここでは嚴密に妾身分を含むかどうかは疑わしい。

【解説】 夫の妻に對する毆傷を、本人自身の意志にもとづくものと兩親の意を體したものの二段階に分けて規定する。ここに見る限りでは、前後の時代に比べ、妻妾の地位は相對的に高く設定されている。離婚一般については、滋賀秀三『中國家族法の原理』創文社、一九六七、四七六、四八三頁、に詳しい。

八一二 諸て、職官、妻を毆り、胎を墮せしめたる者は、<sup>(1)</sup> 答三十七、職を解き、期年の後に先品より一等を降して、邊遠に注すること一任。妻はこれを離す。

(1) 唐律・鬪訟三の注の、墮胎者、謂辜内子死、乃坐。若辜外死者、従本毆傷論。にもとづく。墮胎の罪は律では徒二年、元の折杖法では八〇六條にあるとおり、七十七下に換算されるから、本條の罰則たる三十七下とは、官員に對する優遇といえる。

八二三 諸て、非理を以ていまだ成婚せざる男婦を苦虐せし者は、

答四十七。婦は宗に歸し、聘財を追せず。<sup>(1)</sup>

(1) 『明律國字解』に「未成婚とは、いまだ婚禮はせぬ前なり」とあるとおり、まだ定婚の段階にあること。

【解説】 ここは息子の許婚者、ついで次條では既婚者に對する不當な侵害行爲を扱う。なお法文の構成から言えば、處罰はもとより、嫁側が聘財を取り戻せないことにおいても雙方全く變わらない。

八一四 諸て、舅姑、非理に罪なき男婦を陵虐せし者は、<sup>(1)</sup> 答四十七。男婦は宗に歸し、聘財を追せず。

(1) 明律三四二條の毆祖父母父母では、非理の毆殺傷は、若違犯教令、而依法決罰、邂逅致死、及過失殺者、各勿論。と對極に置かれる。陵虐や苦虐という語の裏には、子孫やその妻妾に對する體罰にも許容の範圍があつて、これを越えることが問題にされていると分かる。

(2) 唐律の鬪訟二九に連なる條文で、直接には明律の三四二條の、若非理毆子孫之婦及乞養異姓子孫、致令廢疾者、杖八十、篤疾者、加一等、竝令歸宗、子孫之婦、追還嫁裝、仍給養贍銀一十兩、乞養子孫撥付合得財產養贍。と近い關係にある。

八一五 諸て、蒙古人、漢人と爭い、漢人を毆るも、漢人は還報するなかれ。<sup>(1)</sup> 有司に訴えるを許す。<sup>(2)</sup>

(1) 還とは、やりかえす、しかえす。つまり還報は同義の語を重ねた表現で、報復する、の意となる。『研究譯註』に、報を還す、と訓ずるのは不適切。

(2) 『元典章』卷四四、刑部六、蒙古人打漢人不得還。そして『通制條格』卷二八、蒙古人毆漢人、及び蒙古人粥飯と關わる。ちなみに同書卷二七には、これとは別に漢人毆蒙古人なる一項を立てていて参考になる。

【解説】 注(2)の斷例によれば、この規定の背景には、怯薛のモンゴル人と漢人との紛争が跡を絶たず、國家は對應に苦慮していたことが看取される。

八一六 諸て、蒙古人、他人の奴を斫傷<sup>(1)</sup>し、罪を知りて休和を願ひし者は、聽<sup>(2)</sup>す。

(1) 斫傷(切りつけ傷つける)の語から判斷して、他物または兵器による傷害を前提に書かれていると思われる。

(2) この條が法源とする唐律・鬪訟一九の、其良人毆傷殺他人部曲者、減凡人一等、奴婢又減一等。は、明律三三六條の良賤相毆では、其良人毆傷他人奴婢者、減凡人一等。となる。このばあい適用對象は限定つきながら、モンゴル人の特典として、八〇七條で禁じる休和鬪告、つまり當事者間での和解を認めるというのがその趣旨。

【解説】 上記二條は鬪毆におけるモンゴル人の身分的特權を扱う。

八一七 諸て、他物を以て人を傷つけ、廢疾<sup>(1)</sup>と成るを致せし者は、杖七十七<sup>(2)</sup>。仍お中統鈔二十錠を徴して、傷つけられし人に付し、養濟の資に充<sup>(3)</sup>つ。

(1) 廢疾について、『唐令拾遺』戸令第九は、癡癲・侏儒・腰脊折・一肢廢などを擧げる(二二八―二二九頁)。

(2) 明律の三二六條、保辜限期にも、辜内雖平復而成殘廢篤疾、及辜限滿日不平復者、各依律全科。と斷ることからみて、ここで一律に七十七下と定めるのは些か解しかねる。恐らく何らかの前提條件を省略しているためであろう。明律の人命に收める屏去人服食(三一四)の、凡以他物置人耳鼻及孔竅中、若故屏去人服用飲食之物、而傷人者、杖八十。致成殘廢疾者、杖一百徒三年。に繋がる法規と判斷される。

(3) 養濟は、養贍と同義。この種の賠償規定は唐律にはなく、元制を嚆矢とする。明律三二五條の鬪毆になると、八〇六條の⑥と同じ性質の罪名に觸れたのち、仍將犯人財産一半、斷付被傷篤疾之人養贍。とつけ加えている。

八一八 諸て、鬪毆に因り、人を斫傷して、廢疾と成らしむる者は、杖八十七。中統鈔二十錠を徴して、傷つけられし者に付し、養濟

の資に充<sup>1</sup>つ。父が還毆を爲して、傷つくるを致せし者は、その鈔の半ばを徴<sup>2</sup>す。

(1) この場合の鬪毆とは、兵刃によるものと考えられる。八一七條と同じ方向にありながら、罪一等しか違わぬことは、これを傍證する。

(2) 唐律の鬪訟三四ならば、諸祖父母・父母爲人所毆擊、子孫卽毆擊之、非折傷者、勿論。折傷者、減凡鬪折傷三等。となり、明律三四六條の父祖被毆でも同様ながら、ここでは養濟として支拂われる中統鈔の減額にしか觸れていない。還毆は、八一五條の還報と同巧で、毆を還す、ではなく、やりかえした結果として毆ること。復讐については、殺傷の八六〇條も參看。

八一九 諸て、豪橫、輒<sup>みだり</sup>に平人を誣して盜と爲し、その夫婦男女を捕らえて、私家にて拷訊監禁し、非理に陵虐せし者は、杖一百七、遠きに流<sup>1</sup>す。その害を被むり殘廢を致す者あらば、人ごとに中統鈔二十錠を徴し、養贍の資に充<sup>2</sup>つ。

(1) 『元典章』新集刑部、富豪打傷佃戸。なお富強殘害良善の條も關係する。

(2) 殘廢は、殘疾と廢疾の謂だが、ここでは篤疾をむしろ想定すべきで、養贍にあてる中統鈔を十錠と二十錠に分ける目安は、廢疾と篤疾の違いに照應していたと思われる。

【解説】唐律の鬪訟八の系譜を引く條文で、官憲に無斷で人身を拘束し、紛争の解決をはかる動きを禁じている點では、明律三三五條、威力制縛人の、凡爭論事理、聽經官陳告。若以威力制縛人、及於私家拷打監禁者、竝杖八十。傷重至内損吐血以上、各加凡鬪傷二等。因而致死者、絞。にはつきり傾斜している。豪橫つまり豪民の私設牢獄は、南宋の頃から隨所で弊害を指摘されはじめ、元明時代にはさらに顯著な社會問題となる。なお養贍について規定する後段部分は、上記の内容には特定されない一般條項である。

八二〇 諸て、職官、輒<sup>みだり</sup>に義男をば去勢し、以て鬪官の進納に充<sup>1</sup>つる者<sup>2</sup>は、杖一百七、除名して鉞せず、過<sup>よ</sup>を記す。義男は宗<sup>もと</sup>に歸<sup>かへ</sup>す。

(1) 義男は、異姓の養子で、承繼を目的としない恩養的な存在。後掲の『元典章』には、過房義子(過房義男)につくるが、『明律國字解』に「義男は、こぶんのものなり、養子には非ず」とあるのが參考になる。

(2) 官員・民間を問わず、養子を宦者にして使役したり、要路の人々への進納にあてることが、いわゆる自官者の増加と並行して、前代から盛んに現れる。このことは國家としても放置できず、歴代の王朝は規制に腐心した。明律の四〇三條、鬪割火者に定める、凡官民之家、不得乞養他人之子鬪割火者。違者、杖一百・流三千里。其子給親。も、本條と多くの部分で共通する

が、他面これが鬪訟ではなく、雜犯のなかに分類されている點は注意を要する。

(3) 『元典章』卷四一、刑部三、割去義男義腎に實例がある。

八二二 諸て、微故を以て義男の肢體を殘傷して廢疾にせしめし者は、凡人の肢體を折跌するに一等を加えて論じ、義男は宗に歸す。仍お中統鈔五百貫を徵し、養贍の貲に充つ。

(1) 八〇六條の⑤に定める八十七下に一等を加え、九十七下となる。

(2) 『元典章』卷四一、刑部三、割斷義男脚筋。『大元通制』の毆冒にも、割斷義男脚筋、決九十七下、追鈔二十錠、與養贍、令歸宗。とある。中統鈔の五百貫は十錠にあたる。

八二二 諸て、尊長、輒に微罪を以て弟姪の雙目を刺傷せし者は、常人と同罪にして、杖一百七。贍養の鈔二十錠を追徵して、苦主に給す。流を免じ、過を門に識す。罪なき者なれば、仍お流す。

(1) 『大元通制』諸條格の毆冒に、刺損親族雙目、追鈔二十錠、一目、追一十錠、給付充養贍、徙遼陽遙東。とあるのは、本條と關連しよう。

(2) 贍養の鈔二十錠とは、養贍の中統鈔二十錠のこと。兩目の損傷は篤疾と見なされる。

(3) 流遠を科すか否かは、身分の尊卑によるのではなく、あくまで咎めを相殺するに足る罪過の有無を規準に決められている。八二四條と八二五條も參看。

八二三 諸て、弟、その兄の仇を聴くといえども、同謀してその兄の眼を刺すれば、即ち弟を以て首と爲し、各おの杖一百七、遠きに流し、弟は遠きを加う。

(1) この部分は些か文意を取りにくい。兩眼を失明させられるのは、「兄」ではなく、「兄の仇」の誤りと考えれば、『元典章』新集刑部、戮刺雙睛斷例の實例とも辻褄があう。『大元通制』が、爲首打傷親兄、手成廢疾、剗去二目成廢疾、決一百七下。として、流遠のことに及ばないのはそのよい證左となろう。

(2) 加遠とは、遼陽への流刑を例にとれば、肇州より遠方の奴兒干へ移送することをさすものと思われる。

【解説】唐律の鬪訟七と明律三二五條の鬪毆と關わるもので、造意・隨從の共犯關係に觸れた一つの變則といえよう。

八二四 諸て、卑幼、仇を挾き、輒に尊長の雙目を刺傷し、廢疾と成さしむ者は、杖一百七、遠きに流す。

(1) 八二五條と同じ構成を取ることから分かるように、卑幼と尊長の關係はここでも殆ど考慮されていない。

(2) 『元典章』新集刑部の挖損兩眼成廢疾に載せる事件にもとづく。『大元通制』の毆冒には、兩眼を失明させた例ではないが、姪打折脚成廢疾、遇免遷徙種田。の一條を掲げる。

八二五 諸て、刃を以て人の兩目を刺破し、篤疾と成らしむる者は、杖一百七、遠きに流す。仍お中統鈔二十錠を徴し、養贍の實に充<sup>(1)</sup>つ。主使する者も亦たかくの如<sup>(2)</sup>し。

(1) 『元典章』卷四四、刑部六、馮崇等剌池傑眼睛において、中統鈔二錠と記すのは、二十錠の誤りと思われる。

(2) 『元典章』新集刑部、針擦人眼均徵養贍鈔にもとの斷例が見える。同書卷四四、刑部六、戳碎兩眼雙睛も關わる。主使とは、さしずする、下知する。

【解説】唐律の鬪訟四と刑法志の八〇六條を踏まえてできているこの條文では、篤疾という要件によって、犯罪者處罰のなかに新たに流遠を盛りこんだ形を取る。

八二六 諸て、瞼<sup>め</sup>みを挟<sup>はさ</sup>ぎ、人の目を傷つけし者は、若し一目元より損わるるに、又たその一目を傷つけば、兩目を傷つくと同じに論じ、赦に會うといえども、仍お流す。

【解説】唐律の鬪訟四や明律の鬪毆の、因舊患令至廢疾。を意識した内容である。ここで流刑が恩赦の對象とならないのは、挾瞼とい

う要素にもとづく。

八二七 諸て、争いに因りて誤りて人の一目を瞼<sup>め</sup>にせし者は、杖七十七。中統鈔五十兩を徴し、醫藥の實に充<sup>(1)</sup>つ。

(1) 八〇六條の⑤に定める八十七下より一等減じた處罰である。唐律の鬪訟三五が若干これと關係しよう。

(2) この種の規定は、明律三二五條の戲殺誤殺過失殺傷人に繼承されている。中統鈔では五十兩は一錠に相當する。

八二八 諸て、脫脫禾孫、輒<sup>みだり</sup>に往來の使臣を毆傷せし者は、笞四十七、職を解きて過<sup>(1)</sup>を記す。

(1) 脫脫禾孫は、二五四條に既出。驛傳を利用する使臣の違犯行為を檢察するという職掌柄、ここに斷るような紛争にしばしば發展したに相違ない。

【解説】以下、八四七條まではすべて、官員を當事者とする鬪毆事件を内容にもつ規定が続く。

八二九 諸て、職官、輒<sup>みだり</sup>に他物を以て使臣を毆傷せし者は、杖六十七。<sup>(2)</sup>

(1) 唐律の鬪訟一一の承譜を引く條文。本條と近い規定としては、明律の刑律、鬪毆、毆制使及本管長官(三二九)にある、凡奉

制命出使、而官吏毆之、杖一百徒三年。傷者、杖一百流二千里。折傷者、絞。があげられる。

(2) 八四五條によれば、一般の他物故毆に比べ、二等重い處罰。

八三〇 諸て、司の屬官、輒に本管上司の幕官を毆りし者は、答四十七、職を解きて過を記す。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』卷四四、刑部六、錄事殿經歷は、この具體例といえる。屬官に錄事司の錄事(正八品)、幕官には路の首領官たる經歷が各々擧がっている。ちなみに唐律は鬪訟一七、明律は三三二條の上司官與統屬官相毆が關係條文。

八三一 諸て、方鎮の僚屬、輒に他物を以て主帥を毆傷せし者は、杖六十七。<sup>(2)</sup>幕官の使酒して長官を罵りし者は、答四十七、職を解きて別に敘し、過を記す。

(1) 方鎮が具體的に元代のいかなる官職にあたるかは、いま明らかにできない。

(2) 八二九條と同じ組立である。恐らく唐律の鬪訟一二から明律三三〇條の佐職統屬殿長官に連なる法規を前提に構成されたものと想定される。

八三二 諸て、按部官、爭辯に因りて、輒に有司の官を毆り、有司

の官の還毆せし者は、各おの答三十七。職を解く。

(1) 按部官とは、按治官と同義とみられ、提刑按察司ないしは肅政廉訪司に相當する。有司は、むろん管民官司のこと。

八三三 諸て、監臨の官、怨みを挾き、當廳にて屬官を扯摔し、屬官の輒にこれを毆りし者は、答四十七。職を解く。<sup>(1)</sup>

(1) 三二〇條や八三五條と同じく、監臨官とその配下の間のめごとを扱う。

八三四 諸て、方面の大臣、正を以て下を率うあたわず、輒に幕屬と公堂に鬪爭すれば、赦に會うといえども、並びに罷免して、過を記す。<sup>(2)</sup>赦前に招するなき者は、職に還す。<sup>(3)</sup>

(1) 方面大臣は、一三一條に觸れたように、行省の大官など、高級地方幹部をさす。注(2)の實例をみると、宣慰司副使を擧げており、幕屬(僚屬)としては經歷をあてている。

(2) 『元典章』卷四四、刑部六、毆傷同僚官に具體例がみえる。

(3) 違犯行為について、赦前に當人の承伏がないときは、前段の規定の対象にはならないということ。

八三五 諸て、職官、輒に監臨するところを毆傷すれば、毆傷するところの法を以て罪を論じ、過を記す。<sup>(1)</sup>



(1) 唐律の定義に従えば、あらゆる官廳の判官以上は、主典以下の配下はもちろん、管下に置かれた人閑すべてに對して監臨の立場にあるものとされた（『譯註』五、三三四～三三五頁）。これが明律の名例律四二條では、監臨は官人、主守といえは吏卒には比定されており、ここで監臨の主體をなべて職官の語で括るのは、いわばその過渡的な姿であろう。

八三六 諸て、職官、同署の長官<sup>(1)</sup>を毆傷せし者は、答五十七、見任を解き、先品より一等を降して敘し、仍<sup>な</sup>過名を記す。

(1) 同署長官とは、路府州縣などにおいて、達魯花赤を補佐して、文書に連名署押し、その責任を分擔する管民長官など、いわゆる判署長官をさすと判斷される。

八三七 諸て、有司の長官、輒<sup>みだり</sup>に同位の正官を毆りし者は、答三十七。<sup>(1)</sup>佐貳官<sup>(2)</sup>を毆りし者は、二十七。並びに職を解きて、過<sup>あやま</sup>を記す。

(1) 元代、地方の行政は、管民長官たる有司の長官と正官との合議によつて運営され、書類の決裁には、彼ら判署官一同の圓署・圓簽を必要とした。同位の正官とは、これにちなんだ言い方と思われる。

(2) 元にあつて、佐貳官を正確に定義することは難しい。正官を

さすこともあるが、ここでは首領官と見なすべきであろう。幕職と熟して佐幕官ともいう。

八三八 諸て、同僚の改除するに、復び私忿を以て相い毆害せし者は、皆なその受くるところの新命を罷<sup>ひ</sup>む。

(1) 改除について、『明律國字解』は「官の高卑にかまわず、とかく官を替りたることなり」と述べる。一九三條の注(2)を參看。

八三九 諸て、在閑の職官、輒<sup>みだり</sup>に本籍在任の長官を毆害せし者は、杖六十七。<sup>(2)</sup>

(1) 在閑職官とは、現職を離れている官員。一〇三條の注(1)、一七〇條の注(2)、二二八條の注(5)などを參照。

(2) 八四六條の注(1)の『典章』に記す、部民故毆本屬官長と同じ處罰である。

八四〇 諸て、職官、相い毆<sup>(1)</sup>り、その官が等しければ、傷つくところの輕重に従い、罪を論ず。<sup>(2)</sup>

(1) 『元典章』卷四四、刑部六、品官相毆には、本部議得、卽係品官相毆、合杖六十、擬罰俸一十日、該二十一兩六錢沒官。とあるが、本條とどう關係するか、具體的なことは判然としない。

(2) 明律では三三一條の上司官與統屬官相毆が關係條文である。  
 なお唐律の鬪訟一七の、及官品同自相毆者、並同凡鬪法。とも  
 密接に關わる。

八四一 諸て、軍官、酒を縱はしいままにし、戯れに因りて怒り、故に  
 有司の官を毆傷せし者は、答三十七、過よぶを記す。

(1) 軍官が酒に酔つて管民官を毆傷しても、その處罰は通常の杖  
 刑より一等輕く、記過で済ますなど、明らかに優遇されている。

八四二 諸て、幕僚、公に因りて、輒みだに惡言を以て長官を詈りし者  
 は、答四十七。<sup>(1)</sup> 長官の輒に還毆せし者は、答一十七。並びに過名  
 を記す。

(1) 『元典章』卷四四、刑部六、官告吏毀罵親聞乃坐は、これと  
 若干關連する。明律三四八條の佐職統屬罵長官になると、凡首  
 領官及統屬官罵五品以上長官、杖八十、罵六品以下長官、減三  
 等。佐貳官罵長官者、又各減二等〔竝親聞乃坐〕。と書かれる。  
 ここでいう幕僚とは、佐貳官と首領官の雙方を含みうる。

八四三 諸て、職官、醉に乘じ、當街まがにて平人を毆傷せし者は、答  
 四十七、過よぶを記す。

八四四 諸て、職官、閑居(1)して、庶民と相い毆りし者は、職官は一  
 等を減じ、罰贖やうを聽きす。<sup>(2)</sup>

(1) 閑居とは、閑居とも表記され、在閑や退閑と意味は變わらな  
 い。

(2) 罰贖については、二九條を參看。この際は公罪として扱うと  
 いうことか。

八四五 諸て、他物を以て職官を毆傷せし者は、一等を加え、答五  
 十七。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』卷四四、刑部六、軍毆縣令が關連し、八〇六條で  
 他物故傷は四十七下とあるものに罪一等を加えている。八二九  
 と八三一の兩條と相似た組立を持つ。

八四六 諸て、小民の年老を恃み、所屬の官長を毆冒せし者は、杖  
 六十七、贖(1)を聽(2)さす。

(1) この種の犯行のばあい、唐律の鬪訟一一では、徒三年、また  
 明律三二九條の毆制使及本管長官でも杖一百徒三年として處罰  
 するきまりであった。

(2) 『元典章』卷四四、刑部六、部民故毆本屬官長。七十歳以上  
 の老人に認められた贖罪をあてこんだ、意圖的な犯行を防ごう  
 と取られた措置がこの規定の原型をなす。

八四七 諸て、惡少・無賴、輒に禁近の<sup>(1)</sup>人を毆傷せし者は、杖七十七。<sup>(2)</sup>

(1) 禁近の人とは、近侍人員のことと考えられ、天子の側近に仕える要路の官員をさす。

(2) 『元史』卷二〇、成宗紀三、大德四年正月丙申に記載する、申嚴京師惡少不法之禁、犯者黥刺、杖七十、拘役。が参考となる。

## 殺傷

【解説】 八四八條から九五三條に至る百六條には、標題の通り、殺傷と關わる條文を集める。本來は大惡に入れるべき部分を含むほか、個別具體的な事件を法文として十分に整理できていないものも目立ち、不統一の感はやはり免れない。だが唐律で賊盜・鬪訟・雜律に分けられていた規定をひとまとめにする方向は、いご明律にも繼承され、刑律の人命と鬪毆の兩篇へと收斂していくことになる。

八四八 諸て、人を殺す者は、死せ。仍お家屬より燒埋銀五十兩を徴して苦主に給す。<sup>(1)</sup> 銀なき者は、中統鈔一十錠を徴し、赦に會して罪を免ぜられし者は、これを倍にせしむ。<sup>(2)</sup>

(1) 『元典章』卷四三、刑部五、殺人償命仍徵燒埋銀。元代にあ

って、殺人を犯せば、死刑か否かを問わず、加害者から一定額の燒埋銀を徴收し、被害者側に支拂われた。二九二條の注(2)を參看。

(2) 明律の埋葬銀では、恩赦のとき倍額となることこそないが、銀十兩という額面は踏襲される。ちなみに『明令』一一一條の燒埋銀兩には、ここと變わらぬ規定を記載する。

八四九 諸て、部民、官長を毆死せば、主謀及び下手せし者は、皆な死に處す。<sup>(1)</sup> 同に毆傷すれど、命を致すにあらざる者は、杖一百七、遠きに流し、燒埋銀を均徴す。

(1) 唐律では鬪訟一一、明律なら三二九條の毆制使及本管長官と共通の枠内にある條文。ここでは鬪殺の共犯に焦點をあて、主謀(元謀)・下手など犯行における各々の役割に應じて處罰を定めている。

(2) 元代にあって、流遠には杖一百七下を併科する原則であった。

八五〇 諸て、人を殺し、還りて自殺すれど死せざりし者は、仍お死に處す。

八五一 諸て、人を殺し、從いて加功したるも、故殺の情なき者は、赦に會すれば、仍おこれを釋す。

【解説】 共犯關係において、加功とは、謀殺に密着した概念で、犯行に際して直接的な役割を果たすこと。ただし謀殺殺訖は故殺となるので、この條のように、加功と故殺を結びつけて論ずること自體、唐律の趣旨に外れる（『譯註』七、九七〇九八頁）。實際は鬪殺が戲殺であるにもかかわらず、犯行をめぐる各人の行動の直接さの程度を表すため、加功の語を使つたに過ぎないと思ふのが妥當であらう。

八五二 諸て、鬪毆して人を殺せしに、先に誤り後は故なる者は、即ち故殺を以て論ず。<sup>(1)</sup>

(1) 鬪毆に端を發していても、途中で故殺の意圖が明確となれば、直接の結果を生んだ後者に原因を求める例證。

八五三 諸て、鬪毆に因り、刃を以て人を殺し、及び他物もて人を毆死せし者は、並びに故殺に同じ。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』卷四二、刑部四の持刃殺人同故殺、及び木槌打死人係故殺に、具體例を記載する。元來唐律においては、鬪毆に際して刃物などの凶器を使えば、殺害の意思があるものと看做され、被害者を死亡させたときは故殺と同じに扱われる（鬪訟五）。ただ前者の斷例では、刑部の意見として、本來殺意がなかったとすれば、故殺には問えないとあり、元代にあって、この論理に對する揺れがあったことを感得させる。

八五四 諸て、争いに因り、刃を以て人を傷つくるも、幸いに生免を獲る者は、杖一百七。<sup>(1)</sup>

(1) 前條の關連規定。事實としては鬪毆殺傷であらうと、法的にみれば、殺意あるものと看做されるのだから、やはり謀殺・故殺の方向で捉えているとみてよからう。

八五五 諸て、刃を持ち、方に人を殺さんとするに、<sup>(1)</sup>人の覺りて逃れ、却つて怒を移して解勸するところを殺す者は、故殺と同じ。

(1) これも八五三條の延長上にある。移怒は、遷怒ともいい、やつあたりすること。殺意の持續を示す前提條件となる。

(2) 解勸とは、なだめ仲裁する。現代語では、勸解。

八五六 諸て、有司の、徴科急にして、民の堪えず、その徴科するを殺すを致せし者は、仍お故殺を以て論ず。<sup>(1)</sup>

(1) 唐律の鬪訟一八に由來するが、明律の三三三條、拒毆追攝人にある、凡官司差人、追徵錢糧、勾攝公事、而抗拒不服、及毆所差人者、杖八十。……死者、斬。により近い規定といえる。

八五七 諸て、醉中、その妻を殺さんと欲すれど得ず、怒を移してその解紛するの人を殺死せし者は、死に處す。<sup>(1)</sup>

(1) 解紛は、解勸と同巧で、喧嘩や紛争を仲裁すること。八五五

條と同じく移怒に殺意の持續を認めた處罰規定。酒氣を帯びてという理由で、故殺の斬刑より一等級い絞で處死になるものと判斷される。

八五八 諸て、倡女を誘いて逃さんと欲すれど、從われずして、輒みだにこれを殺す者は、常人を殺すと同じい。

(1) 倡女は賤民身分に入るが、『元典章』卷四二、刑部四、殺死娼女には、本部照擬、殺他人奴婢、徒五年、擬決杖一百七下。とあり、この例と明らかに齟齬する。恐らく兩者の身分的差異にもとづくのであらう。

八五九 諸て、鬪毆して人を殺す者は、結案して報を待たしむ。<sup>(1)</sup>

(1) 三二三條のうち殺傷に關係する部分のみ抜粹してある。

八六〇 諸て、人がその父を殺死し、子のこれを毆りて死せし者は、坐せず。仍お父を殺す者の家より、燒埋銀五十兩を徵す。

【解説】復讐に關する條文。唐律では、祖父母父母への毆撃に對し、子孫は即時の反撃で、しかも折傷がなければ罪に問われない(鬪訟三四)。しかし父のための復仇を大幅に容認する右の規定は、明律三四六條の父祖被毆にも受け繼がれ、祖父母父母が殺害され、卽座に加害者を殺せば無罪、後刻官許を得ずに勝手に復讐しても杖六十

との文言が作られた。桑原隲藏氏はこれらをもとに「復讐は元明時代を通じて、ほぼ公認されたものと見なして差し支えない」と結論されている(『支那の孝道殊に法律上より觀たる支那の孝道』『全集』第三卷、六〇頁)。

八六一 諸て、蒙古人、争いに因り、及び醉いに乘じて漢人を毆死せし者は、斷罰出征せしめ、並びに燒埋銀を全徵す。

(1) 争鬪と酒氣を帯びることが鬪殺の前提條件として同列に置かれており、注意される。

(2) 斷罰とは、斷罪罰俸のように、杖刑に正刑以外の處罰を組み合わせた用語。ここでは罰出征と熟し、雲南など邊地の軍隊へ流謫させることをさすのであらう。明初に現れる罰充軍や罰輸作と相通ずる犯罪者處罰といえそうである。

【解説】八一五と八一六の兩條とともに、モンゴル人が漢人を毆殺傷した場合の刑法上の特典を述べている。

八六二 諸て、鬭争に因り、一人は誤りて小兒を蹂み死し、一人は人を毆りて死に致さば、毆りし者は結案し、蹂みし者は杖一百七、並びに燒埋銀を徵す。

(1) 鬭争とは、争鬪、喧嘩のこと。

(2) これなどは具體的な事例をそのまま纏めたものに過ぎない。

争いごとがもとで、小兒を誤って殺した者には唐律の鬪訟三五  
によって誤殺を適用し、また相手を毆打して死亡させた者は、  
鬪殺の絞を前提に結案している(鬪訟五)。

八六三 諸て、人の、その妻を戯調<sup>(1)</sup>するあり、夫遇いてこれを毆り、  
傷つくるに因りて死せしめたる者は、死一等を減じて罪に論ず。  
仍お焼埋銀を徴<sup>(2)</sup>す。

(1) 戯調は、輕はずみな言葉でふざけかかる、又はこばかにする  
こと。清の威逼條例では威逼行爲をさす定型句として用いられ、  
調戲とも表記される。

(2) 妻を庇う夫の過剰防衛ともいえるが、鬪殺の場合より一等を  
減ずると杖一百七である。

八六四 諸て、應に捕殺すべき惡逆の人を毆死せる者は、罪を免じ、  
焼埋銀を徴<sup>(1)</sup>せず。

(1) 惡逆は、直系尊屬に對する暴行と殺害の陰謀・豫備、または  
近親尊長の殺害を内容とし、これらの犯行に及んだ者と捕縛のた  
め争ううちに傷つけ死亡させても處罰の対象とはならない。唐  
明律でも一部に規定のある、捕り手や被害者が被疑者を擅殺ま  
たはやむなく殺傷する場合と具體的にどう關係するか定かでは  
ないが、鬪殺の相手の罪狀に應じて殺人罪をある程度免責する

ことでは、以下にも散見するように、元代法の許容する範圍は  
かなり廣い。

八六五 諸て、他物を以て人を傷つくるに、傷毒流注して死なば、  
辜限の外に在るといへども、仍お人を殺すの罪より三等を減じ、  
これに坐<sup>(2)</sup>す。

(1) 流注は、身體の深部にできる惡性の腫れ物。

(2) 鬪殺は絞であるから、三等を減ずれば杖八十七となる。鬪毆  
殺傷の特例條項。

八六六 諸て、争いに因り、頭を以て人に觸れ、人と俱に仆れ、肘  
その心に抵<sup>(1)</sup>り、致死に邂逅せし者は、杖一百七、焼埋銀を全徴  
す。

(1) 邂逅致死は、二九二條の注(1)に前出。これなども具體的  
な事件處理をそのまま法文の形に仕立ててある。

八六七 諸て、出使の從人、館夫<sup>(1)</sup>を毆死せる者は、毆殺を以て論ず。

(1) 館驛の雜役に從事する者。『朴通事諺解』卷上。館夫、應當  
館驛接待使客之役。質問云、府州縣百姓差撥無身役者、做館夫、  
答應使客、待三年更替。

(2) 站赤でのトラブルにあたって、この條文のように特別扱いは

しないとわざわざ斷る裏には、元代にあって、使臣だけでなく、從者たちの横暴ぶりによほど目に餘るものがあつたと想像される。

八六八 諸て、戲言に因りて相い毆り、人命を致傷せし者は、杖一百七。<sup>(1)</sup>

(1) 犯罪者處罰からいえば、鬪殺傷に比べて一等軽いだけで（杖一百七下は徒五年に相當）、つごう二等の減刑となる戲殺にもあたらない。

八六九 諸て、父<sup>みまか</sup>亡り、母が復た他人を納れて夫と爲さば、即ち義父たり。若しその子を逐いて外に出居せしむれば、即ち凡人に同<sup>(1)</sup>じ。その鬪毆殺傷するところあらば、即ち凡人の鬪毆殺傷を以て論ず。<sup>(1)</sup>

(1) このくだりは義父（繼父）とつれ子に必要な條件、すなわち唐律の鬪訟三二でいえば、謂曾經同居、今異者。（＝異居）の關係すら成立しない場合を具體的に定義する。つまりこの條のよるな未嘗同居のつれ子は、財産分與とは無縁な事實上の義子に過ぎず、勿論、尊卑の隔ても問題にならない。滋賀『中國家族法の原理』五九一―六〇二頁に詳細な記述がある。

(2) 明律三四四條の毆妻前夫之子に、其故殺及自來不曾同居者、

各以凡人論。とつけ加えているのは、この内容を改めて明文化したものと思われる。

【解説】 これなどは本來は八七六條以下の規定とひとまとめに分類すべきで、ここに孤立して條文を立てるのは唐突の感を否めない。

八七〇 諸て、彼れ此れ罪あるの人、相い格ちて死に致せし者は、常人を殺すと同<sup>(1)</sup>じ。

(1) 相互に罪責のある者どうしの鬪毆殺傷は、相手方の罪の輕重によつて、免責の理由にはなりえない。ただ何らかの前提條件を省略している可能性もあり、この原則をどこまで任意に適用できるかについては疑問も残る。

八七一 諸て、職官、微故を以て齊民を毆死せる者は、死に處す。

【解説】 些細な理由で管下の住民を毆殺すれば、官員とて凡人なみに絞で處死となる。以下の五條は、官員を加害者とする殺人に對する處罰を集める。

八七二 諸て、職官、賊を受け、民の告するところと爲り、輒<sup>あだり</sup>に告者を毆死せば、故殺を以て論ず。<sup>(1)</sup>

(1) 謀殺の範疇に入る犯行である。『元典章』卷四二、刑部四、挾讎故殺部民には、路の達魯花赤の犯行として、この條文通り

の記事を載せている。

八七三 諸て、軍官、公に因りて怒りに乗じ、輒みだりに麾下に命じて人を毆りて死に致せし者は、杖八十七、職を解き、期年の後に先品より一等を降して敍し、燒埋銀を徴して苦主に給す。若し赦に會えども、仍お殿降して銀を徴す。

八七四 諸て、閹帥かんすい、係官の錢糧を侵盜するに、吏のその姦を發くを怒り、輒みだりに人をして毆死せしむる者は、故殺を以て論じ、赦に會うといえども、仍お追奪して敍せず、燒埋銀を倍徴す。

(1) 閹帥は、地方の軍政に與る大官。南宋では、制置司を制閹というほか、帥閹や總閹などの用語が散見するように、元代にあつては、安撫司や宣撫司、あるいは元帥府などの別稱として使われたと想像される。

(2) 追奪不敍は、除名不敍と同じ。倍徴については、官員の特典はいっさい顧慮されない。これは八七二條の注(1)の事例においても一貫している。

八七五 諸て、局院の官、輒みだりに微故を以て匠人を毆死せる者は、死に處す。

八七六 諸て、父の、故なくして刃を以てその子を殺す者は、杖七十七。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』卷四二、刑部四、帶酒殺無罪男には、酒に酔つた父親が息子を刺殺した事件を記し、そのなかで舊例として引用する唐律の鬪訟二八の、若子孫違犯教令、而祖父母父母毆殺者、徒一年半。以刃殺者、徒二年。故殺者、各加一等。は、この條文と刑罰の上でも合致する(徒二年と徒二年半は共に七十七下に讀み替えられる)。

【解説】 以下の七條は、親による子殺しを主題とする條文をまとめている。

八七七 諸て、子、孝ならず、父が弟姪と共に謀りて、これを死地に置きし者は、父は坐せず、弟姪は杖一百七。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』卷四二の浚死有罪男では、息子に毆打毀罵され腹を立てた父親と語らい、これを溺死させた弟姪らを、この規定に沿った形で處罰している。

八七八 諸て、女、已に嫁すも、女の過あるを聞き、輒みだりにその女を殺す者は、笞五十七。元と受けし聘財を追還し、夫に給して別に娶らしむ。<sup>(1)</sup>

(1) 兩親が娘の嫁ぎ先での問題にまで介入した、いわば懲戒權の



濫用にあたる。

八七九 諸て、父、故ありてその子女を殴り、致死に邂逅せし者は、罪を免す。<sup>(1)</sup>

(1) 唐律の鬪訟二八では、祖父母・父母が教令に違犯した子孫を毆殺すれば、徒一年半で無罪にはならないが、明律三四二條の場合、若違犯教令而依法決罰、邂逅致死、及過失殺者各勿論と、本條にかなり近い規定をしている。

八八〇 諸て、後夫、前夫の子を毆死せる者は、死に處す。<sup>(1)</sup>

(1) 唐律は鬪訟三二、明律は三四四條の毆妻前夫之子、いずれも處死で絞である。この場合、妻のつれ子については、同居または不同居（異居）であることが重要な前提となる。八六九條を參看。

八八一 諸て、妻、妾の子を故殺せし者は、杖九十七。その夫より嫁賣せしむ。<sup>(1)</sup>

(1) 唐律は鬪訟二八で徒三年、また明律第三四二條では、嫡繼慈養母殺者、各加一等（杖七十徒一年半）、致令絶嗣者、絞。と二段階に分けて罪を加重する。

【解説】 加害者が妻と妾とでは、刑罰にも相當の懸隔がある。ちな

みに唐律の鬪訟三一と明律の三四三條には、妾の子殺しに對する處罰を明記する。

八八二 諸て、男婦、過ありといえども、舅、姑の輒に殘虐を加え、死に致せし者は、杖一百七。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』卷四二、刑部四、打死男婦の實例では男婦を毆殺した姑が三十七下ないしは四十七下に處斷されていて、本條の量刑とは相當に開きがある。

(2) 唐律では鬪訟二九、明律なら三四二條で、毆殺は徒三年（八十七下）、故殺は流二千里（九十七下）であり、やはり杖一百七下には及ばない。

八八三 諸て、子、孝ならず、父その子を殺し、因りてその婦に及びし者は、杖七十七。婦に元と粧奩の物あらば、盡くその父母に歸せしむ。

八八四 諸て、細故を以て、その弟を殺す者は、死に處す。<sup>(1)</sup>

(1) 唐律は鬪訟二七、明律は三四一條の毆期親尊長と關係する。兄姉の弟妹殺しは十惡の不睦に入るが、刑罰は故殺でも流二千里で、死刑にはならない。この條がもとづく『元典章』卷四一、刑部三、胡參政殺弟では、處死で敲（杖殺）とするが、これに

は幾つかの要素が錯綜しているため、一般的通用性については些か疑問が残る。なお植松正「元代江南の一高官の犯罪」『香川大學一般教育研究』三〇、一九八六は、この斷例を詳しく分析したものである。

【解説】 以下八九五條までは、尊長の卑幼に對する殺害事件を具體的な實例に即して規定している。

八八五 諸て、兄、立繼の子を以て、主謀してその嫡弟を殺さば、

主謀・下手は皆な死に處し、その田宅・人口・財物は盡く死者の妻子に歸し、その子は宗に歸らしむ。<sup>(1)</sup>

(1) 庶兄が意中の養子に立繼(相續)させるため、正規の承繼者たる嫡弟を謀殺した事件にもとづく法文と思われる。唐律では、故殺で斬となる犯罪行爲(賊盜六)。

八八六 諸て、弟、先にその兄を毆り、兄が還りてその弟を殺さば、即ち罪あるの弟を殺すなれば、凡人の鬪殺を以て論ぜず。<sup>(1)</sup>

(1) 五二二條とちょうど反對の事例。唐律の鬪訟二七、明律の三四一條では、弟妹をはじめ、兄弟の子孫や外孫への毆殺は徒三年、刃物を使った殺害や故殺ならば流二千里であつて、この「不以凡人鬪殺論」のニュアンスと實際どう關わるかについては判然としない。これと状況は些か異なるが、『元典章』卷四

一、刑部三、因弟作盜斫傷身死にはそうした類例がある。

八八七 諸て、争いに因り、誤りて異居の弟を毆死せる者は、杖七十<sup>(1)</sup>、燒埋銀の半ばを徵す。

(1) 唐律では、弟を毆殺すれば徒三年(鬪訟二七)であり、これに誤殺の條件が加わるので一等を減じられ(鬪訟三五)、結局は徒二年半として杖七十七に讀み替えられる。明律では三四一條と三一五條が關係條文である。

(2) 前條注(1)の『元典章』には、燒埋銀兩、同居不須追理。とあつて、同居同財の原則のもとでは、贖金たる燒埋銀の授受は成立しにくい。

八八八 諸て、争いに因り、族弟を故殺せし者は、常人を殺すと同<sup>(1)</sup>。

(1) 族弟は總麻の親屬であるから、唐律では鬪訟二六、明律は三四一條の毆期親尊長によつて、いずれも絞に處すのが原則。

八八九 諸て、妹、尼と爲り、人と私<sup>しつ</sup>し、兄の聞きてこれを諫むるも従わず、反て詬詈してその兄を挫折し、兄のこれを殺すは、即ち兄が罪あるの妹を殺すなれば、凡人の鬪殺を以て論ぜず。<sup>(1)</sup>

(1) もとになる事件の経緯こそ違え、兄姉が有罪の弟妹を毆殺す

るという點では、八八六條とひとまとめにしてよい條文といえる。

八九〇 諸て、兄、弟の妻を毆り、傷つくるに因りて死したる者は、杖一百七、燒埋銀を徴す<sup>(1)</sup>。

(1) 唐律の鬪訟三三、明律の三四三條では、みな絞にあたが、ここでは罪一等を減刑しているように、例えば辜限を過ぎるなど、ある種の前提條件を踏まえていると考えなくては、説明がつきにくい。

八九一 諸て、嫂、その小姑を溺死せしめたる者は、故殺を以て論ず<sup>(2)</sup>。

(1) 小姑は夫の妹。これは溺女といわれる習俗で、とくに福建方面で盛んに行われ、元朝と言わず、歷代その對策には手を焼いた。そうした事情については、曾我部靜雄「溺女考」(『支那社會習俗攷』筑摩書房、一九四三に所收)が参考になる。

(2) 『元典章』卷四二、刑部四、溺子依故殺子孫論罪に詳細な記事がある。

八九二 諸て、争いに因り、族兄弟の子を毆死せる者は、杖一百七<sup>(1)</sup>。故らに刃を以てこれを殺す者は、死に處す。並びに燒埋銀を徴す<sup>(2)</sup>。

(1) 總麻親たる族兄弟の子は、もはや服制の埒外であつて、普通に考えれば、「以凡人論」となるはずである。ちなみに『元典章』卷四一、刑部三、打死遠房姪には、即係遠房姪、雖已隔從、終有尊卑。として、加害者を一百七下に問擬した例を記載している。

(2) 刃物を使った争鬪は、相手を殺害すれば、むろん故殺になる。唐律の鬪訟二六の規定では總麻の毆傷・鬪殺までに止まるが、明律は三三九條に同姓親屬相毆を設け、凡同姓親屬相毆、雖五服已盡、而尊卑名分猶存者、尊長減凡鬪一等、卑幼加一等。至死者、竝以凡人論。と明文規定を有する。

八九三 諸て、兄弟の子を毆死して、その財を圖りし者は、死に處す<sup>(1)</sup>。

(1) 圖財と斷る通り、これは謀殺・故殺に入る犯行である。唐律の鬪訟二七、明律三四一條の毆期親尊長では、いずれも流二千里であるのに比べ處罰が重いのは、唐律の賊盜六にもとづき、故意ある殺人と判斷された證據である。

八九四 諸て、夫婦、同に謀り、その兄弟の子を殺す者は、皆な死に處す<sup>(1)</sup>。

(1) 八九三條の續きともいえる規定。期親の卑幼に對する謀殺で

あり、唐律の賊盜六によつて、處死で斬となる。

八九五 諸て、尊長、誤りて卑幼を毆り、死に致せし者は、杖七十七。<sup>(1)</sup> 異居する者は、仍お燒埋銀を徴す。<sup>(2)</sup>

(1) 唐律の鬪訟二七によれば、期親尊長による卑幼の毆殺は徒三年であり、また鬪訟三五によつて誤殺を適用すると、徒二年半に減刑されるから、この條で杖七十七に讀み替えるのは原則にかなつてゐる。

(2) 燒埋銀の徴收における、異居と同居については、八八七條注(2)を参照。

八九六 諸て、微過を以て、輒にその妻を殺す者は、死に處す。<sup>(1)</sup>

(1) 夫が妻を殺せば、唐律の鬪訟二四では「以凡人論」とされ、明律の三三八條妻妾毆夫でもやはり絞となる。

【解説】 續く六條には夫の妻殺しに對する處罰を幾つかの事例に分けて集める。

八九七 諸て、夫妻の反目するに因り、輒にその妻を藥死せし者は、常人を故殺すると同じ。<sup>(1)</sup>

(1) これも正當な理由なく妻を殺す例で、藥殺(賊盜一六)は手段として選ばれたに過ぎない。これは唐律以來、謀殺殺訖つま

り故殺として斬刑に處せられるのがきまりである。『元典章』卷四二、刑部四、打死妻には、舊例に、即先不安諧、因有罪而毆死者、徒四年。とあつて、この條文でも意識されているものと考えられる。

八九八 諸て、妻、その舅、姑に悖慢し、その夫これを毆りて死に致せし者は、杖七十七。<sup>(1)</sup>

(1) 明律三一六條、夫毆死有罪妻妾の、凡妻妾因毆罵夫之祖父母父母、而夫擅殺死者、杖一百。に直接繋がる條文。

八九九 諸て、夫、疾に臥すも、妻が湯藥を侍さず、またその舅、姑を詬詈し、以てその夫の心を傷つけ、夫のこれを毆りて、致死に邂逅せし者は、坐せず。<sup>(1)</sup>

(1) やはりこれも明律第三二六條と密着した、極めて具體的な事件にとづく。妻が夫につかえず、舅姑を罵詈したという二つの要件によつて刑責を免除している。『元典章』卷四二、刑部四、打死犯奸妾には、舊例、毆傷妾者、減凡人二等、死者、以凡人論(唐律・鬪訟二四)。との記述に續き、若有罪而毆、邂逅致死者、不坐。毆妾折傷以上、各減妻罪二等、爲妻有罪而夫依理毆之、不期而死者、無罪。とあつて参考になる。

九〇〇 諸て、夫、妻を惡みて妾を愛し、輒に妻の微罪を求めてこれを殺す者は、死に處す<sup>(1)</sup>。

(1) 夫に妻と妾という三角關係のもつれに起因する事件で、内容的には八九六條とひとまとめにできる。やはりもとなる斷例をよく整理せず條文に仕立てた結果といえる。

九〇一 諸て、<sup>けんぎ</sup>嫌疑を風聞し、定婚の妻を故殺せし者は、凡人を殺すと共に論す<sup>(1)</sup>。

(1) さしたる證據もなく風聞に腹を立て定婚者を殺せば、無罪の妻殺しと同じく處死になるということ。唐律は鬪訟二四、明律は三三八條と關係する。

九〇二 諸て、妻、殘酷を以て、その妾を毆死せる者は、杖一百七<sup>(1)</sup>、衣を去りて刑を受けしむ<sup>(2)</sup>。

(1) 唐律の鬪訟二四には、若妻毆傷殺妾、與夫毆傷殺妻同。とあり、明律三三八條もこれに倣うが、その通りとすれば、鬪殺のかどで絞となるのに對し、八九七條の注(1)に擧げた舊例によつて徒四年とすると、九十七下となり、罪はつごう一等級くなる。

(2) 去衣受刑は、ふつう姦罪にのみ適用される。これは明らかに特例であつて、殘虐を以て、という文言に何らかの含みがある

ものと想定される。

九〇三 諸て、舅、無實の罪を以て、その甥を故殺せし者は、常人を殺すと共に論す<sup>(1)</sup>。

(1) 舅は母方の兄弟。姉妹の生んだ男子つまり甥とは小功の關係にあり、外姻どうしの殺害を扱うのが本條のねらい。

九〇四 諸て、争いに因り、仇を挾き、その婿を毆死せる者は、常人を殺すと同一<sup>(1)</sup>。

(1) 『元典章』卷四二、刑部四、打死婿には、義父の婿殺しを、法司が唐律の鬪訟二六を引用し、舊例、若尊長毆卑幼折傷者、總麻、減凡人一等、死者絞。として、處死に擬罪したところ、流遠で落着させた實例を載せている。

九〇五 諸て、奴その主を毆冒し、主の、奴を毆傷して死に致せし者は、罪を免す<sup>(1)</sup>。

(1) 『元典章』卷四二、刑部四の毆死有罪驅では、無斷で身ごもり流産した驅婦を折檻し死亡させた主人について、若有愆罪決罰致死者、勿論。なる舊例を擧げ、不問に付している。これは唐律の鬪訟二〇と鬪訟二一の折衷されたもので、その大綱は明律三三七條の奴婢毆家長にも受け繼がれている。

【解説】 以下に續く八條では、賤民あるいは賤視される人々を被害者とする殺傷事件を取り上げる。

九〇六 諸て、罪なき奴婢を故殺すれば、杖八十七。<sup>(1)</sup> 醉に因りてこれを殺す者は、一等を減ず。<sup>(2)</sup>

(1) これが唐律の鬪訟二〇ならば徒一年、明律三三七條では杖六十徒一年、當房人口悉放從良とされる。

(2) 『元典章』卷四二、刑部四、打死無罪驅には、軀口殺しの罪責を遺族の全家放良で相殺させている判決例がある。酒氣を帶びての犯行について、概ね罪一等減ずるのは、本刑法志に幾度も出てきた通り、元代法の特色であろう。

九〇七 諸て、放良に擬せらるる奴婢を毆死せる者は、杖七十七。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』卷四二、刑部四、殺放良奴に残る實例から、擬放良奴婢とは、年季奉公の軀口をさすものと分かる。

(2) 前掲『元典章』には、唐律の鬪訟三六を踏まえ、舊例、主毆放良奴婢、因傷致死、減凡人四等、合徒二年半。部准擬、七十七下。と論罪している。

九〇八 諸て、已に放良せる奴婢を謀殺せし者は、常人を殺すと同じ。<sup>(1)</sup>

(1) 年季のあけた奴婢にとって、過去の身分はもはや意味をなさない。なお謀殺殺訖は故殺と罪質に違いはなく、ともに斬刑に處せられる。

九〇九 諸て、良人、鬪毆を以て、人の奴を殺さば、杖一百七、燒埋銀五十兩を徵す。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』卷四二、刑部四、良人殺驅には、良人毆傷他人奴婢、減凡人二等、合徒四年。として、杖一百七に擬刑しており、唐律鬪訟一九の定める流三千里と照應するが、明律三三六條では絞であり一等加重されている。

九一〇 諸て、良人、他人の奴を戲殺せし者は、杖七十七。燒埋銀五十兩を徵す。<sup>(1)</sup>

(1) 唐律の場合、戲殺は減鬪殺傷二等(鬪訟三七)と規定されるから、九〇九條を規準にすれば、杖八十七となるはずだが、この條ではなぜかさらに一等減刑されている。

九一一 諸て、奴、その弟を毆死せしに、弟も亦た主を同じくせし奴たりて、主の、死を貸さんことを乞う者は、聽す。<sup>(1)</sup>

(1) この實例は『元典章』卷四二、刑部四、打死同驅にあり、同主奴婢、相犯致死、而主求免者、聽減本罪一等、合徒五年、

決徒年杖一百。として、唐律の鬪訟一九で定める絞より一等を減じて量刑している。

九一二 諸て、主を異にせる奴婢、相い犯して死せし者は、常人と同じ。主を同じくせしが相い犯し、重刑に至りし者は、仍お例に依りて結案せしむ。

(1) 明律三三六條の、若奴婢自相毆傷殺者、各依凡鬪傷殺法。に近く、系譜上は唐律の鬪訟一九と關係する。

九一三 諸て、地主、佃客<sup>(1)</sup>を毆死せる者は、杖一百七。燒埋銀五十兩を徴す。

(1) 佃客身分については、六七〇條の解説を參看。

(2) 『元典章』卷四二、刑部四、主戸打死佃客。ここでは、良人毆死他人奴婢、例斷一百七下。として判決されており、佃客と奴婢が同列に論じられている。ただそれは佃戸の中に驅奴が多分に含まれるという、當時の江南社會が抱えていた狀況がある程度追認した結果であつて、主戸としての法的身分を本質において否定したものではない。この點で『大元通制』諸條格の毆言には、江南富戸凌虐毆傷佃戸、同凡人科斷。とあり有用である。

九一四 諸て、醉中、他人を誤認して仇人と爲し、故殺せんとして

命を致せし者は、誤りといえども、故に同じ<sup>(1)</sup>。

(1) 唐律鬪訟三五の疏義にある問答を敷衍した内容である。第三者を相手と間違え殺害した場合、元來の行爲に故殺の意圖が明白ならば、誤殺とはせず、故殺に従い處罰される。すなわち、錯誤を事由にした減刑はいっさい顧慮されない。なお醉中つまり酒氣を帯びてとは、律疏の問答にいう「夜中」に代えて、誤殺を招いた付帶條件として言及されるに過ぎない。

【解説】 以下、九三七條までは、責任能力の不完全な者の犯行をはじめ、不可抗力的な偶發事故や過失殺傷など、いずれも殺害の故意を認めがたい殺人の諸例をならべている。

九一五 諸て、奴、本主の命を受け、仇<sup>(1)</sup>を執りて人を殺す者は、死を減じて遠きに流す。

(1) この場合、殺人を指示した主人は元謀であり、奴(驅口)は下手となる。しかし刑罰からいえば、前者と後者の關係は通常の謀殺とは逆轉し、殺害に直接着手した者が減死流遠になっているのは、驅口に良民なみの責任能力が認められていないためと想像される。

九一六 諸て、仇<sup>(1)</sup>を挾きて人を殺さば、赦に會うも、首爲りて下手せし者は、赦さず。從爲りて、曾て下手せざる者は、死を免じ、

徒一年。

【解説】 共犯關係の罪責について、恩赦適用の可否を下手の有無にもとづき規定した條文で、この部分に配列するのは明らかに不適切。

九一七 諸て、老病を以て、人を殺す者は、老病を以て免ぜず。<sup>(1)</sup>

(1) 三一條の規定によつて、元代にあつても、老小廢疾には實刑を科さない原則は維持された。ただこれを利用して故意に殺人を犯した際は、特典の對象とはならないというのがこの條の意圖で、八四六條と同じ方向にある。

九一八 諸て、人を謀・故殺し、年七十以上なれば、並びに枷禁し、歸勘・結案す。<sup>(1)</sup>

(1) 唐律・名例三〇の、八十以上十歳以下及篤疾、犯叛逆・殺人應死者、上請。を明らかに意識した法文。

九一九 諸て、兩家の子、昏暮に奔還するに、中路相い迎え、地に撞仆し、傷つくるに因りて死に致せし者は、坐せず。仍お鈔五十兩を徵し、苦主に給す。<sup>(1)</sup>

(1) 夕方に歸宅を急ぐ子供、どうしの偶發事故。出會いがしらの衝突で死亡したのは、一種の不可抗力の災難と認めた上で、燒埋銀の徵收を規定しているのは注意される。なお鈔五十兩とは、表

現として些か不適切だが、要は銀五十兩にあたる中統鈔一錠ということ。

【解説】 以下九三七條まで、現今の感覚で言えば、過失致死にあたる諸例を集める。

九二〇 諸て、十五以下の小兒、過失もて人を殺す者は、罪を免じ、燒埋銀を徵す。<sup>(1)</sup>

(1) 年少者犯罪の刑事責任に觸れたもので、次の條と對をなす。なお過失殺について、滋賀氏は「鬭爭とか危険な惡ふざけとか、その他何らかの責むべき異常な行動をしたのではなく、社會生活上正常な行動の過程においてAの行動が直接の原因となつてBが死傷したとき、Aを『過失殺傷』に問う」とまとめている(『譯註』五、七八頁)。專論としては、中村茂夫『清代刑法研究』(東京大學出版會、一九七三)第一章「過失の構造」がある。

九二一 諸て、十五以下の小兒、争いに因り、人を毀傷して死に致せし者は、贖を聽し、燒埋銀を徵して、苦主に給す。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』卷四二、刑部四、年幼不任加刑と關係する。十五歳以下ならば、流罪以下は實刑を科さず、收贖させるのは、唐律から變わらぬ原則で、この刑法志では三一條に同じ規定を載せ



る。鬪毆殺傷を扱う本條はいわばその具體例。

九二二 諸て、替者<sup>もつじん</sup>、人を毆り、傷つくるに因りて死に致さば、杖一百七、焼埋銀を徴して、苦主に給す<sup>(1)</sup>。

(1) 『元典章』卷四二、刑部四、篤疾傷人杖罪斷決には、この部分に直接關わる具體例がある。替者(兩目盲)は、篤疾にあたり、通常の鬪殺ならば絞のところを、罪一等の減刑となつてゐる。

九二三 諸て、風狂を病み<sup>(1)</sup>、人を毆傷して死に致さば、罪を免じ、焼埋銀を徴す<sup>(2)</sup>。

(1) 風狂とは、狂病。精神病者の犯罪は、唐律においては、名例三〇の規定によつて、篤疾・廢疾の者の犯行として論罪される。これは明清律でも同様であるが、四九七條と並んで特に風狂の犯罪を規定しているのは、元代に特有ともいえる。中村・前掲書、一八三―一八七頁を參看。

(2) 『元典章』卷四二、刑部四、心風殺人上請。

九二四 諸て、庸醫<sup>(1)</sup>の鍼藥を以て人を殺す者は、杖一百七、焼埋銀を徴す<sup>(2)</sup>。

(1) 『明律國字解』は「庸醫は、へた醫者なり」と述べるが、中

村茂夫氏によれば、初めから醫術に精通しない醫者をさすのではなく、鍼灸や投藥の處方を誤つたため、患者を死亡させるなどの失策があれば庸醫とされたという(中村・前掲書、六六頁、八一頁)。

(2) 唐律の雜律七と同じ論理に立ち、明律三二〇條の庸醫殺傷人では、過失殺に問うものと明記される。

九二五 諸て、磚石を颺<sup>な</sup>げ、鄰の果を剝<sup>む</sup>るに、誤りて人を傷つけ、死に致せし者は、杖八十七、焼埋銀を徴す<sup>(1)</sup>。

(1) 唐律・雜五の、放彈及投瓦石者、笞四十。因而殺傷人者、各減鬪毆殺傷一等。を意識しながら、短慮にも隣家に向けて磚石を投げ人を死亡させた場合の罪を論じてゐる。

九二六 諸て、軍士、射を習いしに、招箭する者謹ならず、傷を被りて死に致さば、射者は坐<sup>ま</sup>せず、仍<sup>な</sup>お焼埋銀を徴す<sup>(1)</sup>。

(1) 招箭とは、看的のこと。ここは弓射の訓練中に、看的の兵士が不注意にも矢傷を負つて死亡した場合を想定し、唐律の雜律五は無論のこと、鬪訟三八の過失殺の見地から射手の刑事責任は問えないものとする。

九二七 諸て、過誤<sup>(1)</sup>にて小兒を踏<sup>ふ</sup>み死さば、杖七十七。焼埋銀を徴

して苦主に給す。

- (1) 過誤とは、明清律の場合でも、「過失」「失」「誤」などの語をまとめ、廣く故意なき犯罪に一般的に使われる(中村・前掲書、一〇六―一〇九頁)。

- (2) 八六二條と違い、鬭爭の語がなく、杖七十七下と量刑されていることから、鬭殺傷や過失殺傷などではなく、一種の偶發事故として處理されていると分かる。

九二八 諸て、昏夜に馬を馳せ、誤りて人に觸れ、死さば、杖七十七、燒埋銀を徴す。

- (1) 『元典章』卷四二、刑部四、走馬撞死人には、これと同一の事件を傳える。唐律は雜律四、明律では三一九條の車馬殺傷人がそれぞれ該當する。なお昏夜の語は、次の條文からも分かる通り、事件の狀況を述べたまでで、本件に缺かせぬ要素ではない。

九二九 諸て、車を驅り馬を走らせ、人命を致傷せし者は、杖七十七、燒埋銀を徴す。

- (1) 唐律では、市中など人なかで急を要する事由なくして車馬を驅っただけで、笞五十の罪に當たり、疾走の結果、人を死なせれば、鬭殺より一等減じて處罰された。もとなる斷例の違い

こそあれ、前條の論理と完全に一致しており、ここでわざわざ條文を立てる必要はない記述である。

九三〇 諸て、昏夜に車を行め、人の地に在るあるを知らず、誤りて轢死を致せし者は、笞三十七、燒埋銀の半ばを徴して、苦主に給す。

- (1) ここは上記の二條とは明らかに異なる論理が働いている。本條とは些か事情を異にするものの、『元典章』卷四二、刑部四、車碾死人には、落馬のため路上に倒れた人物を誤って轢き、そのまま放置したため、結果的に死亡させた者を、不應爲重のかどで爲首は二十七下、爲従は一十七下で處罰した例があつて參考になる。

【解説】 上記の三條に關連して中村・前掲書、五三―六五頁に緻密な考證がある。

九三一 諸て、幼小、自ら相い戯れを作し、誤りて傷つけ、死に致せし者は、坐せず。

- (1) 幼小の具體的な範圍など、用語法に不明な點を残すが、彼らどうしの戲殺傷は刑事責任に問われないと定めた條文。ただし九二一條から判斷して、燒埋銀は免除されなかつたはずである。

九三二 諸て、戯れて人命を傷ない、自ら休和を願ひし者は、  
聽<sup>きこ</sup>す。

(1) 『元典章』卷四二、刑部四、戲殺准和。戲殺と認定される限りでは、休和つまり當事者間の私的和解は容認されたことになる。戲殺傷については、中村・前掲書、四四〇五三頁に詳しい。

九三三 諸て、兩人が戯れを作して物を争い、一人手を放ち、一人勢いを失いて、跌死すれば、放ちし者は、坐<sup>ま</sup>せず。

(1) これなどは實際の事件経過そのまま、法文としてはこなれていない。『元典章』卷四二、刑部四、船邊作戲渰死には相似た例を載せるが、處罰は全く異なる。

九三四 諸て、物を以て戯れに小兒を驚かせ、疾を成して死せしめたる者は、杖六十七、燒埋銀五十兩を追徴す。

(1) 『元典章』卷四二、刑部四、驚死年幼には、盜賊の追跡中に弓手が幼兒を驚死させた實例を載せるが、それ自體は處罰の對象とされていない。

九三五 諸て、戯れを以て人と相い逐い、人の跌傷して死に致せし者は、その罪は徒<sup>と</sup>、仍お燒埋銀を徴して、苦主に給す。

(1) 戲殺傷とは、もともと合意の上で戯れていて、誤って相手を

殺した犯罪をいい、人を殺傷する危険な行爲と知りながら、敢えてこれを行うことを要件とする。ここは人と戯れたことがもとで墮き、死亡したところに根據を求めている。

(2) 唐律の鬪訟三七によると、戲殺は減鬪殺傷二等と規定されるから、鬪訟律第五條に定める絞より二等減刑すれば徒となり、本條の内容とも合致する。ただこれは律の本刑であるため、實際は勞役を課さず、杖六十七下から杖一百七下の間で讀み替えて執行されたことはいふまでもない。

九三六 諸て、駱駝の牧に在り、人を嚙みて死せし者は、牧人は笞一十七、駱駝を以て苦主に給す。

(1) 唐律の厩庫一二、明律二五五條の畜產咬踢人の流れにある條文。ただ燒埋銀ではなく、當該の駱駝を一種の贖金に充てるのは、元代に特有である。

九三七 諸て、驛馬の野に在り、人を嚙みて死せし者は、その馬を以て苦主に給し、馬主は別に買いて役に當てしむ。

(1) ここでも被害者を嚙み殺した馬で贖金を支拂わされているが、馬主に杖刑を加えないのは、站赤の關係からであろうか。いずれにせよ、驛馬の新規購入を餘儀なくされる站戸の負擔は極めて重いいわねばならない。

九三八 諸て、奴、その子女を故殺し、以てその主を誣する者は、杖一百七。<sup>(2)</sup>

(1) 誣とは、誣賴のことで、罪をなすりつける。圖賴、昏賴と同じ。

(2) 『元典章』卷五三、刑部一五、奴誣告主斷例には、奴婢應告主事而誣告者、皆斬。本主求免者、聽減一等。なる舊例を引用し、死一等を減じ、徒五年のところを杖一百七下に讀み替え斷罪している。

【解説】 圖賴、昏賴なる語は、宋代あたりから判語に頻出しはじめる法制用語。

九三九 諸て、争いに因りて、妻の前夫の男<sup>男</sup>女<sup>女</sup>を以て溺死せしめ、人を誣賴したる者は、故殺を以て論ず。<sup>(1)</sup>

(1) 妻のつれ子を鬪殺すれば、唐律では鬪訟三二、明律なら三四四條で、ともに絞と決められているが、さらに誣賴という條件が加わって故殺となり斬に處せられるものと解される。

九四〇 諸て、後夫、毒を飲食に置き、前夫の子女に與えて食せしめ死したる者は、常人を藥死せしめたと同じ。<sup>(1)</sup>

(1) 妻のつれ子を謀殺した事件であって、故殺と同じく斬になる。

九四一 諸て、罪なき子孫を故殺し、以て仇人を誣賴せし者は、常人を故殺するを以て論ず。<sup>(2)</sup>

(1) これは唐律には見えない規定。明律三一七條の殺子孫及奴婢圖賴人には、凡祖父母父母故殺子孫、及家長故殺奴婢、圖賴人者、杖七十徒一年半。とあり、元制との繋りが着目される。

(2) 『大元通制』毆言にある、故殺子孫誣賴人、決七十七下。將男女殺害圖賴人、決六十七下。とは、どう關係するのか後考をまちたい。

九四二 諸て、人を殺すに、苦主なき者は、燒埋銀を徴するを免じ、犯人の財産・人口は、並びにその妻子に付す。仍お民と爲して差に當つ。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』卷四三、刑部五、無苦主免徵燒埋銀。ここでは燒埋銀を徴收しないかわり、いちど抄扎(抄劄)した家財を改めて加害者の妻子に與え、民戸として附籍している。その眼目が差役負擔者數の缺損回避にあることはいうまでもあるまい。

【解説】 以下の十一條は、燒埋銀の徴收をめぐる諸例であり、それぞれに八四八條を補う内容を持つ。

九四三 諸て、罪あるの人を殺さば、燒埋銀を徴するを免ず。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』卷四三、刑部五、打死奸夫不徵埋銀。と關係する。

九四四 諸て、財を圖り、人を謀・故殺すること多き者は、皆な陵遲して死に處す。各賊の殺すところの人数を驗べ、家屬より、焼埋銀を均徴す<sup>(1)</sup>。

(1) 六二四條と同文。本來なら、盜賊よりもこの殺傷に分類すべき性格の條文。

九四五 諸て、同居、相い毆りて死し、及び人を殺せしに、罪のいまだ結正せずして死する者は、並びに焼埋銀を徴せず<sup>(2)</sup>。

(1) 同居共財の閑柄において、焼埋銀のやりとりは意味をなしえない。

(2) 『明律國字解』は、「結正とは、其罪のさばき違いをさばきなをすことなり」と説明するが、『宋刑統』では、結竟と同義とされているように、犯罪事實の確定という方向で理解すべきであらう。

(3) 『元典章』卷四三、刑部五、焼埋錢貧難無追には、但犯致傷人命、如犯人在禁身死、或結正其罪、焼埋銀兩、着落家屬追給と見える。

九四六 諸て、人を殺す者は、殺さるるの人、或し他所に家住すれば、官にて焼埋銀を徴して本籍に移り、その家屬を得て、これを給す。

【解説】 加害者と被害者の居住地が異なる際について、焼埋銀の徴收・支給に至る手續きを、實際に起った事件處理に即して指示している。

九四七 諸て、鬪毆して人を殺し、應に焼埋銀を徴すべきも、犯人の貧窶にして出備するあたわず、並びにその餘の親屬に應に徴すべきの人なければ、官が與に支給す<sup>(1)</sup>。

(1) 『元典章』卷四三、刑部五、焼埋錢貧難無追。加害者に焼埋銀の支拂能力がなく、また負擔を代替すべき親屬もない場合について規定する。

九四八 諸て、人命を致傷し、應に焼埋銀を徴すべき者は、止だ銀價中統鈔一十錠を徴す<sup>(2)</sup>。

(1) 『元典章』卷四三、刑部五、殺人償命仍徴燒埋銀。

(2) 銀價とは、銀五十兩を中統鈔十錠と定めた官定銀價。この條文では、どうやら至大銀鈔などの換算率の問題が念頭にあるらしく、八四八條の内容を再確認しておきながら、遇赦倍徴に觸れない理由もこのあたりにあるものと想定される。

九四九 諸て、争いに因り、同に人を毆死せしめ、赦に會して應に焼埋銀を倍徴すべき者は、首爲りて命を致さば、中統鈔一十錠を

徴し、從爲れば、一十錠を均徴せしむ。<sup>(1)</sup>

(1) 鬪殺の共犯について、ことに恩赦で贖金を倍徴される場合に焦點を合わせ、犯人各自が負擔すべき焼埋銀の比率を規定する。『元典章』卷四三、刑部五の強盜殺傷事主經革倍徴埋銀に關連の記事がある。

九五〇 諸て、人を毆死せば、屍を見ずといえども、招證の明白なる者は、仍お焼埋銀を徴す。<sup>(1)</sup>

(1) 招證とは、物證も含む自白。ただ『元典章』卷四三、刑部五、埋銀先行追給告主の記述などからみても、毆殺の場合、遺骸も見つからないまま、自白だけで證據をかため、しかも焼埋銀を徴收するというのでは、被害者の埋葬費に充てるため前倒しすることにもならず、本條の眞意は些か解しかねる。

九五二 諸て、僧道、人を殺さば、焼埋銀は常住より追徴す。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』卷四二、刑部四、篤疾傷人杖罪斷決に載せる事例では、焼埋銀を梯己錢(個人名義の財産)より徴收し、不足の額を道觀の常住錢で補填させている。

九五二 諸て、庸作、人命を毆傷すれば、焼埋銀を徴すること、庸作の家には及ばず。<sup>(1)</sup>

(1) 庸作は、年季を決めて雇用される奉公人。後世の雇工人にあたる。庸作の家つまり雇用者側は、庸作の負擔すべき焼埋銀に何ら責任を持たなくてよいというのがこの條文の趣旨である。

九五三 諸て、奴が人を毆りて死に致し、犯すこと主家に在らば、本主より焼埋銀を徴し、犯すこと主家に在らず、焼埋銀の徴すべきなき者は、その主より徴せず。<sup>(1)</sup>

(1) 犯行現場が主家にあるかどうかによって、軀口に代わり焼埋銀を支拂う主體は變わる。主人の軀口に對する責任の範圍を明示した條文とみてよい。

(徳永 洋介)

## 禁令

【解説】一〇九條に及ぶこの禁令の中味は、雑多な内容が、いちおうは内容的にまとめられて並べてある。『元史』刑法志四卷の中に含まれる二十の項目の大部分は、『唐律』以來の十二のカテゴリーに包含できる名稱が大部分だが、この禁令は少し性格が異なる。むしろ中には、『唐律』の雜律と關係する條文がないではない。しかし、この項目の條文の大半は禁止、教令を説くいわゆる「令」が主體を

なすところに著しい特色がある。算えてみると、一〇九條中の七六條、ちょうど七割が、何々してはいけない(禁)と、禁を犯せば罪するという條文ばかりで、「律」のように刑罰が明記されているものは三割に満たない。

しかもそれらが何の原則もなく入雑っている。その多くは「脚注」で明らかなように、『元典章』なら卷五十七、刑部十九の「諸禁」、「通制條格」なら卷二十七以下の「雜令」と同内容である。ここに列挙されている「禁令」の殆どすべては、『元典章』などとの照合でも判るように、モンゴル支配という特別な状況下で起った種々の出来事のうち、法規として使用できる、所謂、著令の文章を、比較的生に近い型で集めてきていると言える。むしろ、刑法志の他の項目でも共通の性格は窺えるけれども、特にこの「禁令」を通して、モンゴル支配の色彩を色濃く感じるのは私だけであろうか。それとともに中國法制における「令」の終焉を考える上でも参考になる部分だろう。

九五四 諸て、度量權衡同じからざる者、犯人は答五十七。<sup>(1)</sup> 司縣正官、<sup>(2)</sup> 初犯は罰俸一月、再犯は答二十七、三犯は別議す。仍お過名を記す。<sup>(3)</sup> 路府州縣の達魯花赤・長官、提調職を失すれば、<sup>(4)</sup> 初犯は罰俸二十日、再犯は別議す。<sup>(5)</sup>

(1) 『唐律』四一七條、雜律の疏議に引く唐の「雜令」に、龔合

升斗斛の容(容積)、銖兩斤の秤權衡(重量)、分寸尺丈の度(長さ)の解説がある。なお『唐律』四二〇條も關係する。『明律』は一七四條、戸律・市廩の私造斛斗秤尺を參看。

(2) 『元典章』卷五十七、刑部十九、諸禁、雜禁の禁私斛斗秤尺の後半部と合致する。本條では答刑數の「下」の字を省略している。

(3) 注(2)の『典章』は親民司縣正官に作り、その次に禁治不嚴の四字が入る。

(4) 梅原郁「罰俸制度の展開」(『宋元時代の基本問題』、汲古書院、一九九六)に元代の罰俸に觸れる。

(5) 前記『典章』では、過名の下に「任滿つれば、解由内に於て、明白に開寫し、以って定奪に憑る」と書き加える。

(6) これも『典章』は「用心提調を為さず、違犯有るを致さば」と丁寧に記す。

九五五 諸て、奏目及び官府の公文は、竝びに國字を用う。その畏兀字を襲用する者有れば、これを禁す。

【解説】世祖至元六年(一二六九)に公布された蒙古國字、いわゆるパスパ文字を公文に使用する令文。但し、一般にはここにも顔をみせるウイグル文字が重寶されていたかと思われる。奏目は皇帝への上奏の條目。『元史』卷六、至元六年二月條。『元典章』卷一、詔

令一、詔令、行蒙古文字、同卷三一、禮部四、學校、蒙古學の用蒙古字などを參看。

九五六 諸て、但し詔旨、條畫を降せしに、民間輒りに小本を刻して市に賣りし者は、これを禁す。

【解説】北宋の王安石の時代、刑法書をはじめ、編敕が限られた範圍とはいえ出賣されていたことは、宮崎市定「宋元時代の法制と裁判機構」の第四章で述べられている。これも、民間で勝手に小冊子を印刷して發賣することを禁じただけで、必ずしも聖旨、條畫の畫一的禁書化を命令するものではなからう。

九五七 諸て、内外、應に符を佩する職官、輒に符を以て、その儼從に付して佩服せしむる者は、これを禁す。

(1) 符は唐律などでは、虎符、魚符のように左右に二分できる銅製が普通で、發兵符、使者符、宮殿門符などいくつか用途別の種類があり、符印といった熟語も使われた。

九五八 諸て、官員、朝會にその朝服を服し、私に敬を人臣に致す者は、罰す。

(1) 『通制條格』卷八、儀制の公服私質には、「公服は乃ち臣子が君に朝するの禮。今後百官、凡そ正旦朝賀に遇わば、大禮を行

し畢るを候ち、公服を脱去し、方めて人と相賀するを許す」という禮部の議が認可されている。

九五九 諸て、隨朝の文武百官の朝賀に至らざる者、中統鈔十貫を罰す。儀を失する者は、中統鈔八貫を罰す。

【解説】朝參の缺席や失儀に對しては、すでに唐の肅宗乾元元年(七五八)の詔敕に詳しい規定が見える(九五四條、注(4)梅原論文)。普通は處分は罰俸だが、ここは元代の銀・鈔の讀みかえ規定がナマのまま出ている。なお『明律』一八六條、禮律、儀制の失誤朝賀、同一八七條の失儀を參照。

九六〇 諸て、宰相の出入に、輒に敢えて衝犯する者は、これを罪す。

(1) 衝犯は具體的には直訴のことか、不詳。

九六一 諸て、章服。①惟れ蒙古人及び宿衛の士たるも、龍鳳文を服するを許さず。餘は並びに禁ぜず(龍とは五爪二角なる者を謂う)。

②職官。一品・二品は渾金花を服するを許す。三品は金苔子を服し、四品・五品は雲袖・帶欄を服し、六品・七品は六花を服し、八品・九品は四花を服す(職事・散官は一の高に従う)。③命婦。一品より三品に至るは渾金を服し、四品・五品は金苔子を服し、



六品以下は惟だ銷金並びに金紗苔子を服す。④首飾。一品より三品に至るは、金・珠・寶玉を用うるを許し、四品・五品は金・玉・眞珠を用い、六品以下は金を用う。惟だ耳環は珠玉を用う（籍を同じくする者は親疎を限らず。期親は、別籍並びに出嫁すると雖も同じ）。⑤車輿。並びに龍鳳文を用うるを得ず。一品より三品に至る、間金の粧飾・銀の螭頭・繡帶の青幔を用うるを許す。四品・五品は素の獅頭・繡帶の青幔を用い、六品より九品に至るは、素の雲頭、素帶の青幔を用う。⑥内外の、出身有り、考滿ち、應に入流すべき見役の人員は、服用、九品と同じ。⑦各投下に授くるの令旨・鈞旨・印信有るの見任人員も亦た九品と同じ。⑧庶人は惟だ暗花、紵絲・絲綢・綾羅・毛氈を服することを許し、緒黃を許さず。冒笠は飾るに金・玉を以てするを得ず。鞞は花樣を裁置するを得ず。首飾は翠花・金の釵・篋各一事を用うるを許す。惟だ耳環は金・珠・碧甸を用うるを許し、餘は並びに銀を用う。車輿は黒油・齊頭平頂・良幔。⑨諸の色目人は、行營の帳を除くの外、餘は並びに庶人と同じ。⑩職官の致仕せるは見任と同じ。解降せられし者は、應に得べき品級に依る。敍せざる者は庶人と同じ。⑪父祖官有り、既に没して年深くとも、除名不敍を犯すに非れば、その命婦及び子孫、見任と同じ。⑫諸の樂人・工藝人等、服用は庶人と同じ。凡そ粧扮を承應する者は上例に拘わらず。⑬皂隸・公使人は惟だ綢網を服するを許す。⑭倡家の出

入には、止だ皂袴を服し、車馬に乗坐するを許さず。⑮應ゆる服色の等第は、上の下を兼ねるを得るも、下の上を僭するを得ず。違ひし者、職官は見任を解き、期年の後、一等を降して敍す。餘人は答五十七。禁に違ひ物は、告捉人に付して賞に充つ。御賜の物は禁限に在らず。

(1) 章服は特別な場合の朝服（公服）を除いた一般の正装で、織り出したり、刺繡の文様を持つ。

(2) 『元史』卷七八では、龍鳳文を除いては、蒙古人は禁限に在らず、見に怯薛に當る諸色人は禁限に在らずとある。

(3) 一品から九品までの衣服につける模様乃至その織成の説明。

渾金は古い時代の用例では未精製の金を意味したが、ここではそうではなく、金絲や箔を使う刺繡模様。『西湖老人繁勝錄』に渾金紗羅、『草木子』卷三に渾金線、『宋史』卷四八九の三佛齊國使者に賜與された渾金帶など例は多い。

(4) 苔子は厚味のある裝飾、現在でいえばアブリケに近い。

(5) 雲袖は袖口の雲模様かと想像されるが帶の字が不明。雲袖帶の欄（すそぎの衫）かも知れぬ。

(6) 以上の品官は資品（階官）を標準としているから、職事官（實職）や散官と差がある場合の但し書である。

(7) 銷金は、金線・金絲を織りこむ場合と、單に金粉で字や模様を畫く場合があるが、ここは後者か。

- (8) 官員の妻女の規定ゆえ、こうした注記がある。なお『元史』の刑法志は、①②の龍や職事も本文として扱っているが、いずれもこのことと同じく注と考えるべきであろう。命婦の次に茶酒等の器皿と帳幕があるが、『元史』は省略している。
- (9) 間金は金まじり、日本風に言えば梨地。木鼻の飾りが銀の螭頭。繡帶はぬいとりした帶。校点本の『元史』などは繡帶と青幔を別のものに考えているが、ここえでは一つに解しておく。素は白、後にでる皂ソウと對する。
- (10) 有出身は、宋代では科擧出身者を指すが、科擧の行なわれなかった元代では、胥吏から正規の段階をふんで昇進して來た者をかく呼ぶ。
- (11) 暗花はすかし織り、『武林舊事』卷九の、高宗幸張府節次略に暗花婆羅がのっている。紵絲はいちびまたは細い麻糸。ここは暗花が織り方、紵以下は素材と思われる。毛毳は毛織物。
- (12) 赭黄は赤味がかった代赭たいしや色。皇帝が用いる色である。
- (13) 冑は帽に同じ。
- (14) 甸は鈿に同じ、青貝で作る飾り。
- (15) 解任(職)降官の略か。
- (16) 官員の處罰の中で最も重いもの。官員身分を剝奪され、再敍用を許さない。
- (17) 『元典章』その他の史料はいずれも樂藝人で工はない。
- (18) 承應は命令をうけたまわって演じる意。『夢梁錄』には歌板色承應とか、宣應殿庭承應とか、内等子承應とか、少からぬ用例がある。ここは承應を動詞と考え、役柄の上で特別の衣裳をつけ、飾り立てる場合と解しておく。
- (19) 『元典章』は倡家を娼家、皂襜ソウチンは皂襜子ソウチンコに作る。襜子は婦人の表着。
- 【解説】この條は「唐令」でいえば「衣服令」に當る部分を、極めて簡略化したようなもので、『元史』卷七八、輿服志の服色等第、『元典章』卷二九、禮部二、禮制、服色の文武品從服帶、『通制條格』卷九、服色などに、それぞれ仁宗延祐元年十二月(一二三二)の規定として、語句や内容に若干の出入はあるが、ほぼ同文が残されている。ここでは説明の便宜のため番號をいれたが、『元典章』や『通制條格』では、「一、何々」のように個條書きになっている。
- 九六二 諸て、官員、黄金を以てて甲を飾る者、これを禁す<sup>(1)</sup>。違ひし者は、甲匠、罪を同じくす。
- (1) 『通制條格』卷八、器物飾金の至元十三年九月初十日條に、軍器に金を使用することを禁じる聖旨が見える。
- 九六三 諸て、常人の鞍轡、虎・兔を畫く者は聽す。雲龍・犀牛を

畫く者は、これを禁す<sup>(1)</sup>。

(1) 『元典章』卷五八、工部一、造作、雜造の粘休畫雲龍屏が同内容。鞍轡はくらのあふり、鞍の下に泥よけの覆い。『元典章』は粘、はだつけとするが同意。雲龍も雲彩龍兒と四字に作る。

九六四 諸て、段匹、周身の大龍を織造する者は、これを禁す。胸背の小龍は禁する勿れ<sup>(1)</sup>。

(1) 『元典章』卷五八、工部一、造作、段足の禁織大龍段子では、胸背つまり前と後に小さな形で龍をデザインすることは認める<sup>(1)</sup>と記す。『通制條格』卷九、服色の大徳元年三月の條もこれと同じ。

九六五 諸て、鞍轡・箭鏃・鞞履及び諸の雜帶を市造し、金を以って飾りと爲す者は、これを禁す<sup>(1)</sup>。

(1) 『元典章』卷五八、工部一、造作、雜造の鞍轡靴箭休用金と、『通制條格』卷八、器物飾金の至元八年十一月條と同内容。

九六六 諸て、郡縣の達魯花赤、及び諸の投下、擅に軍器を造る者は、これを禁す<sup>(2)</sup>。

(1) 『元典章』卷三五、兵部二、軍器、雜例の禁約擅造軍器、『通制條格』卷二十七、擅造兵器が關係する。郡縣は『典章』には

なく、『條格』では司縣に作る。以下九七三條までの八條は軍器(武器)關係の禁令が続く。

九六七 諸て、神廟の儀仗<sup>(1)</sup>、止だ土・木・紙・綵を以てこれに代う。眞の兵器を用うる者は、禁す<sup>(2)</sup>。

(1) 『通制條格』卷二七、供神軍器のタイトル通り、神に供えるための器物で、具體的には、鞭簡、鎗刀、弓箭、旌旗、鑼鼓、斧鉞などの名が擧がっている。

(2) 通例では「これを禁す」と「之」字がある筈である。前注『通制條格』卷二七、供神軍器。

九六八 諸て、都城の小民、彈弓を造り及び執る者は、杖七十七。その家財の半を沒す<sup>(1)</sup>。在外の郡縣は禁限に在らず<sup>(2)</sup>。

(1) 『元典章』卷三五、兵部二、軍器、拘收の禁治弓箭彈弓の後半部。ここでは大都裏・舊城裏に有<sup>ある</sup>百姓毎とあり、造彈弓<sup>ある</sup>的<sup>ある</sup>と拿彈弓<sup>ある</sup>的<sup>ある</sup>の刑が七十七と七十八の一等差とされている。

(2) なお『元典章』卷五七、刑部十九、雜禁の禁射小弩彈弓では、この時江南城郭で初めて小弩・彈弓が禁止されたような書き方をしている。

九六九 諸て、打捕及び捕盜の巡馬弓手・巡鹽弓手、弓箭を執るを

許す。<sup>(3)</sup>餘は悉くこれを禁す。

(1) 『元典章』卷三五、兵部二、軍器、許把の打捕戸許把弓箭。

打捕はいうまでもなく狩獵に従事する特殊戸計。

(2) 弓手の種類や彼らの武器については、岩村忍「元典章刑部の研究―刑罰手順―」(『東方學報』京都二四)の第一章の(イ)、弓手を参照されたい。

(3) 『元典章』卷三五、兵部二、軍器、拘收の禁斷軍器弓箭の後半部。

九七〇 諸て、漢人<sup>(1)</sup>、兵器を持つ者は、これを禁す。漢人の軍と爲る者は、禁ぜず。<sup>(2)</sup>

(1) 『元典章』などでは、漢人を漢兒人と稱し、江南舊宋の蠻子、南人と區別している。舊淮水以北の住人で、早くから金朝に屬していた中國人。

(2) 『元典章』卷三五、兵部二、軍器、拘收の禁斷軍器弓箭や、禁遞鋪鐵尺手槍などが關係する。また『通制條格』卷二七、禁約軍器も參看。

九七一 諸て、軍器を賣る者、應に執把すべきの人に賣與する者は、禁ぜず。<sup>(1)</sup>

(1) 『通制條格』卷二七、買賣軍器に、この禁令が出された時の

具體的事例が見える。

九七二 諸て、民間に、鐵尺<sup>(1)</sup>・鐵骨朶<sup>(2)</sup>及び含刀の鐵拄杖<sup>(3)</sup>を藏せし者有れば、これを禁す。<sup>(4)</sup>

(1) 鐵尺は一尺ばかりの鐵棒。『福惠全書』刑名部にも、短棍・鐵尺等の類が見える。

(2) 骨朶は棒の先に葱坊主狀の鐵又は木製の頭部をつけたもの、宋代以後の儀仗によく出てくる。

(3) いわゆる仕込み杖、帶刀杖。

(4) 『元典章』卷三五、兵部二、軍器、拘收の禁遞鋪鐵尺手槍に、「漢兒民戸每根底、鐵尺・古朶叉帶刀拄杖、交行文書、疾忙拘收者」の一文がある。

九七三 諸て、<sup>(1)</sup>①私に甲を藏し、全副なる者は、死に處す。副を成さざる者は、答五十七・徒一年。零散の甲片、穿繫<sup>(2)</sup>して敵を禦するに堪えざる者は、答三十七。②鎗若しくは刀若しくは弩、十件を私有する者は、死に處す。五件以上、杖九十七・徒三年。四件以下、七十七・徒二年。使用に堪えざれば、答五十七。③弓箭、十副を私有する者は、死に處す。五副以上、杖九十七・徒三年。四副以下、七十七・徒二年。副を成さざれば、答五十七(凡そ弓一、箭三十もて一副と爲す<sup>(4)</sup>)。

(1) 全體は『元典章』卷三五、兵部二、軍器、隱藏の隱藏軍器罪名、同卷卷頭の表に同じ、但し字句に出入があり、おおむねは『典章』が正しい。また『刑統賦疏』の私造兵器には、至元五年の右三部の定擬としてこの文章がでてゐる。

(2) 『元史』はすべて笞に作るが、『典章』は杖で、これは杖が不適切。なお笞杖數の次に例によつて『元史』は「下」一字を缺く。

(3) 『典章』は穿甲に作る。要するに着用する意。

(4) 『元史』はこの條の末尾にこの注を本文のように付しているが、『典章』では雙行注で、弓箭私有十副者處死の下に入れ、毎副弓一張、箭三十隻と單位を記す。

九七四 諸て、嶽瀆祠廟、輒に敢て觸犯・作踐する者は、これを禁ず。

【解説】 以下五條は祠廟等にかかわる禁令である。嶽瀆等については三四八條の注を参照。このように法文はあるが、『通制條格』卷三十の岳祠の記事では、世祖時代、東嶽廟は荒廢して修理してないといふと述べる。

九七五 諸て、伏羲・媧皇・堯・舜・禹・湯・后土等<sup>(1)</sup>の廟、軍馬・使臣、敢て沮壞する者は、これを禁ず。

(1) 后土は普通には「社」であり、上記の聖王の名稱と次元が違

う。或いは后稷の誤りか。

【解説】 こうした禁令は、モンゴルが元朝を樹立した比較的早い時期に、非漢民族の軍隊や、モンゴル人の使臣に對して發布されたものかと想定される。『通制條格』卷二七には、中統二年六月、諸の官員・使臣・軍馬が孔子廟を宿舍や宴會場に使つてはいけなとの聖旨がのつてゐる。

九七六 諸て、名山・大川・寺觀・祠廟并びに前代名人の遺蹟、敢て拆毀する者は、これを禁ず。

【解説】 現代で言えば文化財、遺蹟保護の原則を述べてゐる。前代の宋の祠廟だけでも、『宋會要』禮の二十には、夥しい數の名稱が擧げられてゐる。この規定は『通制條格』卷二七の前代遺蹟によれば、至元十三年正月の江南に諭す詔條の一項となつてゐる。

九七七 諸て、寺を改めて觀となし、觀を改めて寺と爲すは、これを禁ず。

【解説】 こうしたことが、一時期の特殊事情か、それとも元代とたたて珍しくなかつた事象かどうかは不明。

九七八 諸て、祠廟・寺觀、御寶の聖旨及び諸王の令旨を模勒する者は、これを禁ず。

【解説】『元典章』卷三三、禮部六、釋道、雜例の碑上不得鐫寶では、確かに「御寶聖旨并びに諸王令旨を將つて、模勒鐫鑿すれば、合に一體に磨毀を行うべし」との中書の原案が裁可されている。しかし、蔡美彪の『元代白話碑集錄』では、各地の寺觀にある石刻の聖旨・令旨が多數掲載されているのもまた事實である。

九七九 諸て、子と爲り孝を行ひ、輒に、割肝、刳股、埋兒<sup>(1)</sup>の屬を以つて孝を爲す者は、並びにこれを禁止す。

(1) 割肝は唐代の『本草』の影響が強いと思われるし、刳股すなわち自分の股の肉を割いて親に食べさす話しも、宋代に俄然増加する。埋兒は、母を養うための口べらしとして、子供を生埋めにしようとした後漢の郭巨の故事。

(2) 『元典章』卷三三、禮部六、釋道、行孝の禁割肝刳股や行孝割股不賞、『通制條格』卷二七、非理行孝などに元代の實例が載っている。以下九八五條までは民間の習俗に係した雜然たる禁令が連る。

九八〇 諸て、民間の喪葬、紙を以つて、屋室と爲し、金銀もて馬を爲り、雜綵もて衣服・帷帳(と爲)す者、悉くこれを禁ず。

(1) 『元典章』卷三十、禮部三、禮制、喪制の禁喪葬紙房子。ここでは、紙錢は認めるが、紙糊房子、金錢人馬、綵帛衣服帳幘

を禁ずとある。

九八一 諸て、墳墓、輒瓦を以つて、その上に屋を爲る者は、これを禁ず。

(1) 『元典章』卷三十、禮部三、禮制、葬禮の墓上不得蓋房舍を參照。

九八二 諸て、家廟の春秋の祭祀に、輒に公服<sup>(1)</sup>を用つて行禮する者は、これを禁ず。

(1) 公服は、たとえば『通制條格』卷八の規定では、一・五品はともに紫羅服で、品階によつて花模様の種類と大きさに違いがある。六・七品は緋羅で徑一寸の小雛花、八・九品は綠羅の無文となつている。朝賀參内など宮中での公式行事に限り着用する。九六一條と彼此參看。因みに『明令』でもこれは全く同じ。

九八三 諸て、民間祖宗の神主、皇字を稱する者は、これを禁ず。

【解説】元代は避諱の上でも特殊な時代だったことは良く知られている(『二十二史劄記』卷二九、元帝后皆不諱名)。ここで皇の字の使用を禁止した理由はわからない。

九八四 諸て、小民の房屋、鵝項を銜脊に安置するに、鱗爪・瓦獸

有る者は、答三十七、陶人は二十七。<sup>(1)</sup>

(1) 田中淡氏の御示教によれば、鵝項は鵝の首のようにS字形に二度曲ったカーブ。屋根の棟上の両端に使う飾り。銜脊は棟。それらの飾瓦に、龍を思わす鱗・爪や獸形を使つてはならぬ意。

九八五 諸て、職官、見任に居れば、善政有るといへども、立碑を許さず。<sup>(1)</sup>已に立てて、贓汚を犯せし者は、これを毀つ。治狀無く、虚譽を以つて立碑せし者は、これを毀つ。

(1) 『唐律』一三四條、職制に條文がある。『明律』は一九一條、禮律、儀制の見任官輒自立碑。『通制條格』卷二七、立碑では、この條文の原因となつた至元二十九年三月の事件を書き残す。

九八六 諸て、夜禁。<sup>(1)</sup>一更三點、鐘聲絶てば、人行を禁ず。五更三點、鐘聲動けば、人行を聽す。違ひし者は、答二十七。官有る者は、贖を聽す(その公務急速、及び疾病・死喪・産育の類は、禁ぜず)。

(1) 『唐律』四〇六條、雜律の犯夜の條文と基本的には同じ。『明律』は二四〇條、兵律の夜禁だが、刑罰の内容が細分化されている。一更は午後八時、以後二時間おきに二(更)三(更)となり五更は午前四時。更の五分の一が點または籌。

(2) 『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、禁夜の禁夜。ここでは

「有官者、答一下、准贖元寶鈔一貫」とある。また、除外條件が本文でなく、小字の注として、人行を聽すの下に入っている。以下四條は夜禁と關係する。

九八七 諸て、有司の曉鐘<sup>(1)</sup>いまだ動かざるに、寺觀輒に鐘を鳴らせし者は、これを禁ず。

(1) 城市すなわち府州クラスの城郭都市には鐘樓と鼓樓があり時刻を知らせる。曉鐘は五更(午前四時)を知らせる鐘。

九八八 諸て、江南の地、毎夜禁鐘以前、市井の點燈買賣、曉鐘の後、人家點燈し、讀書・工作する者は、並びに禁ぜず。その衆を集め祠禱する者は、これを禁ず。

【解説】 現在でもそうだが、江南の城市の夜は北よりも開放的だった。『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、禁夜の講究開禁燈火には、至元二十九年のこととして、「今江南歸附已後十八年、人心寧一、燈火之禁、似宜寬弛」の文が見える。

九八九 諸て、犯夜して拒捕し、微巡を斷傷する者は、杖一百七。

(1) 微巡は夜まわりのパトロール、斷は創る意味だが、この場合は傷害。

九九〇 諸て、城郭の人民、隣甲相い保し、門ごとに水甕を置き、水を積み常に盈たしむ。家ごとに火具を設け、毎物須らく備えせしむ。大風時に作れば、傳呼して以て路に徇う。有司、不時に點視し、凡そ救火の具、不備なる者は、これを罪す。

【解説】 以下七條は火事とかかわる禁令や遺火の處分を規定する。この條は主として都市内の防火準備にふれる。個々の家の防火はせいぜい水甕を置く程度しかできなかったろう。なお宋の『東京夢華錄』卷三の防火には、消防團の火具についての記述がある。

九九一 諸て、遺火<sup>(1)</sup>、係官の房舎を延焼すれば、杖七十七。民の房舎を延焼すれば、笞五十七。因りて人命を致傷せし者は、杖八十七。毀つ所の房舎・財畜、公私俱に償を徴するを免す。自己の房舎を焼く者は、笞二十七（止だ失火の人を坐す<sup>(2)</sup>）。

(1) この條は舊來の律文の型式を具える。『唐律』は雜律の四三〇條から四三三條が關連。『明律』は四〇六條、刑律、雜犯の失火。

(2) 『元典章』卷五七、刑部十九、雜禁、禁遺漏の遺火決斷通例。そこを見ると、財畜は財物・畜産とあり、「止だ（本家）の失火の人を坐す」も注文であることが判る。

九九二 諸て、煎鹽の草地、輒に野火を縱ち、延焼せし者は、杖八

十七。因りて用を闕くを致せし者は、奏して聖裁を取る。隣接の管民官、專一に關防禁治す<sup>(1)</sup>。

(1) 本條は鹽竈の燃料と關係した條文で、やや特殊なもの。『元典章』卷二二、戸部八、課程の、恢辦課程條畫の中の一條に關係記事が見える。なお『通制條格』卷二八、野火を參看されたい。

九九三 諸て、火を縱<sup>はな</sup>つて圍獵し、民の房舎・錢穀を延焼する者は、罪を斷じ、償を勒す。償いまだ盡さずして赦に會する者は、徴を免す。

【解説】 本條と直接結びつく史料は見出せなかったが、元代、モンゴル人をはじめとした圍獵によって、人民が苦難したことは、『元典章』卷三八、兵部五の捕獵の、飛放に残された幾つかの文章や、『通制條格』卷二八の擾民、圍獵から十分うかがえる。

九九四 諸て、故らに、太子・諸王の房舎を焼く者は、死に處す。

【解説】 こうした問題にわざわざ獨立した一條を作るところに、モンゴル時代の特色が垣間見られる。

九九五 諸て、故らに、官府の廨宇、及び人の居止する有る宅舎を焼けば、舎宇の大小・財物の多寡を問う無く、強盜に比同し、刺



を免じ、杖一百七・徒三年。因りて人命を傷つければ、殺人に同じ。その、人の居止する無き空房、并びに財物、及び田場積聚の物を損壞すれば、竊盜に同じ。刺を免じ、賊を計り、罪を斷ず。因りて財物を盜取せる者は、強盜に同じく、刺斷し、並びに燒く所の物の價を追陪す。人命を傷つくる者は、仍お燒埋銀を徴す。再犯する者は、決配し、役滿ちて千里の外に徙す。

【解説】 本條の基底は『唐律』雜律の四三三條だが、犯罪の様態に應じて、刑罰もこまかく分岐している。『明律』四〇七條、刑律、雜犯の放火故燒人房屋は本條を繼承する。『元典章』卷五十、刑部十二、諸盜の放火には、幾つかの具體的事件が列擧されており、それらの處罰をひとまとめにすると本條の姿が浮き上がってくる。なお、同じ『典章』卷四九、諸盜の冒頭に掲げられた表の放火の項で見ると、「皇慶新例」として、本條とそっくりの條文が載っている。

九九六 諸て、仇を挟み放火するも、隨時撲滅し、曾って延燎せざる者は、強盜曾って人を傷つけず、財物を得ざるに比し、杖七十七・徒一年半、刺を免ず。親屬相い犯すといえども、常人に比同す。

(1) 本條は『元典章』卷五十、刑部十二、諸盜、放火の放火賊人例で起った事件を、條文の形にまとめたものと考えて大過あるまい。

九九七 諸て、毎月、朔・望・二弦<sup>(1)</sup>、凡そ生有る物、殺す者、これを禁ず。

(1) 朔望はいうまでもなく一日と十五日、二弦は上弦と下弦の間で、八日と二十三日。

(2) 『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、禁刑の禁宰獵刑罰日を參看。

【解説】 その日に死刑を行なわぬ十直日(十齋日)は、『唐律疏議』雜律に見えて良く知られている。ここでは、圍獵を含め、それをさらに限定していると考えられる。以下八條は、家畜の宰殺についての禁令を集める。

九九八 諸て、郡縣、歲ごとに、正月・五月、各々宰殺十日を禁ず。

その、饑饉の去處、朔日より始めと爲し、殺を禁ずること三日。

(1) 『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、禁刑の禁宰獵刑罰日、至元十七年條に、「今年正月五月裏、各禁斷十個日頭宰殺」とか、同禁刑の禁忌月日賣肉に、至元三十年のこととして、「五月初一日至月終、除上都不禁外、大都并各路、禁斷宰殺」といった文が散見する。

【解説】 所謂の斷屠月は、唐では正月、五月、九月であったが、『唐令拾遺』八四七頁、元では正月と五月に減少し、しかも一ヶ月あるいは十日と、場所や時代により差異も見受けられる。

九九九 諸て、毎歲、十二月より來歲正月に至るまで、母羊を殺す者は、これを禁<sup>(1)</sup>す。

(1) 『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、禁宰殺の禁休殺母羊には、至元三十年より前、母羊殺害を禁じた聖旨が見えるが、本條のような期限つきの條文との關係は不詳。

【解説】 こうして、羊についての禁令が獨立して出て來るのも時代を反映しているか。

一〇〇〇 諸て、宴會に、達官といえども、馬を殺して禮を爲<sup>(1)</sup>す者は、これを禁<sup>(2)</sup>す。その、老病・鞍勒に任<sup>(3)</sup>えざる者有るも。亦た必ず衆驗を與<sup>(4)</sup>して後、これを殺<sup>(5)</sup>す。

(1) 禮は禮物。接待の食物。馬の料理もまた北方的な習慣とつながるか。

(2) 『通制條格』卷二七、筵會宰馬の至元三年八月、中書省が欽奉した聖旨と一致する。その直譯體では、達官が大官人、老病云々が病的委實不中騎坐的、與衆驗が教人做證驗了と記されている。

一〇〇一 諸て、牛馬を私宰せし者は、杖一百。鈔二十五兩を徵し、告人に付して賞に充つ。兩隣、知りて首せざる者は、答二十七。本管の頭目<sup>(1)</sup>の覺察を失する者は、答五十七。殺すを見て告さず、

因りて錢物を脅取する者有れば、杖七十七<sup>(2)</sup>。若し老病用に任<sup>(3)</sup>えざる者は、有司の辦驗に従い、方<sup>(4)</sup>めて宰殺を許<sup>(5)</sup>す。已に病死せる者は、申驗して開剗す。その筋骨は即ち官に付し、皮肉はもし自用せざれば、須らく投稅して貨賣すべし<sup>(6)</sup>。違いし者は、匿稅の法に同じ。有司、禁治嚴ならざる者は、これを糾す。

(1) ここでいう本管の頭目とは、『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、禁宰殺の私宰牛馬によれば、鄉村では里正・主首、城市では坊正・巷長、局院では各親管頭目、軍隊では牌子頭とされている。

(2) 次注の『元典章』では、この下にも、「鈔二十五兩を徵し、告人に與えて賞に充つ」の一句がある。

(3) ここまで、『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、禁宰殺の賞捕私宰牛馬に同文がある。

(4) 上掲注の『元典章』の牛馬倒死皮肉從民便などの數條には、「筋骨は例に依りて拘收し、皮貨は民便に従う」の字句が何回かあらわれるが、商稅徵收の手續は見えぬ。

【解説】 『唐律』二〇五條の廐庫律が關係する。『明律』二五四條、兵律、廐牧の宰殺馬牛は、駝、驢、騾なども加えて著しく細密な條文に變っている。

一〇〇二 諸て、官の牛馬を私宰すれば、首と爲るは、杖一百七。

従と爲るは八十七。<sup>(1)</sup>

(1) 『元典章』新集、刑部、頭足、禁宰殺の宰殺馬牛首従罪例でみると、仁宗の皇慶以前では、主従を分けず一例に杖一百としていたように書かれている。

一〇〇三 諸て、馬牛を私宰するに助力せし者は、正犯人より二等を減じて罪を論ず。

(1) 前條と實質的には同じ内容を重複して出している感がある。前條の注に引用した『元典章』では、助力した者を、扶頭・把脚・添力下手干犯人と區別して説明する。

一〇〇四 諸て、牛馬驢騾死し、筋角實を盡して官に輸せざる者は、一副以上は、笞二十七。五副以上は、四十七。十副以上は、杖六十七。仍お犯す所の物の價を徴し、告人に付して賞に充つ。

【解説】筋角はいずれも軍器の原料であることは言うまでもない。ここでいう副はたとえば弓一張分という程度の意味か。九七三條の既製の軍器と比較するとかなり罪は軽い。

一〇〇五 諸て、體膚を毀傷し、以って市に行丐する者は、これを禁ず。

(1) 『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、雜禁の禁治貫刀乞花を

要約したもの。父母から受けた身體を傷害するのは風化を害するという中國の發想が根底をなす。

【解説】『元典章』で雜禁と名づけられているように、まとまりなく、一條づつ全く別のことを對象にした五條がならぶ。

一〇〇六 諸て、城郭内外、<sup>(1)</sup> 鴿を放ち、<sup>(2)</sup> 鈴を帶する者は、これを禁ず。

(1) 都市でも農村でもの意。

(2) 『元典章』では鈴が哨子（警笛・呼子）となっている。

【解説】『元典章』卷三八、兵部五、捕獵、飛放の禁鴿鴿帶哨子と同じ内容。傳書鴿の利用については、桑原隲藏『浦壽庚の事蹟』（全集第五冊）の一〇四頁に事例が挙げられている。しかし、この時の禁令の具體的内容、とくに鈴（哨子）の役割についてはよく判らない。

一〇〇七 諸て、諸王・駙馬及び諸の權貴・豪右、山場を侵占し、民の樵採を阻む者はこれを罪す。<sup>(1)</sup>

(1) 『通制條格』卷二七、雜令、山場に、至大年間の二つの事例が挙げられている。普通には山場は茶の産地を指すが、ここは人民の樵採乃至は柴炭・薪價といった字句があるように、入會地的な場所。主としてモンゴルの支配階級は圍獵などのため、

こうした場所を占有しようとする場合が多かった。一〇四〇條  
ともつながる内容。

一〇〇八 諸て、關、讒して<sup>(1)</sup>嚴ならず、財を受け故縱する者は、これを罪す<sup>(1)</sup>。

(1) あまり見慣れぬ字が使っているのは、『孟子』梁惠王の「關市、讒而不征」をふまえる。とがめたて、チェック。

(2) 『通制條格』卷一八、關市關渡盤詰と内容的につながる。また『明律』二四五條、兵律、關津の盤詰姦細を参照。

一〇〇九 諸て、江河の津渡、或は潮信已に到り、及び風濤將に起らんとするを明知し、渡錢を貪索し、淹延して渡さず、以って中流覆溺し、人命を傷害するを致す者、首と爲るは死に處し、從と爲るは一等を減ず。

【解説】津渡におけるこうした事件は、唐・宋時代の例を幾つか具體的に知ることができ、日常的に起っていたかと思われる。『唐律』では見られなかった本條のような規定が、『明律』二四三條、兵律、關津、關津留難に登場していることは、その反映であろう。

一〇一〇 諸て、俗を棄てて出家し、有司の體覆に従わず、輒に度して僧道と爲る者、その師は答五十七。度を受けし者は四十七。

元籍に發す。

【解説】差役忌避のため、元でも多數の私度僧があったことは、『元典章』のあちこちに見え、『典章』卷二、聖政、重民籍にのせられた大徳八年詔書のような原則がくり返される。この條文はより具體的、部分的で、かつ刑罰もそれ程重くない點が注意を惹く。以下十四條ほどは、宗教、陰陽家など民衆の信仰と關連した禁令が集められている。

一〇一一 諸て、白衣・善友<sup>(1)</sup>を以って名と爲し、衆を聚め結社する者は、これを禁ず。

(1) 佛教でいえば、白衣・善友ともに在家、在俗の信者で、ゼンウと呼びならわす後者は修行上の助力をしてくれた人たち。

一〇一二 諸て、色目の僧尼・女冠、輒に民家に入り、抄化<sup>(1)</sup>を強行する者、これを禁ず。

(1) 抄化は他に『元典章』にも用例があり、布教感化せしめること。

【解説】色目のが色目人の意か、あるいはまた僧尼、女冠が單に宗教者を指すのか、さらにどんな宗教を布教しようとしたのか、これだけでは判然としない。

一〇一三 諸て、僧道、經文を偽造し、上を犯し、衆を惑わせれば、首と爲る者は斬。従と爲る者は、各々輕重を以て刑を論ず。

【解説】 こうした實例として、『元典章』卷五二、刑部十四、詐偽、偽の、偽造佛經では、主犯が杖一〇七・流遠、共犯が杖百以下三等の刑罰を科せられた。この條は「大惡」と匹敵するが、それより軽く、情狀酌量で輕減の中もあつたかとみえる。

一〇一四 諸て、非理を以て迎賽祈禱し、衆を惑わせ、民を亂す者は、これを禁ず。

【解説】 支配者側としては至極當り前の淫祀邪教禁止の原則的禁令にすぎない。迎賽は神佛を禮祭する意。

一〇一五 諸て、俗人の、衆を集め、<sup>(1)</sup> 鏡を鳴らして佛事を作す者は、これを禁ず。

(1) 鏡は手に持ってチンチン鳴らす小さなかね。

(2) 『通制條格』卷二九、僧道、俗人做道場の至元二十八年の一文が参考になろう。

一〇一六 諸て、軍官、財を鳩め衆を聚め、儀衛を帳設し、鑼を鳴らし、鼓を伐ち、神社を迎賽し、以て民の倡を爲す者は、笞五十七。その副は二十七。並びに過を記す。

【解説】 これは軍官が主導した何か具體的な事件があり、それをそっくり借用した一條かと思われる。従つて軍官以外の官員との區別も不詳。

一〇一七 諸て、陰陽家の、天文・圖讖、應ゆる禁するの書、敢て私藏する者は、これを罪す。<sup>(2)</sup>

(1) こうした禁書の内容は『通制條格』卷二八、雜令の禁書の項に列擧されている。

(2) 『元典章』卷三一、禮部五、學校、陰陽學の禁收天文圖書に關連する記述がある。

一〇一八 諸て、陰陽家の、圖讖を偽造し、釋老家の、經文を私撰し、凡そ邪說・左道を以て、民を誣<sup>あやむ</sup>ぎ衆を惑わす者は、これを禁ず。違ひし者は重くこれを罪す。寺觀に在る者は、罪、主守に及ぶ。外に居る者は、所在の有司、これを察せよ。

【解説】 内容的には既出の一〇一三條と關係する。主守は寺觀を管轄する監臨主守、具體的には宣政院の官員か。この寺觀以下も本來は注記であろう。なお經文偽造の一例が『通制條格』卷二八、雜令の妖書妖言に載せられている。

一〇一九 諸て、禁書を妄言する者は、徒。

【解説】 妄言の内容がいま一つ明確でないし、徒罪をどのように具體的に科罪するかも不詳。

一〇二〇 諸て、陰陽家者流の、輒りに人の爲めに、燈を燃して星を祭<sup>(1)</sup>り、人心を蠱惑する者は、これを禁ず。

(1) 『元典章』卷三十、禮部三、禮制、祭祀の禁祭星に同趣旨の文がある。燃燈はそこでは點照になっている。

一〇二二 諸て、星變・災祥を妄言すれば、杖一百七。

一〇二三 諸て、陰陽法師、輒に、諸王・公主・駙馬の家に入る者は、これを禁<sup>(1)</sup>ず。

(1) 『元典章』卷三二、禮部五、學校、陰陽學の禁約陰陽人、『通制條格』卷二八、雜令、各位下陰陽人に同文がある。

一〇二三 諸て、陰陽の相法・書符・呪水、凡そ異端の術を以って、人聽を惑亂し、仕進を希求する者は、これを禁ず。違ひし者は、これを罪す。

【解説】 異民族支配下の元では、官途への道も、從來とは異なる部分が少くなかった。前條と併せ考えると、本條の希求仕進にも、特別な意味を持たせ得る。

一〇二四 諸て、匿名の文書を寫し、言う所重き者は、死に處す。輕き者は流。その妻子を沒し、捕獲人に與えて賞に充つ。事主の自獲せし者は賞<sup>(1)</sup>さず。

(1) 『元典章』卷五三、刑部十五、訴訟、禁例の又禁撤無頭文字に同文が見える。先の一〇一九條で徒、ここでは流と一字で刑罰を片付けているのは、直譯體を漢文に直す場合にあらわれる。本條の處死も直譯體では敲<sup>(1)</sup>了とあつて杖殺を思わせる(川村康「宋代杖殺考」『東洋文化研究所紀要』一二〇参照)。

【解説】 なお、匿名告事は『唐律』三五一條、鬪訟律以來重く罪せられることは言うまでもなからう。以下四條は匿名告發とかかわる。

一〇二五 諸て、匿名の文字を寫し、人の私罪を誣<sup>(1)</sup>き、官事に涉らざる者は、杖七十七。

(1) 一〇二七條を参照。

一〇二六 諸て、匿名の文字を人の家に投じ、錢物を脅取する者は、杖八十七。元籍に發<sup>(1)</sup>す。

(1) 元籍に發すとは、『元典章』などでは、より丁寧に「元籍に發付して、親を召し、完聚せしむ」のように書かれる場合が多い。親族に責任保證させる意だが、どうしてここだけ特に付記されるかは判らない。やはり具體的事件の處理の一文がそのま

ま残されているのか。

一〇二七 諸て、匿名の文書を見て、隨時敗獲するに非ざる者は、即ちに燒毀を與す。輒に官に以聞する者は、犯人より二等を減じて罪を論ず。凡そ匿名の文字、その言官府に及ばず、止だ人の罪を許かんと欲する者は、許く所の如く論ず。

(1) 『元典章』卷五三、刑部十五、訴訟、禁例の又禁撤無頭文字に載せる、至大四年の登賣位の詔書的一款に、「諸投寫匿名文字、隨事敗獲者、依條處斷。得書者、即便禁毀。將送入官者、減犯人罪二等。官司受而爲理者、減一等」とある。これは本條と全く同じ事を言つたものだろうが、さすれば「見」と「非」の字の理解に苦しむ。暫く『元史』本文のままにしておくが、『元典章』の文章が正しいのであらう。

(2) 凡そ以下は前々條のくり返しであると同時に、誣告反坐の原則をつけ加える。ここも他の事例と同様に、凡そ以下は注釋と考えてよい。

一〇二八 諸て、民間の子弟、生業に務めず、輒に城市・坊鎮に於て、詞話を演唱し、雜戲を教習し、衆を聚め淫誑するは、並びにこれを禁治す。

(1) 『通制條格』卷二七、雜令の撤詞では、「正色の樂人以外の、

農民・市戸・良家の子弟が本業に務めず」とあつて理解し易い。

(2) 注(1)と同文が、『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、雜禁の禁學散樂詞傳にもあり、習學散樂、般說詞話となつてゐるが、雜戲以下は見えない。

【解説】 以下四條は民間の娛樂と關係する條文。風俗や政治批判に一定の枠をはめようとする意圖が窺える。

一〇二九 諸て、禽蛇・傀儡を弄し、藏擲・撒鉞、花錢を倒し、魚鼓を撃ち、人を惑わし衆を聚め、以つて偽藥を賣る者は、これを禁す。違ひし者は、重くこれを罪す。

(1) 藏擲は手品を使う、撒鉞はシンバルをうち鳴らす。

(2) この部分の意味不詳。

(3) 魚鼓は魚形をした木魚。

(4) 『元典章』卷五七、諸禁、雜禁の禁弄蛇蟲鳴貨郎、『通制條格』卷二一、醫藥、假醫の元貞二年七月條。

一〇三〇 諸て、本を棄て末を逐い、角觥の戲を習用し、攻刺の術を學ぶ者、師・弟子並びに杖七十七。

(1) 漢代以來あるすもう。

(2) 『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、雜禁の禁治習學槍棒。そこでは攻刺の術は弄槍棒、師弟子は教師と習學人になつてい

る。

一〇三一 諸て、詞曲を亂製し、議議を爲す者は、流。<sup>(1)</sup>

(1) この條も、何か具體的な事件があり、その一部だけを抽出したものと想定される。一〇二四條でも觸れたように、原文は直譯體であつたろう。

一〇三二 諸て、錢物を賭博する者は、杖七十七。錢物は官に沒す。

官有る者は見任を罷め、期年の後、雜職内に敘す。<sup>(1)</sup> 博房を開張するの家、罪亦たかくの如くす。再犯は徒一年を加う。應に捕うべきに故縱すれば、笞四十七。財を受けし者は同罪。有司縱いままに平人及び在前同賭の人を攀指せしむれば、罪官吏に及ぶ。<sup>(2)</sup> 飲食を賭せる者は坐せず。

(1) 此の部分は『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、禁賭博の職官賭博斷罷見任の條に同じ。雜職はすでに何回か出たが、親民官に對する下級財務擔當の監臨物務官。

(2) 賭博人たちを密告、風聞で多數檢舉することは逆に弊害ももたらした。『元典章』卷五七、刑部十九、雜禁、禁賭博の禁賭博攀指に、本條とつながる記述がある。

【解説】この三條は賭博の禁令。賭博については、『唐律』四〇二條、雜律、『明律』四〇二條、刑律、雜犯の賭博にそれぞれ條文が

ある。本條の末尾に見える、飲食を賭する者は、論する勿れの一文は唐律以來繼承されている。

一〇三三 諸て、錢物を賭博し、同賭の人、自首せし者は、論する勿れ。

【解説】こうした條も、本來なら名例律で規定されている以上、必要のはずであるが、やはり具體的案件からピック・アップしたため、残されたものであろう。

一〇三四 諸て、賭博、事の發露せしに因り、攤場・賭具を追到し、贓證明白なる者は、<sup>(1)</sup> 卽に本法を以て科論し、展轉・攀指を以て革撥せず。<sup>(2)</sup>

(1) 攤場は賭場。

(2) 上記の一〇三二條。

(3) 革撥はあらためてとりあげる。展轉・攀指については、一〇三三條の注(2)の『元典章』を参照。

一〇三五 諸て、<sup>(1)</sup> 故らに牛馬を縱ち、田禾を食踐せしむる者は、これを禁ず。

(1) 『元典章』卷二三、戸部九、農桑、勸課の農桑、至大三年二月の聖旨の一項にこの禁令がみえる。



【解説】 以下十條ばかりは、軍隊や有力者が、圍獵その他で人民の生業を阻碍することへの禁令が列記されている。

一〇三六 諸て、所在に鎮守するの蒙古・漢軍、各々營所を立て、故無くして輒に人家に入り、酒食を求索し、及び頭匹を縦ち、田禾・桑果を食踐せしむれば、罪は主將に及ぶ<sup>(1)</sup>。

(1) 『通制條格』卷二八、雜令、擾民にある。至元十六年六月の、四川に行省を立てる時の聖旨條畫内的一款。

一〇三七 諸て、藩王<sup>(1)</sup>、都省<sup>(2)</sup>の文書無く、輒に各處に於て差發を徵收し、飲食・草料を強取して、民害を爲す者は、これを禁ず<sup>(3)</sup>。

(1) 普通には、諸王・公主・駙馬と連稱されるモンゴル特權階級。

(2) 中書省。

(3) 『通制條格』卷二七、雜令、諸王經行科斂に本條の具體例が詳しく述べられている。

一〇三八 諸て、虎豹害<sup>(1)</sup>を爲す處あれば、有司は、官兵及び打捕の人を嚴勸し、多方これを捕えしむ。その應に捕うべからざるの人、自ら能く機を設けて捕獲する者、皮・肉は官に納むるを須<sup>(2)</sup>いず。就きて以って賞に充つ<sup>(3)</sup>。

(1) 虎豹の豹は、『元典章』では獸となり、『通制條格』では省く。

(2) 『元典章』卷三八、兵部五、捕獵、圍獵の捕虎皮肉充賞。『通制條格』卷二十、賞令の捕虎も同じ。兩者とも、不係應捕之人つまり、本來武器を持たぬ一般人の次の、「自ら能く」が「自ら願うに」なっている。

一〇三九 諸て、職官の、例に違<sup>(1)</sup>いて鷹を放てば、當日服用せし所の鞍馬・衣物を追奪し、官に没す<sup>(2)</sup>。

(1) 次注の『元典章』によれば、この場合は正月一日以降の飛放の意。なお禁限は七月二十日までである。

(2) 『元典章』卷三八、兵部五、捕獵、飛放の禁約飛放。鞍馬、衣物だけでなく、弓箭や鷹犬も沒收の対象とされる。

一〇四〇 諸て、各官に撥する所の圍獵の山場<sup>(1)</sup>、竝びに民の樵採を禁する母れ。違<sup>(2)</sup>いし者は、これを治す<sup>(3)</sup>。

(1) 一〇〇七條を參看。

(2) 『通制條格』卷二七、雜令、山場の至大二年の尙書省の奏に對する聖旨。

一〇四一 諸て、年穀登<sup>(1)</sup>らず、人民愁困すれば、諸王・達官、應に圍獵に出すべき者、並びにこれを禁止す。

【解説】 諸王・達官のほとんどはモンゴル人だったろうから、まさ

しく元代的禁令の典型といえよう。

一〇四二 諸て、田禾いまだ收せざれば、圍獵を縦にする母れ。<sup>(1)</sup> 北耕種せざるの地<sup>(2)</sup>に於て圍獵する者は、聽す。

(1) 『元典章』卷三八、兵部五、捕獵、飛放の禁擾百姓などに參考記事がある。

(2) 長城線以北の不耕地。迤北と不耕の二つではないであろう。

【解説】 遊牧・狩獵民族が中國のような農業國家に入つて來た時に起る、最も普通なトラブルに對する大まかな禁令。

一〇四三 諸て、軍人財を受け、火印を偽造し、所管の官馬を將つて、盜換して人に與う者は、杖九十七。贓を追し、官に沒す。

【解説】 これも馬が特に重要であつたモンゴル時代であればこそ見られる禁令。主體は軍人で、偽の燒印をおした官馬の不法拂い下げ。

一〇四四 諸て、年穀登らず、百姓饑乏し、禁地の野獸に遇い、搏してこれ<sup>(1)</sup>を食う者、輒りに沒入<sup>(2)</sup>れる母れ。

(1) 『通制條格』卷二八、雜令、圍獵に見える至元二十六年十二月の事例をもとにした禁令。この場合の禁地は、檀州すなわち現在の北京の北方一帯の山後禁地を指していた。

(2) 百姓たちの手にした獲物を沒收。

【解説】 これまた特殊な情況下の問題で、だいいち、禁地すなわち皇帝や諸王たちのお狩場は限定された地域にしかない。

一〇四五 諸て、打捕鷹房官<sup>(1)</sup>、合に御膳に進むべき野物を以て、賣價・自私せる者は、贓を計り、枉法を以て論ず。除名して敘せず。

(1) 打捕・鷹房など狩獵にかかわる特殊戸計を統轄する役所、たとえば某々處打捕鷹房總管府などが各地に設置されていたが、その官員。一七四條注(3)を參照。『元史』卷一〇一、兵志の鷹房捕獵も參考になろう。

【解説】 これもモンゴルの禁令。皇帝の御膳の物の横流しであるから、中國的に言へば、監臨枉法、除名不叙の重刑で處罰される。

一〇四六 諸て、舟車の靡、器服の奇、方面の大臣、錫貢にあらざれば、擅に進むるを得ず。

【解説】 この一條は、前後の禁令と全く無關係におかれている。方面の大臣は、地方の長官、錫貢は『書經』禹貢に顔をみせる古めかしい用語。地方長官が轉任で皇帝に挨拶・報告に來る時の特産物貢納。

一〇四七 諸て、闕遺<sup>(1)</sup>の人口、監<sup>(2)</sup>に到れば、即<sup>(3)</sup>に稱せし所の籍貫に

移し、主を召して識認せしむ。半年の上、主の識認する者無ければ、匹配して戸と爲し、有司に付して差に當つ。殘疾・老病は給するに文引を以てし、縦ちてこれを遣る。頭匹、主の識認有る者は、已に用いし草料・價錢を徵還し、然る後、主に給す。主の識認無ければ、その毛齒を籍して、これを收養せしむ。

(1) 闕遺については、三八四條とその注(2)を参照されたい。

(2) 元代の特殊官廳である闕遺監。

(3) 移は身柄とその住んでいた場所に移送する意味にもとれるが、次注の『通制條格』には「取問各人來歴根因・住貫去處、行移召主識認」とあるから、移文ととておく。

(4) 本條は『通制條格』卷二八、雜令の闕遺のうち、皇慶五年五月に、闕遺監が提出した改革案のうち、認可された内容の骨子である。そこでは本條の内容が五項目に分けられ、原案と決定が詳細に述べられている。

【解説】闕遺は『唐律』以來、遺失物が原意であるが、元ではその特別な性格によって家畜乃至奴婢の、主人の許を離れて放浪その他所屬のきまらぬ物を指す。これは少くない數と思われ、不蘭奚あるいは李蘭奚として、しばしば文獻に登場する。『元典章』卷五六、刑部十八、闕遺、李蘭奚の項、岡本敏二「元代の奴隸制について」(『史學研究』六六、一九六八)などを参照。

一〇四八 諸て、闕遺の奴婢、私相に配合し、子女を生育すといえども、主の識認する有る者は、各々その主に歸し、本主無き者は、官、收係を與す。

(1) 本條に適合する史料はさしあたり檢索し得ないが、李蘭奚として官が管轄し、一定年限ののち戸と爲して有司に付し差に當てる。

一〇四九 諸て、闕遺の鷹犬を隱藏する者は、笞三十七、その家財の半を沒す。その闕遺の鷹犬を收拾する人、因りて以て民害を爲す者は、これを罪す。

(1) 『元典章』卷五六、刑部十八、闕遺、李蘭奚の鷹犬。直譯體を漢文の條文に直す一例。

一〇五〇 諸て、宿藏の物を鋤獲するに、他人の地内に在る者は、地主と中分す。官地内に在る者は、一半は官に納む。己の地内に在る者は、即ち業主に同じ。古器・珍寶の物を得し者は、官に聞して進獻せしめ、約量して價を給す。若し詐偽隱匿有れば、罪を斷じ、追沒す。

(1) 『元典章』卷五六、刑部十八、闕遺、宿藏の得宿藏物地主停分。『通制條格』卷二八、雜令、地内宿藏の、いずれも至元十三年閏三月の文章と全體が同じ。

(2) 前注の二書では、いずれも、「若し官私田宅を租佃する者、例として業主に同じ」と注記のように書かれており、この方が判りやすい。

【解説】 現代でも、いわゆる窖藏の瓷器、銅錢、金銀などが出土し、『文物』等の紙上を賑わせている。『唐律』四四七條、雜律以來、發見者と地主中分が原則である。

一〇五一 諸て、監臨官の、輒に民に舉貸する者、取・與俱にこれを罪す。

(1) 『通制條格』卷二八、雜令、監臨營利の至元十八年の條。

【解説】 本來官員のこうした行爲は表向きは嚴禁されている。しかし、前注の『通制條格』の具體例から推すと、それは單に官員の個人的行爲ではなく、いわば構造的かつ非合理的手段で行われていたと考えられる。なお宋代の例については、柳田節子「宋代官僚と商業行為」(『宋元社會經濟史研究』 創文社 一九九五所收)を參照。以下何條か、官員の營利を問題とした禁令が續く。

一〇五二 諸て、錢穀を稱貸するに、年月多しといえども、一本一息を過ぎざれ。<sup>(1)</sup> 輒に人より贏<sup>あま</sup>を取り、或は契券を轉換<sup>(2)</sup>し、息上息を加え、或は人の牛馬・財産を占し、人の子女を奪いて以て奴婢と爲す者有れば、重くこれに罪を加う。なお多取の息を償わし

め、その本・息は官に沒す。

(1) 利息總計は元本の一倍を以て限度とすることは歷代の基本原則。なお本條の内容は、仁井田陞『中國法制史研究』土地法・取引法(東京大學出版會 一九六〇)の五七四頁以下に詳説されている。

(2) 『通制條格』卷二八、雜例、違例取息では至元三年二月にこの禁令が出されており、轉換を倒換に作る、いずれにせよ證文の書きかえ。

一〇五三 諸て、典質に、正庫<sup>(1)</sup>を設けず、信帖<sup>(2)</sup>を立てず、例に違いて息を取る者は、これを禁す。

(1) 質種だけを收納しておく庫。いろいろ尤もらしい名稱がつけられる。前條注(1)の仁井田氏論考、五七五頁。

(2) 普通には解帖と言われる。いまで言えば質札。『通制條格』卷二七、雜令、解典。

一〇五四 諸て、關廂の店戶<sup>(1)</sup>、客旅を居停するに、知識する所にあらざれば、必ずその奉ずる所の官府の文引<sup>(2)</sup>を問う。但し疑うべき者有れば、容止するを得ず。違ひし者はこれを罪す。

(1) 關廂は現在でいうと城關、城市。農村で商人や旅人が宿泊する場所は、巡防の弓手の設けられた場所の村店に限られた(『元

典章』卷五一、刑部十三、諸盜、防盜の商賈於店止宿。

- (2) 旅行者は今でいうパスポート、身分照明(公引あるいは文引)を携帯していなければならなかった(『元典章』卷五一、刑部十三、諸盜、防盜の路人驗引放行)。

一〇五五 諸て、官戸行錢<sup>(1)</sup>の商船、輒に旗號を豎て、弓箭・鑼鼓を置き、錢主の衙門の職名を掲げ、江河を往來する者、これを禁ず。

- (1) 官が資金を出している。これが本條の問題點である。

(2) 『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、雜禁の禁治鑼鼓。

【解説】 注(2)の『元典章』は、諸王の名字を掲げる事例だが、宋代以來、官員個人もしくは役所自身が、回易などと稱して營利事業を行い、商税の免除、あるいは運河航行の利便のため、日常的にこうした違法交爲を行っていた。元代では幹脱商人や投下諸王のそれが目立つ。

一〇五六 諸て、經商<sup>(1)</sup>、及び事に因りて外に出ずるには、必ず有司より隣保に會問し、文引を出給す<sup>(2)</sup>。違いし者は究治す。

- (1) 經商は商人、あるいは商賈をすること。

(2) 『元典章』卷五三、刑部十五、訴訟、聽訟の軍官不許接受民詞に、諸人の告給文引は總管府より依理施行とある。『通制條格』卷十八、關市、濫給文引をも參看。

一〇五七 諸て、投下、并びに其餘の印信有るの衙門<sup>(1)</sup>、並びに文引を濫給するを得ず。

- (1) 前條注(2)の『通制條格』至元二十三年十二月條にその具體的記述がある。同じ文章は『元典章』卷九、吏部三、官制、投下の有司衙門給引にも載っている。

一〇五八 諸て、有毒の藥<sup>(1)</sup>、醫人に非ずして、輒に相い賣買し、人命を傷つくるを致す者は、買者・賣者、皆死に處す。曾って人を傷けざる者は、各々杖六十七。仍お至元鈔一百兩を追し、告人に與えて賞に充つ。醫術に通ぜず、偽藥を製合し、市井にて貨買する者は、これを禁ず<sup>(2)</sup>。

- (1) 『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁の禁治毒藥には、禁じられる毒藥として、砒霜、巴豆、烏頭、附子など十二種類の名が挙げられている。

(2) 『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、禁毒藥の禁治賣毒藥が全體同文。醫術以下は全く獨立した内容で、別出すべきか。

一〇五九 諸て、下海の使臣、及び舶商、輒に中國の生口・寶貨・戎器・馬匹を以って、外番に遺る者、廉訪司よりこれを察す。

【解説】 主として海外貿易の規則である「市舶條例」にも定められている一條。元代では主に金銀、人口、弓箭、軍器、馬疋などが禁

制品に該當する。『元典章』卷五七、刑部十九、諸禁、雜禁の禁下番人口等物を參照。この二條は市舶にかかわる禁令。

一〇六〇 諸て、商賣の、金銀を收買し、下番する者は、これを禁ず。違ひし者は、これを罪す<sup>(1)</sup>。

(1) 『元典章』卷二二、戸部八、課程、市舶の市舶則法二十三條の一條にもとづく。『通制條格』卷十八、關市の市舶、同卷二十七、雜令、金銀とも關連する。

一〇六一 諸て、海濱の豪民、輒に番商と交通し、銅錢を貿易して下海せしむる者は、杖一百七。

【解説】 銅錢下海すなわち銅錢の海外流出は、宋代から重要な問題として扱われ、『慶元條法事類』卷二九、權禁門の銅錢金銀出界と銅錢下海には詳密な條文が掲載されている。本條の處罰はそれらにくらべて極度に單純である。恐らく海濱の戸が、限られた私の範圍で銅錢を番商に渡す行爲のみを對象にしているのであろう。

一〇六二 諸て、倡妓の家、生む所の男女は、毎季次月十日を過ぎず、その數を會し、以って中書省に上す。いまだ生まれざるに、その胎を墮し、已に生れて、輒にその命を残する者は、これを禁ず<sup>(1)</sup>。

(1) 『通制條格』卷四、戸令の娼女妊孕がやや關係しよう。こうして生まれた子女がどのような身分になるかは判然としないが、一部は良民と見做された形跡もある。

一〇六三 諸て、倡妓の家、輒に良人を買いて倡と爲すに、有司審らかにせず、公據を濫給し、稅務も憑る無く、輒に印稅を與<sup>よ</sup>すは、並びにこれを嚴禁す。違ひし者はこれを痛繩す。

【解説】 本條は『通制條格』卷四、戸令の驅婦爲娼と深くかわっている。すなわち、娼婦になり得るケースは、犯姦の罪人、夫家の棄出、倡優親屬の希望などの場合などで、良人を贖・典雇して娼婦にすることは禁止される。本條はそれに違反した時の禁令で、典雇の時でも、牙保人を通して、稅務に買賣・契約の商稅(牙稅)を支拂うから、それを見過<sup>み</sup>ごした官員も當然罰せられるということになる。

(梅原 郁)

## 雜 犯

一〇六四 諸て、鬭爭の折辨<sup>(2)</sup>、輒に大名字を提する者は、これを罪す<sup>(1)</sup>。

(1) 『元典章』卷五三、折證、大名字折證的休提、『通制條格』卷

八、臣子避忌が同内容である。

- (2) 『元典章』『通制條格』ともに「折證」に作る。折證は『吏學指南』に「分剖曲直曰折、指明事始曰證」とある。裁判における辨明・辨論を折辨と言うのであろう。

- (3) 『元典章』には、「上位的大名字」、「通制條格」には「上位的名字」の語が見え、また「奉聖旨、各處行與文字、犯着咱每名字的有呵、教更改了著。如今皇太子根底啓知有」という一文がある。「提大名字」とは、皇帝・皇太子の本名に當る言葉を發し、文字を記すことを指すと考えられる。

- (4) 『元典章』には「那般胡提著道的人、口裏填土者」とあり、口中に土を詰め込むこととわかる。

【解説】 本條以下は、雜犯と稱する種々雜多な規定が続くが、『元典章』卷五四、雜犯一や卷五五、雜犯二、『明律』卷二六・刑律・雜犯の各條文には含まれないものもある。『唐律』卷二六及び二七の雜律とも重ならない。

- 一〇六五 諸て、職官、公に因りて失口亂言する者は、答二十七。

【解説】 官員が公務の上で、不穩當で禮を失した言葉を發した場合の規定。

- 一〇六六 諸て、快意の中、或は酒後、及び害風・狂疾にて、失口

亂言するも、別に情理なき者<sup>(1)</sup>は、罪を免す。

- (1) 「別無情理者」の「情理」は、意圖・思慮の意であらう。特に思惑や考えがあつてのことではないならば、の意。

【解説】 氣持が高揚している時や、飲酒時、あるいは精神病のため、不穩當な發言があつた場合、特に意圖あつてのことでないならば、罪に當らない、という規定。以上三條は、いずれも言葉・發言に關してのものである。

- 一〇六七 諸て、惡少・無賴<sup>(1)</sup>、朋黨を結聚し、善良を陵轢<sup>(2)</sup>して、故らに鬪爭し、相い與に羅織<sup>(3)</sup>する者は、木偶と連鎖して、街衢を巡行せしめ、後犯の人を得て、然る後に決遣<sup>(4)</sup>す。

- (1) 『吏學指南』に「惡少。通鑑注、閭閻無賴年少者。又非良善之稱」とあり、『史文正續輯覽』に「無籍之徒。無籍貫之人、即無賴之徒也」とあり、『六部成語註解』に「惡少凶頑。奸頑凶惡之無賴少年也」とある。品行の良くない青少年・無賴漢を言う。

- (2) 善良な人々を欺侮・壓迫・侵害すること。

- (3) 『吏學指南』に「唐酷吏、網羅無辜、將囚倒懸石鎚、以醋灌鼻、鐵圈束首、火鑊鐵籠、逼迫服罪、此等之名、皆曰羅織、謂本罪之外、非理凌虐也」とある。無實の人を、拷問等様々な手段でもって罪に陥し入れることを羅織と言う。

- (4) 木偶人形と鎖でつなぎ、街中を見せしめに巡り歩かせること。  
 (5) 本條にあるような行爲をした惡少・無賴の者達を捕えると、木の人形と鎖でつないで街中を巡り歩かせる。後に別の惡少・無賴を捕えると、先に捕えられ人形と共に巡行させられた惡少・無賴は罪を斷じて刑を執行する意であらう。

一〇六八 諸て、惡少、白晝に刀劍を持し、都市の中において、本部の官長を殺さんと欲する者は、杖九十七。

- (1) 『元典章』卷四四、品官相殿、毆傷同僚官では、經歷に對し、宣慰司副使を「官長」と稱している。また、『吏學指南』には「官長。謂一方一所官之通稱也」と見える。本條の「本部官長」は、これらと異なり、路・府・州・縣の長官を指すのではなからうか。

一〇六九 諸て、無賴の軍人、輒に財を受けて人を毆り、因りて錢物を奪取する者は、杖八十七、紅泥粉壁して過をその門に識し、徒を免ず。

- (1) 『元典章』卷三九、遷徙、豪霸兇徒遷徙、同じく卷五七、禁豪霸、豪霸紅粉壁迤北屯種、同じく新集刑部、刑禁、禁姦惡、把持人再犯稟例遷徙、『通制條格』卷二八、豪霸遷徙がやや關連する。

【解説】 軍人の犯罪であるためか、量刑が一般の強盜——『元典章』卷四九、諸盜一の冒頭の表——よりも相當輕くなっているのが特徴である。

一〇七〇 諸て、先に過犯を作し、曾經て紅泥粉壁し、後犯いまだ應に遷徙すべからざる者は、元置の紅泥粉壁において、過名を添録す。

- (1) 前條一〇六九條注(1)に舉げた史料が参考となるが、本條と直接關連するものはまだ見出し得ていない。

(2) 遷徙とは、流刑の意である。前條注(1)に舉げた史料等では、「再犯痛行斷罪、移徙」「其有不悛再犯者、加等斷罪、遷徙北地面屯種」「如是不悛再犯、加等斷罪、移徙邊遠」「遷徙遼陽肇州屯種」「遷徙迤北地面屯種」と見える。これらから判斷すると、肇州等遠邊で屯田させることが遷徙であると思われる。

四條注(5)(6) 参照。

【解説】 先に紅泥粉壁の刑を受けた者が、再び犯罪を行ったが、遷徙の刑に當てるべきでない場合、先の白壁に紅泥で今度の犯罪の名を書き加えるという規定。

一〇七一 諸て、豪右、權を官府に移し、威を鄉井に行い、淫暴貪虐にして、累犯して悛めざる者は、遠惡の地に徙して屯種せしむ。



(1) 一〇六九條注(1) 参照。

(2) 豪霸、豪強、豪民等様々に呼ばれる地方の有力者、勢力ある家・人物を指す。

(3) 官司に影響力を及ぼし、故郷や本居の地方で權勢をふるうこと。

一〇七二 諸て、頻りに過惡を犯し、果斷するも改めざる者は、遠きに流す。

【解説】 極めて抽象的な一般規定である。笞・杖・徒刑相當の罪を何度も繰り返し、その度に斷罪して刑の執行を受けているものの、回悛の情が見られない者は流刑に處すというもの。

一〇七三 諸て、兇人<sup>(1)</sup>、良善を殘害し、強いて男子を將て去勢して、人後を絶滅せしむるも、幸いに生免を獲<sup>(2)</sup>る者は、杖一百七、遠きに流す。

(1) 兇人とは、單に兇惡なる人を言うのではなく、『明律國字解』に「兇徒と云は、兇器を持して惡事をするものを云なり」とあるようなものを指すのであろう。

(2) 危害を加えられたが死には至らなかった、との意。

一〇七四 諸て、貴勢の家、奴隸犯ありて、輒りに鐵枷を私置し、

釘頂禁錮<sup>(1)</sup>し、及び擅にその面に刺<sup>(2)</sup>する者は、これを禁ず。

(1) 『元典章』卷五七、禁豪霸、禁富勢擅錮奴隸、『通制條格』卷二八、刺驅面が同内容である。

(2) 『元典章』では「在都富勢之家」となっている。中央の高官や諸王等に連なる、富裕かつ權勢ある家の意であらう。

(3) 鐵のくびかせを私有し、奴隸の首につけて身體を拘束すること。

【解説】 以下三條は、いずれも私家における奴隸虐待を禁止したものであり、罪を犯したり、逃亡した奴隸であっても、また顯貴・富裕の家であっても、私的制裁は認めないという規定である。

一〇七五 諸て、逃奴を獲えて、輒に刺面・劓鼻<sup>(1)</sup>し、非理に殘苦する者は、これを禁ず。

(1) 鼻をそぎ落とすこと。

一〇七六 諸て、故なくして、擅にその奴に刺する者は、杖六十七。

一〇七七 諸て、囁<sup>(1)</sup>、回回、民の害を爲す者は、所在の有司從り禁治す。

(1) 四川・雲南方面に分布する、チベット・ビルマ語族の少數民俗。羅羅・僛僛、僛僛等とも記される。

## 捕 亡

一〇七八 諸て、盜を失し、捕盜官、限を立てて捕盜せず、却て他戸をして事主の財物を賠償せしむる者は、罰俸兩月、仍お限を立てて追捕す。

(1) 『元典章』卷四九、強竊盜、強竊盜賊通例の第十一條、同じく卷五一、失盜、失過盜賊賞罰がやや關連する。

(2) 強竊盜の賊徒を取り逃がし、捕捉できないこと。

(3) 縣尉と巡檢を言い、應捕官とも言う。なお、捕手は弓兵と言い、「捕盜官兵」のうちの「兵」に當る。

(4) 一カ月ごとに一限を立て、全部で三限三カ月である。

(5) 強竊盜の被害者。

(6) 二カ月間の俸給停止處分。

【解説】 以下一〇八六條まで、盜賊の捕獲や囚人の管理に關する規定であるが、捕盜については、すでに二七八條以下に見えている。

本條は、『唐律』卷二八・捕亡一・將吏捕罪人逗留不行、『明律』卷二七・刑律・應捕人追捕罪人(四一一)が關連條文である。

一〇七九 諸て、強盜人を殺し、三限獲えずして、赦に會えば、捕盜官の合に得べきの罪罰は革撥するも、仍お捕盜せしむ。任滿つるも獲えざれば、解由内に通行開寫し、例に依りて黜降す。

(1) 『元典章』卷五一、失盜、格前失盜革撥が同内容である。

(2) 恩赦により罪がゆるされ、刑罰が免除されること。

(3) 巡檢・縣尉が、三限内に強盜殺人犯を捕えることができず、赦に遇つて罪をゆるされたが、その後當該の巡檢・縣尉が在職中に犯人を捕獲できなかった場合は、解由にその事を書き記すということ。

(4) 『元典章』卷四九、強竊盜、強竊盜賊通例の第十一條に「其捕盜官、任滿、通行照勘、如不獲強盜三起・竊盜五起、各添一資歷、不獲強盜五起・竊盜十起、各降一等」とある(同じく卷五一、失盜、失盜添資歷等及び失盜解由開寫を參照)。なおこの「依例黜降」の規定は、同じく卷五一、失盜、格前失盜革撥の延祐三年六月條では「依例革撥」と改められている。

一〇八〇 諸て、他境の盜、境に入りて逃藏するに、捕盜官、輒に彼の疆・此の界を分ち、即ちに捕捉せざる者は、答四十七、職を解きて別敘し、過を記す。

(1) 『元典章』卷五一、捕盜、捕盜勿以疆界が關連條文である。

【解説】 他地域で強竊盜を犯した賊徒が、自分の管轄區域内へ逃げ込んで來た場合、捕盜官は逡巡することなく、即ちに追捕しなくてはならないという規定。

一〇八一 諸て、已に流に斷ぜられし囚、禁に在りていまだ發せざるに、反獄<sup>(1)</sup>して禁子<sup>(2)</sup>を毆傷し、已に逃げて復た獲えらるる者は、死に處す。いまだ禁を出でざる者は、杖一百七、已に流を擬したる所に發す<sup>(1)</sup>。

(1) 既に流刑と判決が下された犯人が、流刑地へ出發する以前、獄に身柄を拘束されている時に、の意。

(2) 『明律國字解』に「反獄とは、獄囚が獄卒を殺して獄を出るを云」とある。

(3) 獄卒、牢屋番のこと。

(4) 當初の判決で流刑地に指定された地方に送る意。

【解説】『唐律』卷二八・捕亡二五・被囚禁拒捍走、『明律』卷二七・刑律・獄囚脫監及反獄在逃(四一三)がほぼ同様の内容であるが、「已斷流囚」という限定があるのが本條の特徴である。以下三條は、いずれも囚人の逃亡に關してのものである。

一〇八二 諸て、囚徒を解發して、州縣を經過し止宿するに、牢房に寄收せず、輒に逆旅において監繫し、以て脫監<sup>(1)</sup>・在逃を致す者は、長押官<sup>(2)</sup>、答二十七、役に還す<sup>(3)</sup>。防送者<sup>(4)</sup>、四十七、過を記す。

(1) 『明律國字解』に「脫監とは、牢やの門より逃出を云。越獄と云は、牢やのへいを越て逃去を云」とある。

(2) 囚人を護送する責任者の官員。

(3) 「還役」とは、長押官としての任を解かれ、本來の官司での職務に戻されることであらう。

(4) 護送中の囚人の警護を行う軍官。

【解説】護送中の囚人を、當該地方の獄に泊めず、民間の旅館に宿泊させたことにより、囚人の脫走という事態となった場合の、官員・軍官への處罰規定である。『唐律』卷二八・捕亡九・流徒囚役限內亡、『明律』卷二七・刑律・徒流人逃(四一四)が關連條文である。

一〇八三 諸て、囚徒、反獄して逃ぐれば、主守<sup>(2)</sup>は、犯人の罪より二等を減じ、提牢官<sup>(3)</sup>は、また主守より四等を減す。隨時捉獲して、半ば以上に及ぶ者は、罰俸一月。

(1) 『元典章』卷五五、縱囚、禁子受錢縱囚在逃が關連條文である。

(2) 禁子、獄子を指す。三三七條注(1)参照。

(3) 堤控牢獄官を指す。堤控牢獄官は、路・府・州の正官もしくは首領官が一カ月ずつ交替で充てられ、司獄とともに獄を管轄する。宮崎前掲論文一六二頁参照。

【解説】『唐律』卷二八・捕亡九・流徒囚役限內亡、『明律』卷二七・刑律・主守不覺失囚(四一六)が關連條文である。

一〇八四 諸て、奴婢、主に背きて逃ぐるは、杖七十七。誘引・

竊藏<sup>(1)</sup>する者は、六十七。鄰人・社長・坊里正<sup>(2)</sup>、知りて首捕せざる者は、笞三十七。關議<sup>(4)</sup>の應捕人、賊を受けて脱放<sup>(5)</sup>する者は、枉法を以て論す。寺觀・軍營・勢家影蔽<sup>(6)</sup>する、及び投下冒收して戸と爲す者は、藏匿<sup>(7)</sup>に依りて論す。自首する者は、罪を免す。

(1) 奴婢を主人のもとから誘い出し逃亡させたり、身柄をかくまうこと。

(2) 七五三條注(3)(4) 参照。

(3) 首告と捕獲。告獲とも言う。

(4) 關所。

(5) 『明律國字解』に「脱放は、からめとりたるをにがすことなり」とある。捕えた逃亡奴婢を(錢物を受け取って)故意に解き放ち逃がすこと。

(6) 逃亡奴婢をかくまい庇護下に入れること。

(7) 逃亡奴婢の姓名をいつわって、自領内の民戸として登録すること。

(8) 『明律國字解』に「藏匿は、惡人罪人をかくし置なり」とある。

(9) 「自首者免罪」に該当するのは、寺觀・軍營・勢家・投下である。

【解説】『唐律』卷二八・捕亡一三・官戸奴婢亡が關連條文であるが、『明律』では該當する條文は見出せない。奴婢に關する規定、

諸軍や投下等が私的に人間を自己の管轄下に置くことを規制する條文が散見されるのも、本刑法志の特徴である。

一〇八五 諸て、逃奴を告獲する者は、將<sup>(1)</sup>つ所の財物内において、三分に一を取り、告獲人に付して賞に充つ。

(1) 『通制條格』卷二〇、獲逃驅が同内容である。

(2) 『通制條格』には「將拐帶的財物、三分内一分、與拿獲人充賞有來」とあることからすると、逃亡奴隸が捕えられた時に所持していた財物の意である。

一〇八六 諸て、逃奴、拒捕するも、曾て人命を致傷せざる者は、杖一百七。

## 恤刑

一〇八七 諸て、獄囚、必ず輕重處を異にし、男女室を異にし、參雜或る母れ。司獄<sup>(1)</sup>はその愼を致し、獄卒はその虐を去り、提牢官はその誠を盡す。

(1) 『元典章』卷四〇、繫獄、罪囚分別輕重が前半部と同内容である。

(2) 司獄は、路・府・州の獄を提控牢獄官とともに管轄する、肅

政廉訪司系統の官員である。

【解説】 獄に囚人を拘束して置く場合、犯した罪の輕重により、また男女によって、監禁の場所を別にするという規定。後半は、獄の管理監督に責任のある官員・胥吏に對しての訓戒である。本條以下は、獄中の囚人に對しての取り扱いに關しての規定が続く。「恤刑」は『六部成語註解』に「恤刑。用刑之際、有應加體恤者。如老病婦女之犯・大寒大暑之時是也」とあるような、囚人に恤みの心で接することが中心的な意味を占めており、加えて刑の執行に慎重を期すことも含んでいるように思われる。

一〇八八 諸て、在禁の囚徒、親屬の供給なく、或は親屬あるも貧にして給する能わざる者は、日ごとに倉米<sup>(2)</sup>一升を給す。三升の中、粟一升を給し<sup>(3)</sup>、もつて疾ある者に食せしむ。凡そ油炭・席薦の屬、各々時を以つて具<sup>そな</sup>う。その饑寒にして衣糧繼がず、疾患にして醫療時ならず、非理に死損するを致す者は、有司を罪に坐せしむ。

(1) 本條と内容的に類似する條文はいくつかあるが、それらを合わせても、本條全てに對應するわけではない。『元典章』卷四〇、繫獄、罪囚無親給糧、同じく罪囚燈油、同じく病囚醫人看治がほぼ前半をカバーし、同卷の提牢、究治死損罪囚が後半とかわる。

(2) 『元典章』罪囚無親給糧には、「獄囚、有親屬者、並食私糧、

無親屬者、官給每名日支米一升、於雀鼠耗内支破」とある。加耗米を、本條では倉米と言っているようである。

(3) 獄中の囚人に支給する食糧を、稻米<sup>2</sup>に對し粟米<sup>1</sup>の割合で給する意か。あるいは「粟」は「もみごめ」を指すのかも知れない。

【解説】 『唐律』卷二九・斷獄五・囚應給衣食醫藥而不給、『明律』卷二八・刑律・獄囚衣糧(四二五)が關連條文である。

一〇八九 諸て、各處の司獄司、囚徒を看守し、夜ごとに清油一斤を支す。

(1) 『元典章』卷四〇、繫獄、獄囚燈油が關係條文である。

一〇九〇 諸て、路・府・州・縣、但て停囚の去處は、鼠耗<sup>(1)</sup>糧の内より、囚糧を放支す。

(1) 『元典章』卷二一、倉庫、收糧鼠耗分例によれば、民田については税米一石につき五升を、官田については同じく三升五合を加耗米——目減り分をあらかじめ見込んだ加徴米——即ち鼠耗として徴收する規定であった。前々條注(2)参照。

【解説】 囚人の護送の際に、宿泊することになった路・府・州・縣の獄では、當該地方官司の加耗米からの食米を支給するという規定。

一〇九一 諸て、在禁の家屬なき囚徒、歲ごとに十二月より正月に至るまで、羊皮<sup>(2)</sup>を給して披蓋<sup>(3)</sup>・袴褌<sup>(4)</sup>と爲さしめ、及び薪草を暖匣・熏炕<sup>(5)</sup>の用と爲さしむ。

(1) 本條に完全に對應する史料は見出せないが、關連したものはある。『元典章』卷四〇、繫獄、罪囚暖匣、同じく罪囚衣絮。

(2) 『元典章』罪囚衣絮には、湖南・江西では罪囚の冬衣として「水絮紙」「土布」「氈布」が支給されているのが見える。「羊皮」の支給は、モンゴル人に對しての、あるいはモンゴル地域においてのことであろうか。

(3) 冬衣としての上着、あるいは就寢用の掛蒲團の上に重ねるおおいの類か。

(4) はかまとたび。

(5) 『元典章』罪囚暖匣には「冬則給以絮被暖匣。據諸處罪囚、禦寒紙被、暖匣柴薪、例皆有司應付」とある。本條の「薪草」のうち「草」は、『元典章』の「絮<sup>よわた</sup>」と同じく、匣床(柶牀)に拘束されている囚人に詰め物として與えるものであり、「薪」はそれを燃やして暖をとらせるためのものであろう。また「草」により暖めることを「暖匣」、「薪」により暖めることを「熏炕」と言うのであろう。匣床については、仁井田陞『補訂中國法制史研究 刑法』(東京大學出版會、一九五九、のち一九八〇に補訂して出版)六四八・六四九頁參照。

一〇九二 諸て、獄訟、聽候・歸對を必するの人あらば、召保して知在せしむ<sup>(2)</sup>。如し保識するなければ、有司糧を給して養濟し、民家に寄養するなかれ。

(1) 聽候は、『吏文正續輯覽』に「謂待候而聽其教令也」とある。

歸對は、歸問對證の意で、事件關係者を面對させて取調べに決着をつけること(七九條注(2)參照)。裁判において、判決を待つべき者や、對面審理の必要がある者があれば、の意。『研究譯註』が「必ず聽候歸對の人ありて」と訓讀し、「聽候歸對の人 いわゆる身柄引受け人をいう」と注するのは不適切。

(2) 召保は、『吏學指南』に「召保 謂安養聽候也」とある。身元引受を保證する者と呼ば出して保釋する意が召保である(高橋芳郎「梅原郁『名公書判清明集』訂誤」『名古屋大學東洋史研究報告』一二、一九八七、一二四頁上段)。知在は、『吏學指南』に「知在 謂常川存留也」とある。拘留して、その場に留めておく意が知在である(前掲高橋論文一一四頁上段參照)。身元引受人を出頭させ、彼の下に身柄を拘留する、の意。『研究譯註』が知在を「その場にふみ留まるの意」とするのは説明不足。

(3) 保識は、『六部成語註解』に「排門粉壁十家編爲一甲相互保識。每十家爲一甲、使其互相擔保認明來歷、……」とあるのが参考となる。身元引受人となる者がいなければ、の意。

【解説】裁判に際して、原告・被告・證人等を、縣城・州城等に出

頭させ、判決・處分が出るのを待機させたり、對面での審理を行う場合には、身元引受人の所で拘留する。身元引受人がいらない場合は、官司に拘留し、民家に宿泊してはならない、という規定。

一〇九三 諸て、流囚路に在らば、有司日ごとに米一升を給す。疾あらば、良醫に命じてこれを治せしめ、疾愈ゆれば、隨時に發遣す。

【解説】 流刑に斷ぜられて、流刑地へ護送途中の囚人に對しては、經路に當る路・府・州・縣から一人毎日米一升を食米として支給する。囚人が病氣になったら、適當な醫人に治療させ、病氣が治癒すれば再び護送を開始する、という規定。

一〇九四 諸て、獄醫は囚の司命なれば、必ず試して後にこれを用う。若し稱<sup>かな</sup>わざるあらば、掌醫及び提調官の罪を坐す<sup>(2)</sup>。

(1) 『元典章』卷三二、醫學、試驗獄醫が同内容である。

(2) 『元典章』には「差撥獄醫、合依所言試驗委用。如或不諳方脈、濫選醫工、官醫提領人等、量情科罪、提調官亦行究治。仍將濫選之人革去」とある。本條の「掌醫」は「官醫提領」を、「提調官」とは「提調刑獄官」を指す。

一〇九五 諸て、獄囚、病二分に至らば申報し、漸増して九分に至

らば、死證と爲す。若し、重を以て輕と爲し、急を以て緩と爲して、誤りて人命を傷つくる者は、これを究す。

(1) 『元典章』卷四〇、繫獄、罪囚患病分數が同内容である。

【解説】 本條の囚人が病氣になった時の「分數」に關しては審らかにし得ないところもあるが、注(1)に舉げた『元典章』からある程度は推測できる。今、當該史料の關係部分を提示する。「大徳四年二月、江西道廉訪司准瑞州路牒呈、……照得、……官醫提舉司會集高醫講究得、病囚初病作二分申報、增至七分・八分爲難治、至九分爲死證。……准此。照得、……罪囚患病、今江南、一分至三分之病方報一分、四分之病方報二分、五五分六分報作三分、七分報作四分、以此誤人性命。……官醫提舉司講究得、罪囚、初病作二分申報、增至九分爲死證。これによると、獄に拘留されている囚人が病氣にかかると、病氣の分數では十分中の「二分」として表し報告することになっており、以下「七分・八分」は「難治」と、「九分」は「死證」と呼ばれる。この分數による報告がいいかげんになっていた。それを正しく實施するよう通達したのがこの史料の要旨である。

一〇九六 諸て、獄囚、病あらば、主司實<sup>(2)</sup>を驗べて醫藥を給す。病重き者は、枷・鎖・杻を去りて、家人の入侍を聽<sup>(3)</sup>す。職事・散官五品以上は、二人の入侍を聽す。惡逆以上を犯す、及び強盜して死に至らしむ、奴婢の主を殺す者は、醫藥を給するのみ。

(1) 『元典章』卷四〇、提牢、提控見禁罪囚、同じく究治死損罪囚が前半部に關連する。

(2) ここでは、司獄あるいは提控牢獄官を指すと思われる。

(3) 『元典章』提控見禁罪囚には「病重者、應許親人入侍及合疎枷鎖召保者」とあり、同じく究治死損罪囚には「遇有疾病、則罪輕者召保、罪重者令醫看治、仍令親屬入侍」とある。重病であれば、獄具をはずし、家屬が獄に入るのを許す意。

(4) 職事官と散官。官員として實際の職務を伴うものが職事官であり、一品から九品までの官品・品階を表すのが散官。

【解説】 囚人が病氣になった場合の規定で、醫藥が支給され、重病であれば、獄具を解き、家屬が獄中に入り看病することが許される。五品官以上の官員であれば、二人獄中に入ることが許される。ただし、一部の凶惡犯罪の場合は、獄具を解いたり、家屬が入侍することとは許されず、醫藥を給されるのみであった。『唐律』卷二九・斷獄五・囚應給衣食醫藥而不給が關連條文である。

一〇九七 諸て、有司、在禁の囚徒饑寒し、衣食時ならず、病あるも醫を督して看候せず、枷・杻を脱せず、親人をして入侍せしめず、一歳の内、死するもの十人以上に至る者、正官は笞二十七、次官は三十七、職に還す。首領官は四十七、職を罷めて別敘し、過を記す。

【解説】 本條は、路・府・州・縣の獄囚管轄者として責任を負う官員（おそらく提控牢獄官）が、責任を怠った時の處罰規定である。

提控牢獄官は、正官・首領官が交替で充てられるポストであることからすると、路では正官は同知、治中、判官、推官を指し、次官は正官の中の同知を指すこととなる。「還職」とは、提控牢獄官の任を解かれ、本來の正官・次官の任に還る意であろう。また首領官については處分はより重く、笞刑を處せられた上、提控牢獄官のポストを解かれ、別ポストに遷された上で、解由に罪過について記された。

一〇九八 諸て、孕婦罪あらば、産後百日にして決遣す。臨産の月、召保せしむるを聽す。産後二十日、復た追して入禁せしむ。保なき及び死罪を犯す者は、産時に婦人をして入侍せしむ。

(1) 『元典章』卷四〇、繫獄、孕囚産後決遣が同内容である。

【解説】 妊婦が罪を犯した場合、出産後百日経ってから刑を執行する。産月になると、妊婦を獄から出して、身元保證人の處で出産させ、産後二十日で獄へ戻らせる。身元保證をする者がいない場合や、死刑囚の場合は、獄から出すことは一切せず、出産時に別の女性（産婆）を獄に入れて手傳いをさせる、という規定。『唐律』卷三〇・斷獄二六・婦人懷孕犯死罪、同じく斷獄二七・拷決孕婦、『明律』卷二七・刑律・婦人犯罪（四四四）が關連條文である。



一〇九九 諸て、死罪を犯し、親の年七十以上なるあり、兼丁の侍養するなき者は、奏裁を陳請するを許す。

【解説】 舊中國においては、一家の子孫を絶えさせること、年老いた父母の面倒を見る子孫が絶えてしまうこと、即ち「戸絶」は出来る限り避けるべき事態であり、たとえ死刑に當る罪を犯した場合であっても、上請して皇帝の裁可を仰ぎ、罪一等を減ぜられるのが慣例であった。六四八條注(1)、七六一條參照。『唐律』卷三・名例二六・犯死罪應侍家無期成丁、『明律』卷一・名例律・犯罪存留養親ともに本條と同趣旨の内容となっている。

一一〇〇 諸て、罪あり、年七十以上・十五以下、及び篤廢、殘疾にして、罰贖する者は、笞・杖一ごとに、中統鈔一貫を罰す。

(1) 『元典章』卷三九、贖刑、老疾贖罪鈔數が同内容である。三

一・三三二條參照。

(2) 七九一條注(2) 參照。

【解説】 『唐律』卷四・名例三〇・老小及疾有犯、『明律』卷一・名例律・老小廢疾收贖ではいずれも、「犯流罪以下」という限定が付いており、本條も同様に考えるべきであろう。

一一〇一 諸て、疑獄、在禁五年の上にして明かなる能はざる者は、赦に遇わば釋免す。

(1) 『元典章』卷三、理冤滯、大德八年(某)月(某)日條、同じく大德十年五月十八日條、同じく卷四、政紀、省部減繁格例の第三條、同じく卷四〇、繫獄、疑獄毋得淹滯が關連するが、本條とは必ずしも重ならない。

【解説】 罪情や量刑が定め難く、裁判の決着がつけ難い案件で、容疑者が獄に拘禁されること五年以上に及んでいる場合は、會赦すれば釋放され、おかまいなしとする、という規定。歴代王朝にとり、全國で裁判案件の處理が迅速になされ、獄中に留め置かれている人間がいなくなる(獄空)は最も望ましい裁判の有り方であった。逆に案件處理が遅延し、獄中に容疑者があふれ、長期にわたって留め置かれている情況は爲政者の威信にかかわる問題であった。

## 平 反

一一〇二 諸て、官・吏冤獄を平反して、應に賞すべき者は、有司より保勘し、廉訪司體覆し、しかる後にこれを議す。その冒濫不實なる者あらば、罪は保勘・體覆の官・吏に及ぶ。

(1) 『元典章』新集刑部、刑獄、詳讞、平反冤獄、『通制條格』卷二〇、平反冤獄の至大四年七月條が同内容である。

(2) 人が無實の罪で裁かれる案件を冤獄といい、誤りを正して、

無實の罪から人を救い出すことを平反という。

- (3) 平反の功による「賞」は、『元典章』に「其吏員、事不干己而能平反者、依上、於應得役上、量進一等遷調」「諸官員、今後如能平反重刑一名以上、陞一等。犯流罪三名、減一資歷、五名、陞一等。名數不及者、從優定奪。徒役五名以上、減一資」と見える。

- (4) 路・府・州・縣の官員が審査の上保證する、の意。『明律國字解』に「保勘とは、保はうけあふなり、勘は吟味するなり」とある。本條の「有司」は、『通制條格』の至大四年七月の中書省の劄符では「總管上司保勘」となっており、路總管府の官員に限定すべきかも知れない。

- (5) 『吏學指南』に「體覆。謂究覆虛實也」とある。『元典章』では「體察」に作り、『明律國字解』に「體察は、自身ありきて察するなり」とある。

- (6) 『元典章』には「今後内外官員、果能留情獄訟平反、保勘明白、行移各處廉訪司體覆相同、繳連的本、方許申呈、須具元問并平反各緣由・備細招詞・取到枉勘官吏招伏・本宗公事如何歸結開坐、咨申、詳酌」と詳しく見える。

- (7) 「平反冤獄」を行ったとして、保勘・體覆を経た後、中央に報告された官員に關して、虚偽が発覺すれば、保勘・體覆を行った官員も罪に問われる、の意。

【解説】 本條以下四條は、冤罪の案件を正した官員・胥吏に對しての賞與規定である。『明律』で「平反冤獄」に對應する言葉は「辯明冤枉」(卷二八・刑律一一・辯明冤枉(四三四))である。

一一〇三 諸て、路・府の軍・民の長官、反叛を收捕するに因り、輒に平民を羅織し、室女を強姦し、人口・財産を殺虜し、並びに人の家を覆して、その同僚、能く平民の冤を理し、犯人の罪を正し、その俘虜を歸し、その死命を活す者は、本官の上において一等を優陞して遷用す。凡て職官、能く重刑を平反すること一起以上なければ、等を陞すこと同じくす。

- (1) 『通制條格』卷二〇、平反冤獄の皇慶元年七月條が同内容であり、本條制定のきっかけとなった事件の顛末が詳しく見えてゐる。

- (2) 『通制條格』では路總管と鎮守萬戸となっている。

- (3) 『明律國字解』に「反叛は、反はむほんするなり、叛は他國へ降參するなり」とある。反亂を起こすことが反叛である。

- (4) 無實の人を、手練手管を用いて無理矢理罪に陥し入れること。一〇六七條注(3) 參照。

- (5) 未婚の女性を指す。

- (6) 『吏學指南』に「人口。同居親屬曰人、役使驅賤曰口」とあり、『明律國字解』には「人口と云は父母を除て妻妾子孫なり」

とある。

(7) 人家の人間・家畜・財産全てを残らず奪い盡くし、家を破滅へ追いやること。

(8) 『通制條格』では路の判官が同僚に當るが、同僚とは當該官府の官員全てを指す。

(9) 『通制條格』には「於本官應得品級上、量陞一等」とある。

(10) 一一〇二條注(3)に擧げた史料より、重刑とは死刑であることがわかる。

(11) 一起は一件。

一一〇四 諸て、職官、能く冤獄を平反すること一起之上なれば、一資を減ずるを與う。

【解説】 本條は、一一〇二條注(3)に擧げた『元典章』の内容と合わない。『元典章』では、「減一資」の賞に對應する平反の功は「犯流罪三名」となっている。

一一〇五 諸て、路・府の曹吏、能く冤獄を平反する者は、各道宣慰司・部の令史に於いて補用す。

(1) 『通制條格』卷二〇、平反冤獄の至大元年六月條が同内容であり、本條制定のきっかけとなった案件が見えている。

(2) 首領官の統轄下にある六案の胥吏の總稱。『通制條格』は「衢

州路司吏」のケースである。司吏は、中央の下級官廳と路・府・州・縣・錄事司等地方官廳に所屬する胥吏であり、流外官の末端に位置し、額設請俸胥吏の最下位である(牧野修二『元代勾當官の體系的研究』大明堂、一九七九、三一頁参照)。

(3) 宣慰司の令史と六部の令史(部令史)。令史は、中書省・樞密院・御史臺・行省・宣慰司や六部等の上級・重要官廳に所屬する胥吏で、流外官の最上位に位置し、とりわけ部令史は七品・八品の官へ入流出職する直前の段階にある、高級胥吏である(牧野前掲書一四一―一七八頁参照)。ただし、『通制條格』では「於本道宣慰司令史内、不次補用」とあり「部」字はない。

【解説】 冤獄を平反し得た胥吏に對する賞與としての陞進規定であり、地方官廳の下級胥吏から一足飛びに、入流の下級官員への途が開けている高級胥吏に拔擢するといふものである。

(長井 千秋)

(付記)

『元史刑法志譯注稿(二)』(『東方學報 京都』第六八冊)の四〇〇條(長井擔當)の譯注は、元代においては「見典主」も先買權を有していたことを見落としたため、全面的に訂正しなければならぬ——注(6)(10)(11)の「典主」「業主」、注(13)の「典賣人」

など――。他日を期したい。仁井田陞『補訂中國法制史研究 土地  
法取引法』五九八～六〇〇頁參照。